
やさしい殺人者

早見徒雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やさしい殺人者

【Zマーク】

Z63360

【作者名】

早見徒雪

【あらすじ】

ある都会の片隅で「彼」とささやかな同棲生活を送っていた「私」は、ある日「彼」を付け狙う謎の黒服の「男」に遭遇する。「男」は自らを「殺し屋」と名乗り、ある「依頼」を受けて「彼」を殺すべくやって来たというのだ。そこで「私」は「彼」の命を救うために、その「依頼」内容の真相を探り、「男」に対して一人で必死の抵抗を試みるのであった。ところが事件はやがて「彼」だけではなく、「私」「男」の過去や秘密を巻き込んで、思いがけない展開へ進んでいくことになるのだが……。

プロローグ

これから私が書こうとしている物語は、一種の寓話、単なるおとぎ話にすぎないのかも知れない。

今、私の手には見えない鉛筆が握られ、目の前には見えないノートが置かれている。私はここにあの事件についてのすべてを書いていこうと思っている。

別に誰かに読んでもらうために書くのではない。何より自分の記憶や感情を整理するために記すのだ。時がたてば、私はことの仔細を忘れ、記憶を自分の都合の良いように捻じ曲げ、美化してしまうかもしれない。それは嫌だつた。また今後様々な憶測や噂から、まつたく無関係な第三者による誹謗や中傷にさらされるようになつて、その為にあの時の気持ちを封じ込め、あの時の感情に嘘をつくことになるかもしれない。それも嫌だつた。以前の私ならば、ただ流されままに、それらを受け入れることになつたかもしれないが、あのことだけは、できる限りありのままを残したい。だからあえて、あまり思い出したくないこともすべて書き記そうと思う。

そう、「すべて」を書き記す。……何故、空想のノートと鉛筆を用いるのかという理由がここにある。なぜなら私は、の人たちには「すべて」を話していないからだ。そして、これからもの人たちには「すべて」を話すつもりはないからなのである。

の人たち……警察の人間には。

私が今いるのは、いわゆる留置所という場所なのだ。私はあの事件が原因で、逮捕され拘留されている身の上なのである。私は法的に罪を犯した人間なのだ。

その罪状は、

殺人。

私が「彼」を死に至らしめたのだ。

もちろん、私はどんな処罰も厭わない。たとえ死刑の判決が下さ

れようとも、それを受け入れるつもりでいる。また決して弁解や後悔の念で、これを書こうとしているのでもない。

ただ、警察には話すことのできないいくつかの「真実」がある。これは私が口外しない限り、誰にも知られるはずのことである。それらを忘れてはならない。それらをしっかりと心にとどめておかなくてはならない。そしてそれを正しく記すためには、あの事件のこと、私と「彼」のこと、それらすべての出来事をきちんと記述していくかなければならないのだ。それはかなり長い物語となるだろう。私にはそれらを綴る文才があるとは思えないが、でも空想上の世界でなら、それは苦にはならないだろう。時間はまだ有り余るほどある。一字一句、何度も反芻しながら、しっかりと刻み付けて行きたいと思っている。

今度のことはたとえ誰かに話しても、非現実な話と思われるだけかもしれない。ならば、無理に信じてもらえない。私が特定している読者は、「彼」、ただ一人だけなのだから。すなわちこれはある意味、「彼」に捧げるためだけの物語なのである。

もし「彼」に出会うことがなかつたら、今の私は存在していなかつたのではないだろうか。

……。
どこから書き始めるべきか迷つたが、やはり、あの冬の日の朝からこすることにした。私はあの頃、己が作った粗末な箱庭の中にいて、そしてそこでの生活が永遠に続くものと信じていたのだった……。

その一

ゆうべつと、できる限りゆうべつとまぶたを開く。頭はもうすっかり冴えている。もう一度と眠りに落ちることなどできないこともわかっている。でもまだ……。冬の朝。まだ暗く、冷たい一月の朝。私はその日もまた、布団の中でもなしい抵抗を繰り返していた。長い長い、それでいて実は、ほんの一瞬の心の葛藤。

やがて無慈悲なアラーム音が、小さく鳴り出した。まだ二コール目ぐらいで、すばやく、そつとそれを止めた。私には選択の余地はない。答はあらかじめ決まっているのだから。

もうかなり前から、目覚ましがなるよりも早く起きてしまう習慣が身についてしまっていた。起きる時刻はほぼ毎日決まっているのだから、体がそれに順応しきってしまったのかもしれない。前の晩にわざわざアラームをセットするのも、無駄な行為のように思えた。だが夜になれば、私は目覚ましをセットして眠ることだろう。そして次の日もその次の日も。このことをずっとじずっと続けていくことだらう。……たぶん。

たぶん……？　たぶんだって？　ここに物事に対してもすべて断定してしまうことを、どこかで恐れている私がいた。なんだか少しおかしくなって、私は寝たまま小さく肩をすくめる。

相変わらずねあなたは。

と、ここでもうひとりの私が顔をだした。

でも、今日は……今日はいつもと違うよつな気がしない？
私の問いかけに対して、別の私は笑つて答える。

あなた、昨日も一昨日もその前もそのまた前も、そう言つていたわよ。そして明日もあわつてもその次もそのまた次も、そう言うんでしうね。

違う。違うわ。違うのよ。なんだか今日は……今日は……

……たぶん。

たぶん、ね。

と、ここでまた笑われた。

さあ、おしゃべりはおしまい。早く布団から出て、朝ごはんの用意をしなくつちや。……彼のために。

彼のために……。そうだ。もう答は決まっている。私は暖かい布団に後ろ髪を引かれながらも起き上がり、すぐそばで目覚ましの音にも気づかずに熟睡している彼を起こさぬよう気をつけながら、すばやく猫のように台所へとすべりこんだ。

フローリングの床の冷たさが、一晩かけて培われた私の体のぬくもりをすべて奪い去ってしまった。私は小さく震えながら、ケトルに水をいれてコンロの火をかけた。勢いのよいのは初めだけで、すぐには小さくかぼそくなった炎がケトルを暖めだした。これでもこのコンロにしてみれば、精一杯の強火のつもりなのだろう。

もつとキッチンが広かつたらよかつたのに。と、いつも私は思っていた。単身者専用に作られたと思しきこのキッチンは流しも狭く、コンロも一台しか置くスペースがない。だからまずお湯が沸くのを待つてから、次にお味噌汁を作り、それから炒め物にとりかかると、いつ段取りを踏まねばならず、手間も時間もかかり過ぎてしまうのだった（炒め物が終わるころには最初の湯はすっかり冷め切っているので、また暖めなおさなければならない）。しかもこの季節、こんな寒い場所で立ちっぱなしで待つていなければならぬなんて、冗談じゃない。

この次の給料日には、電気ポットかホットプレートを買おう。本当は電子レンジがよいのだけれど。そうなれば朝晩の料理がだいぶ楽になる。でも、これ以上電気製品が増えたら、アパートのブレーカーが落ちたりしないだろうか。すでにこの段階でさえ、何度か停電になつたことがあつたのだ。アンペアだかボルトだかわからないけれど、電力を上げる工事つて、どれほどの費用と手間がかかるものなのだろうか。安くすばやく済んでくれればよいのだが。そうで

なければ、また彼が機嫌を悪くしてしまつだらう。部屋の電力を上げることが、無駄な行為でないといふことをどのように説明すればよいのか、私は見当もつかなかつた。

ケトルがシコンシコンと景氣よく湯気を立て始めた。あわてて口からそれをはずして、タベの残りのお味噌汁が入ったなべを出す。やれやれ。もう何も考へないようにしてよ。どうせ答へなど出ないのだから。いや、答へはあらかじめ決まつているのだ。何も変わらない。何も変るわけがない。彼のお給料と私のバイト代で買えるものなど、たかがしれている。それにきっと彼は、もう次の給料の使い道を決めてしまつっているに違いないのだ。生活に関する支出は、私のバイト代から賄わなければならない。そうだ、私がほんのちょっと我慢すれば、わがままを言わなければ何とかなつていいのだ。私は考へることを止めて、黙々と朝食の準備を進めることにした。

居間に戻つてコタツの上にお皿やお椀を並べた。結局今朝のおかずは、お味噌汁と目玉焼き。考へのを止めたときは、どうしても一番簡単な献立になつてしまつ。むらたに冷蔵庫からお新香（これも昨日の残り）とふりかけを出して、とりあえず準備完了。後は彼を起こして、「ご飯とお味噌汁をよそうだけだ。もつとも、彼を起こす、彼を布団から引きずりだすといつのが、毎朝の一番の大仕事なのが。

「哲ちゃん、哲ちゃん」

彼の方を何度も大きくゆすつた。彼は「ああ」とか「うーん」とか、声にならない声をあげて、なかなか起きよつとはしなかつた。

「哲ちゃん、早く起きて。お味噌汁冷めちゃつよ」

「あ、ああ……。うーん」

と、今度は私に背を向けるよつに寝返つをついた。

「哲ちゃんつてば……」

「うつさいなあ……。いこよ、いらねえよ、朝メシ……」

「駄目だよ、哲ちゃん。ちゃんと食べないと」

「駄目だよ、哲ちゃん。ちゃんと食べないと」

「……」

「……哲ちゃん」

「別に毎朝ちゃんとつくるこたあねえんだよ。朝飯なんてさあ……。
それよか、もう少し、寝かせてくれよ……」

一緒に暮らすようになつてからはじめて知ったのだが、世の中に
は毎朝ちゃんと食事をしないで、そのまま学校なり会社なりに行つ
てしまふ人が本当に存在するのだつた。私にはそれがどうにも信じ
られないでいた。私のように、あんな家庭で育つた者ですらも、朝
食だけは家族全員でちゃんとついていたというのに。彼に言わせれ
ば、自分は低血圧だから、朝は弱くて食欲もわかないのだということ
とだが、その実单なる宵つ張りなだけで、夕べも遅くまでゲームに
熱中していたらしく、見ればテレビの側には無造作にそのソフトが
転がつているのだった。

私はあきらめずにもう一度声をかけた。

「もう、哲ちゃんてば、早く起きてよ。ねえったら、哲……」

と、私がまた彼の肩に手をかけたとき、背を向けていた彼はいき
なりその手をつかんで、ぐいと自分の方へ引き寄せた。私はそのま
ま彼に覆いかぶさるように倒れてしまつ。そして彼は振り向きざま
に、下から強引に私の唇に自分のそれを合わせてきた。彼の唇はか
さかさに乾いていて、その感触もただ痛いだけであった。私はすぐ
に離れようともがいたが、いつのまにかもう一方の手が私の後頭部
を押さえ込んでいて動けない。彼はそのまま体勢を回り込ませて、
いつしか彼が私に覆いかぶさるようになつていた。その舌が無理や
り私の口をこじ開けようとしている。さらに今度は、さつきまで私
の手をつかんでいた方の手が、私の胸の辺りを撫で回し始めた。

「だ、駄目。駄目だよ、哲ちゃん」

なんとか口を離しながら私は言った。

「いいじゃんかよ、な？」

彼の愛撫も彼の接吻も、ただ痛いだけで、苦痛でしかなかつた。

「だめ、駄目だつたら……」

彼の息が荒くなつてきている。私は必死に抵抗していた。

「ゆうべもしたじやない。だから……」

「すぐに済ますからわ」

彼の舌が、私の首筋へと流れてくれる

「……こんなこと、してたら、会社に遅れちゃうよ」

「いいんだよ、……あんな会社なんて……」

「やだ、駄目！」

私はありつたけの力で、彼の体を突き飛ばしてしまった。彼は私がこれほど嫌がるとは思つていなかつたのか、無様にその場にしりもちをついて、あっけにとられた顔をしていた。

「……！」

だがそれはほんの一瞬のことだつた。彼はすぐに不貞腐れてまた横になり、布団を頭からかぶつてしまつた。さらにいかにも、といった感じの大きなため息までついて。

ため息をつきたいのはこちらの方だ。体の中から怒りと恥ずしさがこみ上げてきた。だがそれを表に出すわけにもいかない。せつかく作った朝食が無駄になつてしまつ。私は何とか理性の力で、それらを押さえ込み、自分の服装の乱れを急いで直した。

「哲ちゃん……」

「わかってるよ。うるせえなあ。起きるよ。起きりやあいいんだろ」
彼はぶすっとした表情で大声を上げ、布団を蹴り上げて立ち上がつた。わざと大股で歩いて、コタツの中に入り込むとすぐにはテレビのスイッチを入れた。私は彼の布団を大急ぎでたたんで、彼の対面に座ると「ご飯とお味噌汁をよそおつて彼の前に並べた。彼はわざと私の方を見ようとはせず、テレビに集中している振りをしながら、ゆっくりともそもそも朝食を口に入れ始めた。

本当はテレビを見ながらの食事など止めてほしかつたのだが、あえてそのことは口には出さなかつた。とにかく今日もなんとか彼をこの朝の膳に座らせることができた。それで十分だつた。それにこの不機嫌な素振りも、彼の单なるポーズでしかないことも、私は知

つて いる。

彼はこれでも私より年上なのだが、なかなか自分の思い通りにならないことがあるとすぐに、拗ねたり甘えたり不貞腐れたりと、まるで幼子のような態度をとる。特に最近はそれが顕著だった。実家にいたときもそうだったのだろうかと考えることもあるが、結局のところ、何事につけいつも私の方から折れてしまふような態度が、それを冗長してしまったのだろう。なにしろ私には、勝手にここに居座ってしまったという負い目がある。ここを追い出されてしまっては、私には行くあてがないのだ。

食事は淡々と進んでいった。その間、二人は一言も口をきかなかつた。彼はときたまテレビのチャンネルを変えたりしていたが、やがてすっかり食事を終えると、ごりんと横になり、続いてタバコを吸いはじめた。寝ながらタバコを吸うことに対しても思うことはあつたが、何はともあれ今日も残さずすべて食べててくれた。なんだかんだいっても、そのことが私にはうれしかつた。

私もあたふたと自分の食事を済ませ、食器を片付け始めた。彼はタバコを吸い終わると、のろのろと起き出して出勤の準備に取り掛かりはじめる。もう後はお決まりの段取りだ。ひげをそり、歯を磨き、パジャマを脱ぎ捨てて、適当にスーツとネクタイをそろえて身づくりを整える。あまり時間はないはずなのだが、動作はどこか緩慢だつた。言いたいことは山ほどあったが、それは彼にとつても同じことだろう。

「じゃあ、行くから」

彼が次にやつと口を開いたのは、もう玄関で靴を履き始めていた時だつた。そこで私はいつものように、こいつ尋ねた。

「今日は、遅いの？」

「……まあ

それに対する彼の返事は簡単なものだつた。

「……そう

私もただ、それだけ返した。

「いつてらつしゃい

「あ、……ああ」

彼が外へ出る。私はサンダルをつっかけて、後に続いて見送りに出た。彼はもう私の方は見ずに、大儀そうに中途半端に右手を上げただけで、そのまま駅に向かつて歩いていった。

もつと話したいことがあるはずではないのか。
もつと聞きたいことがあるはずではないのか。

私が彼のアパートへ転がり込んできてから、半年ほどたつていた。望まれて一緒に暮らし始めたわけではないから、このようになつてしまふのは仕方がないことなのかも知れない。それでも最初のうちは一人の間にコミュニケーションのようなものはあつたし、それを作ろうとする努力もあつた。それがまたくなくなつてしまつたのは、いつからだつたろうか。彼の方が私を避けようとしているような気がするのは、考えすぎなのだろうか。

何も言わなくとも、何も語りあわなくとも、本当に心から分かり合えるカップルもいるかもしれない。だが、私たちの場合は逆だ。言わなければならないことを黙つているうちに、言つてはいけないことばかりが口に出ようとしていた。そしてそれが、つい漏れてしまう事が恐ろしくなつていていたのだ。それでこの関係が壊れてしまうのが怖いのだ。特に私は、それを非常に恐れていた。

でも、このままではいけないこともわかっている。まだ、遅くはないのだと聞いたかった。二人でじっくり話し合う時間を持とう。そうすれば彼だつてきつとわかってくれるはず。そしてお互いに至らぬ点を直していこう。私はこれからも、彼と一緒に生きて行きたい。そのためだつたら、どんなことでもするだろう。そう思つていた。

あの家には一度と帰りたくない。

の人たちの顔など一度と見たたくない。

とりあえず、結論は先送りとした。私は振り返つてアパートに戻らうとした。

と、その時。

遠くに一人の男性が目に入った。

このあたりは同じ管理会社のアパートが均等に並んでいて、その真ん中を突つ切るように大きな砂利道が通っている。私たちの部屋はその並びの一番はずれにあるため、駅の方へ向かうには、まずはこの道をまっすぐ通り過ぎていかねばならない。そしてこの通りのほぼ真ん中に位置する辺りに男が立っているのだった。側のアパートの壁にもたれかかり、両の手をポケットに入れたまま寒そうにたたずんでいる。

こんな時間に、こんなところで何をしているんだろう。私はそう思つた。おそらく誰でもそう思うに違いない。

なにより目を引くのは、その男の服装である。コートもズボンも靴もすべて黒、黒黒黒の黒一色だつた。さらに黒い帽子を口深にかぶつているため、顔の表情もほとんどがい知ることはできなかつた。いつたいいつからそこにいたのだろう。次第に明けてきたこの風景の中で、男が立つている位置だけが暗く、異様な雰囲気も立ち込めていた。

やがて彼がその男の前を通り過ぎた。すると黒い男はゆっくりとゆっくりと動き始めた。手は相変わらずポケットに入れられたままで、背を丸め、体を小さくかがめるようにしながら、彼の後に続いて歩き出した。まるで彼の後をつけ始めたようであつた。

尾行　　。あまりにも不自然な行為であつたが、私にはそんな言葉しか思いつかなかつた。

もしそうだとしても、だが、何故？

彼の方は、そんな男の行動にはまったく気がついていない様子だつた。男はそのまま影のようについて歩いていった。私は大声で彼にその男の存在を知らせたかつたが、それより前に彼は通りのつきあたりまでたどりついてしまい、右に折れて見えなくなってしまった。

やがて男もその突き当たりにたどり着いた。だがすぐには曲がる

うとせず、その場に少し立ち止まつていた。

そして、その後。

男が、私の方へ、ふりむいた。

かなり遠く離れていても、そんな状態であつても、何故か私を見ていることだけは、はつきりわかる気がした。

さらに、男は。

笑つた。

「……」

それからまたゆっくりと、やはり彼の後を追つかのよう、右に曲がつて見えなくなつた。

はつきりと確認したわけではない。何度も言つが、遠かつたし、帽子のせいで顔の半分は隠されていた。

だが笑つたのはわかつた。わずかはあるが、唇が確かにゆがめられた気がする。はつきりと私を認識した上で、そんなしぐさをしてみせたのである。

私の体の中から、何かがつきあがつてきた。体の震えがとまらない。もちろん冬の朝の冷たさのせいではないし、それどころか、恐怖とも違ひ感情のうねりだつた。

ざわざわと指先にまでみなぎる緊張。あの男の存在が、何かを私に伝えている。これはいつたい何なのだろう。

……いや、私にとつてこの感覚は初めてのものではない。

ずっと暮らしてきたあの家を出ようと決意した時。

勤めていた会社を辞めてしまった時。

そして、彼に抱かれた時。

期待と不安、希望と絶望。予測できない、漠然とした思い。その後の私は、いつも今までの自分とは違う自分になつていた。

私は悟つた。そうこれは、それまでとは何がが大きく変わることの予兆のようなものでないのか。虫の知らせ、という言葉もある。それとも単なる私の考え方すぎなのであろうか。

でも、と一方で私は思つ。あの男を見かけた時、あの男の笑みを

見た時、何故この感覚が感じられたのであろうか。私は勘の鋭いほうではないし、予知能力に長けているわけでもない。

あの男の存在が、私に何か大きな変化をもたらすとでも言つのか。だが一体……どんな？

私にはわからなかつたし、もはや当の男の姿もどこにも見えない。私はしばらくの間、ただ、その場に立ち尽くすだけなのであつた。

その二

現実の生活という大きな壁の前には、私のちっぽけな空想など、いつも簡単に吹き飛ばされてきたものだ。

しかし、今回に関しては違っていた。アパートに戻つて洗い物をしている時でも、バイト先のコンビニへ向かっている時でも、こうしてレジにたつている時でも、私の心中にあの黒服の男の姿が焼きついて離れようとはしなかつた。

あの男は一体何者なのだろう。何故、彼の後をつけるようなまねをしたのか。あの時の笑みの意味は……。それにしても、どうしてあんな異様な格好をしているのか、それともすべては単なる偶然で、私の見間違いだったのかも……いや、しかし……。

はつきりとした答えの出るはずのない問い合わせほど、いらっしゃせるものはない。

ずっとぐるぐると同じような問答が、頭の中を駆け回っている。もはやこれだけで私はしさか疲労を感じ始めていた。これからが忙しくなる時間帯だというのに。私はまわりに気づかれぬようにそつと息をついてから、顔を上げた。

近くに大学と高校があり、アパート・マンションもこの近辺に集中しているせいか（ちなみに私たちのアパートも歩いて十数分程度の場所にある）、お昼から夕方、すなわちお昼休みから下校時間を過ぎたあたりまでの時間帯の、この店の込みようは半端なものではない。一つしかないレジをそれぞれフル稼働させても、店の中をぐるりと輪を描くように入る人の列が並んで、それが絶えることがない。目の回るほどの忙しさとは、このことをいうのだろう。

どうも人が大勢いるところが苦手な私にとって、この時間帯の人口密度の高さは拷問でさえあつた。さらに加えていつ果てるともわからないレジうちの業務で、バイトが終わることには、身も心も朽ち果てそうになるのが常であった。だが今日は、もう開始直前から

精神がなえてきていいるのである。 やれやれだ、まつたく。

だからといって、この仕事を辞めようとか、手を抜いて樂をしようとなどと考えたりはしなかった。別にバイトをコンビニに選んだのは、深い考えがあつたわけではない。アパートから大して離れていないし、時給も悪くなくて、たまたま募集の張り紙を見て決めたに過ぎない。でも、何か資格を持つてはいるわけでもないいい年をした女が始める仕事としては、こういう接客業が一番手っ取り早かつたのだ。それにこの手の店なら、バイトの過去や素性について、あれこれ詮索されないだろうという読みもあった。きちんとそれなりに仕事をしていれば、それで文句はないはずである。また仕事であるのだから、きちんとなしなければ、とも思っていた。

やがてぼつぼつとお客さんが入ってきたかと思うと、いつの間にか店の中はいろいろな人たちでごった返すようになつっていた。学生、主婦、サラリーマン、人ごみの中を危なつかしく走り回る子供たちに、人の流れをせき止めてしまつお年寄り。目的のある人ない人様々だが、今の私の仕事は人間観察などではない。ただの会計係である。私はそれに集中することにして、次々と並んでいるお客の一人一人を処理していく。まるでレジうちの機械になつた気分だつた。相手に関心を持たず、何も考えず、ただ出された商品をスキヤンし、値段を読み上げお金をもらう。おつりの間違いだけ気にしていればよかつた。

ところが、何の気なしにたまたま店内に入ってきた一人の客を目にした時、たちまち私は機械から生身の普段の自分へと引き戻されてしまつたのである。

あの男だ。

間違いない。いや、見間違うはずはない。今朝の謎の男である。全身、黒黒黒の黒ずくめ。ちらりと垣間見た感じでは、シャツや靴下までも黒のようであった。私の立っているレジから入り口まで、それほど離れていないからよくわかる。それにまた、先ほどは気がつかなかつたのだが、近くで見ると驚くほど背が高い。やや猫背氣

味ではあつたが、二メートル近くはありそうだ。

男はゆっくりとした足取りで店の中を歩き始めた。ほかの一般的な客のように、雑誌のコーナーで立ち読みしたり、パンや弁当を物色しながら立ち止まつたりといふこともなく、しばらくの間、ただ歩き回っていた。一步一步、その足取りを確かめるかのように。男の顔はまっすぐにその進行方向を向いたままだ。自分の目的のものを探しているところ風でもない。いろんな人で雑然としている店内を、静かにスローモーションのように歩いている。それにあれほど目立つ出で立ちでありながら、誰もあの男には注意を払っていないのが不思議だった。まるで私にその姿を見せ付ける、ただそれだけのために徘徊しているかのようだ。見える人にしか見えない、幽霊のような存在。事実、私は男の姿が気になってしまい、またその動きから目を離すことができずにいた。そして何故あの男がこの店に来たのか、私には理解できずに困惑していた。

「ちょっと！ お釣り足りないわよ！」

耳障りなその金切り声に、はつとしてすぐ正面を見てみると、小太りで眼鏡をかけた女性が、きっと私の方をにらんでいる。周りの空気が、一瞬きゅっと萎縮した。片手に丸く膨れ上がったうちの店のビニール袋を持って、もう一方の手のひらにレシートとお札交じりの小銭を乗せて突き出していた。

「え、あっ、あの、何でしょう？」

不意をつかれて、とんちんかんな受け答えをしてしまった私を見て、相手はその太い眉をさらに吊り上げた。

「なんでしょうじゃないわよ。あたし今、一万円札を出したじゃない、なんでお釣りがこれだけなのよ。五千円足りないじゃない」

声がいつそう高くなり、頭に響く。レジ画面にはまだその会計跡が残っていた。食料品やら雑貨やらがずらりと並んでいて、合計金額は三千百三円。預かり金をみれば、五千円となっている。

「あの。でもお預かりしたのは五千円のはずじゃ……」

「馬鹿言わないでよ。わたしは一万円札を出しました。あなた何を

見てたの」

私が見ていたのはあの男だった。なんということだらう。私はそちらに気をとられていて、この客が何を買ったのかも、いくらお金を払ったのかも、まったく覚えてはいなかつた。無意識にすべてを処理してしまつたらしい。さらに悪いことに、預かつたお金までも、もつすでにレジの中に納めてしまつたようなのだ。

「何をぼうつとしているの。早く五千円返しなさいよ！」

店中の視線がここに集まつてきているのがわかる。普通こういった場合には、いつたんレジ業務を中止した上で、店長なり別な社員の立会いの下で、中のお金と記録されたお金の額を照らし合わせてみるとことになつてゐる。だがこれはかなり時間と手間を必要とする作業なのだ。当然、このレジは停止せねばならない。その間、この女性をはじめ、他のお客様にも待つてもらつか、別のレジに並びなおしてもらわなければならなくなるのだ。まだまだ客の入りのピーク時は過ぎてはいない。さらに大きな混乱が予想され、胃が締め付けられる思いがした。それになにより、私には自信がなかつた。もし本当にこの女性の言い分が正しかつたとしたら？ この手の客が黙つているはずはない。さらに混乱は大きくなるだらう。私は怖かつた。なんて時に、なんてミスをしてしまつたのだろう。

私の目は誰かの助けを求めてさまよい始めた。店長の姿は、ざつと見たところ店内のどこにも見えなかつた。おそらく裏で品だしか何かを行つてゐるのだろう。私は隣のレジを見た。そこの一人は忙しそうに客をさばいてゐる。この状況が伝わつていなければないと思われるのだが、私よりも古株のはずの二人は、変に係わり合いになるのを恐れていいるかのように、ことさら自分たちの客に集中しようとして、壁を作つてしまつていた。

女性の後ろには、こちらも何人も順番待ちをしている客たちがいる。誰もみな、非難と同情の入り混じつたような目でこちらを見ていた。もちろん、私を助けてくれようなどとは、誰も考へてはいなだらう。私はすぐ隣で袋づめをしていた同じバイトの女の子を見

た。すぐ側にいるのだから、お金のやり取りも見ていたはずだが、駄目だった。客の剣幕に押されてか、下を向いてしまっている。早くこの身に降りかかる災難が、過ぎ去ることを願い、石になつている。だがそれは私も同じ思いだつた。次第に私はひとり追い詰められていつた。

「……どうも申しわけありませんでした」

結局、私はレジの中から五千円札をだして、そのまま手渡してしまつた。相手はぐどぐどとしつこく悪態をつきながらも、やつと帰つてくれた。私はすぐに何事もなかつたかのように、次々と残りの客の応対を始めた。だが頭の中は、怒りと後悔と自己嫌悪とがぐるぐる混じり合つていた。何もかもかなぐり捨てて、一人になりたかつた。

もう何もしたくないし、考えたくはない。だが私はこの場を離れることはできない。仕事が終わるまで、まだまだ時間はあつた。この業務をこなすことが、私の義務なのだ。店内には相変わらず多くの人がたむろつていた。しかし誰一人として、私を助けてくれる人などいないのに。

そうだ。あの男だ。元はといえば、あの黒服の男が現れたからなのだ。あの男のせいだ。だんだんと私の怒りの矛先は、そちらへと向けられていつた。

「さつきの……アレ……ちょっとマズかつたんじゃないですか」

消えいるようなか細い声が隣から聞こえてきたのは、やつとレジに並ぶ人が途絶えてしばらくしてからだつた。

「さつきのつて？」

私がそう言つて隣を見ると、相手は下を向いてまた固まつていた。必死に自分の心の奥底へ沈めようとしていたものが、また全身に再び侵食し始めているのを感じていた。

「あの……さつきのおばさんの……お金……」

声はさらに小さくなつたが、私ははつきりと聞き取ることができた。

確かに近くの大学に通う女子大生だと聞いたことがある。夕方や夜ではなく、日中のこの時間帯に学生が入ることは珍しい。そのせいかいつも小さくなつていて、私を含めた他のパートの人たちに対しても、どこか遠慮ぎみに距離を置いているように思えた。

「ああ、さつきのこと。……でも、アレは、あの場合は仕方のないことだつたじやない」

「……でも……」「

と、ここではじめておずおずと上田遣いに、私の方を見た。何ヶ月も一緒に仕事をしてきているのに、この娘の顔をはつきりと見るのは、これが最初のような気がする。それほど印象の薄い少女であった。そして今はその田の奥に、非難の色が見え隠れしていた。
…勝手にお金を渡してしまうなんて……。

あなたに私を責める権利があるというの。あの時、かかわり合いで恐れて、小石のように固まっていたのはビビの誰かさんでしたっけ。

「大丈夫よ。もし清算の時にやつぱり五千円足りなくなってしまつたとしても、それは私が起こしたミスだから。私が責任を取るわよ。あなたは何も心配しなくていいのよ」

私は「私のミス」というところを強調して、できるだけ明るく笑顔で答えた。

「そうですかあ。……なら、いいんですけど……」

いいわけないじゃない。

私は怒鳴りつけてやりたいのを抑えて、つとめて冷静な振りをした。相手はまた視線をそらして、私との間に大きな壁を作つてしまつた。

以前、町で偶然この娘を見かけたことがある。同年代の男の子を含めた何人かのグループで、通りのはずれでなにやら騒いでいた。大きな声でケタケタ笑いながらお喋りをし、煙草も手にしていたと思う。今のような、この仕事場での姿とはあまりにもかけ離れていたので、最初はこの目が信じられなかつたものだ。

きつとあの時の姿が、本当のこの娘の正体なのだろう。ただ、ここでは猫をかぶり、責任やつらいことから逃れるために子供ぶつて、さらに本心をひた隠しながら、ひたすらバイトの終わる時間を持つている。心は常にここではないどこかへと、飛び立っているに違いない。

私はついまたまと、横目でその顔を見ていた。軽くパーマをかけたショートヘア。やや面長の顔立ちだが、整えられた眉に細い目、高くとがった鼻と小さな口。よく見れば、薄いメイクもしているようだ。耳にはピアスをついている。背は私と同じくらいだが、やせていてすらりとした体形だった。なにより、美人だな、そう思える雰囲気がかもし出されていた。

ボーイフレンドもきっといるのだろう。甘えたしぐさも似合いそうだ。その指の指輪は、彼氏からのプレゼントなのだろうか。

でも、社会に出れば、あなたののような態度では通用しないのよ。そう私は言つてやりたかった。とても厳しくとてもつらいものなのよ。すると、そんなことはわかっている、と返されるかもしれない。だから、今を楽しんでいるのだと。

今を楽しむ……私にはできない生き方だ。

というより、できなかつたと言つべきだろう。今も昔も、時がたつのを忘れるぐらいに遊んだり、思いつきりその時その時を楽しんだりした記憶などない。私がうらやましいと思つたのも事実だ。私は人に甘えたことなどなかつた。いや、甘えさせてはもらえなかつたのだから。

私は幼い頃から、行動や言動に関する責任を、自分でとらされてきた。それは子供の自主性を重んじていたように見えて、その実はまったくの逆であった。の人たち 私の両親たちは、自分の子供を思いの通りにコントロールしようとしていて、無理な要求を私に押し付け、その成就を私に強いたのだった。あくまで決定権は両親にあり、なにをするにも厳しい目が光っていた。それでいて、その結果の不始末は全部私がとらされた。私の怠惰と傲慢が、失敗の

理由であるというのだ。そんなことが積み重なつて、私はあの人たちの望む人間には決してなれないまま、成長していったのだった。

そのためかもしれないが、私はいつしか何に対しても誰に対しても、強い負い目を常に感じるようになつてしまつた。その人の嫌われないよう、その人の望むように行動しようとする。いつも相手の顔色を伺い、たとえ相手から今日のようにひどい仕打ちをうけたとしても、笑顔を作り、何でもないのだという素振りを取つた。そうすることで逆に、相手とのかかわりを最小限に食い止めようとしていたのである。かかわりがなければ、責められることもない。そうして私はずつといつどもどこでも誰からも、逃げて逃げて逃げ続けるようになつていた。

そして……いつか、彼からも……。

「いらっしゃいませ」

お客様の気配がして、私は仕事モードに戻つた。またレジうちの機械になることにしよう。先ほどの出来事はあくまで特別なのだ。いつもこんなことばかりではない。ただこの日に限つて……たまたま……。

私はまた固まつてしまつた。

目の前にあの男が立つていたのだ。

「……」

私は茫然と男を見ていた。まさに手が届く距離に立つている。間近で見ると本当に大きい。ただ全体にやせているためか猫背のためか、それほど威圧感は感じられなかつた。顔は丸く、肌の色はひどく白い。年は二十代の後半ぐらいだろうか。下から見上げていつた私の視線は、やがて男の目の辺りで止まつた。

朝のあの通りの端で、ちらりと垣間見たような目。やはり帽子は深くかぶられていて、長めの前髪に隠れがちであつたが、はつきりと確認することができた。そして大きな瞳はまっすぐ、私を見ていた。そしてそこに哀れみのような色を見たのは、私の思い過ごしであつたろうか。先ほどのあの客とのやり取りを見られたのかもしれ

ないという恥ずかしさが、私の脳裏を掠めたからかもしれない。

「あの……どうかしたんですか」

隣からの声が、私を現実に引き戻した。見れば私たちの目の前には、缶コーヒーがひとつ、ぽつんと置かれている。私はあわてて、商品のバー「コードをスキヤンした。

「いらっしゃり百一十円になります。シールで失礼してもよろしいですか。……恐れ入ります。はい、ちょうどお預かりいたします。レシートのお返しです。ありがとうございました。またお越しくださいませ。……。

もう一度と来ないでもらいたい。

男は律儀にレシートを受け取ると、礼を言つわけでもなく、そのコーヒーと一緒に無造作にコートのポケットに入れ、またゆっくりとした動作で今度こそ本当に外へ出て行つた。レジを離れてからは、私を見るることは一度となかつた。

どうしてあの男はまた姿を現したのだろう。それも今度は、私のすぐ目の前に。あの男の目的は彼ではなかつたのか。彼の後をつけといったように見えたのは、私の早とちりだったのだろうか。それとも……。

ひょっとしたら。

あの男の目的は……私？

……そんな馬鹿な。何を考えているんだ私は。

今度の考えも、何一つ確証などありはしない。あの男は、一度にわたつて私の目の前に現れた。それだけにすぎないのだ。言葉を交わしたわけでもなければ、指一本、私に触れたわけでもない。

ただ。

あの目。

あの目がとても気になつた。

何故、そんな風に思うのだろう。私の単なる被害妄想に過ぎないのか。

何故何故何故……。

頭の中を暗い色をした渦が、すごいスピードで回りだした。渦巻きの中心にあるのは、あの男の目だった。その目はやさしかつたが、冷たく、同情的で、何か確固たる信念があるように思えた。

それからはさらに、もう仕事どころではなくなった。私の顔色は見る見る悪くなつていったに違いない。私がレジを離れるまで、店全体を重い空気が占めているのも感じていた。それでも何とか最後までやりとおすことができたのは奇跡としかいいようがない。肝心な時にいなかつた店長をはじめ、他のパート店員の人たちも負い目があるせいか、表面的にはひどく私をいたわってくれていた。

バイト終了間際のレジ点検で、きつかり五千円のマイナスが出た。しかし私にはそんなことはもうどうでもよく、店長も何も言わず、私のこの日の仕事はこいつして終わった。

全身に感じるだるや。体中の血液が、重油かコールタールにかわつてしまつたかのように、体が重く感じられる。私は店の外でしばらくの間、ぼーっとしていた。帰りたくなかつた。どこかでの男が待ち伏せしているように思えた。アパートへ戻れば、あの男がまた姿を見せるのではないか。あるいは、いきなり通りの向こうから飛び出してくるのではないか。

確かに根拠のないことだ。実際、この位置から見える範囲には、あの男の影すら何処にも見えはしない。先ほどの出来事などは、所詮は單なる偶然であつたのかもしれないのだ。

だが、私の心の中をその影が、夜の訪れよりも早く暗く包み込もうとしていた。

未だ経験したことのないことにに対する怖れ。はつきりとした確証のないことへの不安。答える出ない現状への苛立ち。説明しようと思えば何とでもできる。しかし、そのすべてが正しく、すべてが間違っているように思えた。

わからない。いや、わかりたくない。

私はずっと店の前でぐずぐずしていたが、やがてやつと意を決して歩き出しても、まっすぐ自分のアパートへは向かおうとせず、反対へ反対へ、逆の方角へと歩いていった。そのままぶらぶらと町の中を彷徨つていった。

道の街灯が次々と明かりをつけていく。いつしか日は落ち、辺りもすっかり暗くなつていた。だがまだ時間帯的には早いせいか、学生街でもあるこの周辺は、人の往来が結構あつた。私はその流れの中を、縫うようにして歩き続けていた。

角に来れば意味もなく曲がり、うつむいたまま、のろのろと足を進める。そんな行為を何度も繰り返し、やがて何度もかの角を曲がつた時、私は大学の正門の前にいた。最期の授業が終わつたところ

なのだろうか。何人もの学生が連れ立つて外へ出て来た。私はすぐ側の街路樹の前に立つて、その光景を眺めていた。

一瞬、さつきまでレジで共に仕事をしていたあの娘が、友達を連れ立つて中から一緒に出てきたように見えた。確かにこの大学の生徒のはずである。しかしそれは、ただ髪型が似ていただけの別の女子であった。なにやらささやき合つて、何が可笑しいのか皆でクスクス笑いながら私の前を過ぎていく。あれが最近流行の服装や髪型なのだろうか。このところテレビも雑誌もほとんど目にしない生活だったので、流行に関してはまったくの無知になつてている。私はただ無造作に後ろに束ねただけの自分の髪を、そつと撫でてみた。

もしも進学し、いざれ大学へと行つていたなら、私もある女の子たちのようになれただろうか。あんな風におしゃれしたり、友達とふざけあつたり、楽しい毎日を送れたらうか。

……いや、あの家にいた限り、の人たちと一緒にいた限り、それは無理なような気がした。ずっとずつと悲惨な毎日を送つていたかもしれない。

でもやっぱり……進学はしたかった。特に何がしたい何を学びたいと言うことはなく、また特別な憧れのようなものではなかつたけれど、少なくとも私には、ある自信のようなものを持つことができたはずだ。の人たちに対しても、もつと違つた接し方ができたはずなのだ。でも。

だが結果は、現実はそうではなかつた。私はますます肩身の狭い思いをするような境遇に陥り、の人たちにとつては、自分たちの期待を裏切り続ける酷い厄介者となつた。もしあの頃、彼と知り合つていなければ、どうなつていただろう。彼はそこから逃げる勇気を与えてくれたのだ。でも。

あの頃とどこが変わつてているのだろう。

あの頃と何が変わつたというのだろう。

私は首を振つた。考へても仕方のことだ。

学舎の中に入ろうと思えば入れた。一度はその中を歩いてみたい

とも思っていた。しかし私は向きを変え、外の壁に沿って歩き出した。この場の向こうは、これまでもこれからも私とは別の世界なのだ。はからずも感傷的になってしまった自分を戒めて、もつなるべくここへは来ないよう心に決めた。

私はまたしばらく歩き続けた。結局、どんなにあちこちを逃げ回つても、私の帰る場所はある部屋しかないのだ。頭をかき回し、自分の小心ぶりに立腹しながらも、それでもまだ、私はぐずぐずしていた。いつしか小さな通りのわき道に入ってきた、周囲には誰もいなくなってしまっていた。独りぼっちになっていた。

途端にさびしくなつてしまい、私はやっとあきらめて、アパートへ戻ることとした。こんなところをうろついていても、何にもならぬのだから、と自分に言い聞かせるのだった。広い通りに出るべく、振り返りもと来た道をたどり始めた。ところが。

あの男は、またしても私の前に現れたのである。

見間違ははずはない。私が十四五メートルくらい離れた通りのはずれに、あの男はいた。私がここにいることを知つてか知らずか、まっすぐにこちらへと向かっていた。本当にあの男は現れた。私はあわてて踵を返し、走り出した。

あの男から逃げなければ。

逃げなきや逃げなきや逃げなきや……。

私の足である男から無事逃げおおせるかどうか、自信はなかつた。ひょっとしたら、ずっと尾隨されていたのか。そうでなくとも、私はあの男の姿を見た時、悲鳴あげてしまつたかもしれない。私が走り出したのを、目撃されたかもしれない。

私は走った。走つて走つて走り続けた。

こんなに走り続けたのは、いつ以来だらう。不意にそんなことが頭をよぎつた。いつだつたとしても、その時は何かの目標を目指して走つていたはずだ。だがこの時はそうではなく、はつきりとした

ゴールなど存在しなかった。ただ逃げるだけなのだ。息はすぐにあがり、太ももが張ってきて、かかとが痛くなってきた。でも立ち止まることも、後ろを振り返ることもできない。私の後ろには……。

あの男が追いかけてきているに違いないのだ。

あの男から少しでも遠くへ逃げるのだ。

やがて、なぜ逃げるのかということを考えられなくなっていた。もはや本能的な恐怖で、私は走っていた。

走るスピードが次第に遅くなっていくのがわかる。やはり体力がついていかないようだ。それでも私は何とか気力を振り絞って走ろうとした。汗が流れ、目の中へと入ってきた。私は前がよく見えないままに、すぐ前の角を曲がろうと左におれた。

「いつてえっ！」

ゴチン、という鈍い音がして、目の前を火花のようなものが光った。私ははね飛ばされて、真後ろにドスンと尻もちをついてしまった。頭に激しい痛みがはしる。その痛みに耐え、目じりの汗をぬぐつて前をよく見てみると、そこに高校生ぐらいの三人の少年たちがいた。そしてその中の一人が、私と同じように頭を抱えて座っている。

「……このババアッ！　どこに目エつけてんだよっ！」

その子が私に向かつて怒鳴りつけた。確かに原因は私の不注意だつた。いつも我ながら素直に謝つたろう。だがその時は違つた。あの男に対する見えない恐怖が私をおかしくしていた。早く逃げなければ。私は頭と腰をさすりながら立ち上がり、急ぎ足でその三人の横をすり抜けようとした。

「……待てよ！」

ぶつからなかつた方の一人が、私の手首をつかんだ。

「てめえからぶつかつておいて、謝りもしないで逃げるつもりかよ」
そういうて私の腕をねじりあげ、正面に回りこんできた。顔立ちにはまだ幼さを残していたが、髪を茶に染めてサングラスをかけていた。

「「」、「」めんなさい。急いでいたものだから……。本当に「」めんなさい」

私は腕の痛みに耐えながら、必死に何度も頭を下げた。その時はまだ、この三人よりもあの男のことが頭を占めていた。とにかく、早く開放されたかった。

「謝つたぐらいで済むと思つてんのかよつ！」

別の人気が私の髪をつかんで、強引に頭を上げさせた。謝れと言つたのはそちらではないか。見るとこちらは肩までかかつた長い髪で、ひげも伸ばしていた。

「いててて……。おー痛で。なんて硬い頭していやがんだ、このアマ

倒れていた最後の一人が立ち上がった。頭は丸坊主にしていて、耳と鼻と口にそれぞれ大きなピアスをつけていた。

「おい、大丈夫かよ」

長髪がピアスに声をかけた。

「ぜんぜん大丈夫じゃねえよ。痛てえなあ……。おい、見てくれよ。でつけえ瘤ができちまつたよ」

「どれどれ……。あー、こいつか。こいつはひでえな」

サングラスがピアスの頭をさすつてそう言つた。その間も、もう一方の手は私の腕をつかんだままである。

「いてえなあ。おい、あんまり触るんじゃないよ。……腰もよお、しこたま打ち付けたようでお。いてて。」りや、骨まで折れちまつたんじゃあねえかな」

そんな馬鹿な。それぐらいで折れるはずなどないじゃないか。本当なら立つことだってできないはずだ。ピアスは口元にいやらしい笑みを浮かべ、何やら他の二人に目配せをした。

「そうかそうか。そりゃあ、大変だなあ……。ま、そんなわけだ。だからよ、ちょっと治療費の方もだしてもらわなきやな。こいつのためにな」

この少年たちは何を言つているの？

サングラスが手にさらに力を込めてきた。激痛がして、思わず顔が歪む。崩れ落ちそうになる私を、長髪が髪をつかんだまま引き上げた。

「悪いのはぶつかって来たアンタの方だからな、これは支払うのが当然だな」

長髪は今度は私の頭を押さえ込み、また引き上げるという動作を繰り返した。私はそうやって何度も額かされた。

「おっ、いいつてよ。話がわかるねえ」

「今、持ち合わせがないんだつたら、体で払ってくれてもいいんだぜ」

と言つて、サングラスは私の胸の辺りに手を出した。私は必死になつてその手を振り払つた。

「へへへ。コイツ見かけによらず、けつこいつ胸あるぜ
サングラスが下卑た甲高い声で笑つた。

「どれどれ」

すると今度はピアスがすばやく私の背後にまわりこんで抱きついてきた。両の手で私の胸をわじづかみにし、さらに股間を腰の辺りにすりつけてきた。

「お願ひ、やめて！」

私は体を震わせながら叫んだ。

「おっおっ、結構いい感じじゃんかよ」

「このおねえさん、結構好きモンだぜ。せつかくだから、お言葉に甘えてやつちまおうか」

さらに悲鳴を上げようとする私の口を、ピアスの手が覆つてしまつた。さらに私は三人に捕らえられたまま、ずるずると引きづられていつた。

「おい、足持てよ足」

じたばたと暴れる私の両の足をサングラスが正面から抱え込んだ。多勢に無勢だ。まわりには他に人影も見えない。このままどこかに連れて行かれて、なぶり者にされてしまうのか。嫌だ。そんなのは

嫌だ。誰か、誰か助けに来て。哲ちゃん……。

その時、

風が、

一瞬の風が、

私の頭上を通り過ぎた。

と同時にぶい音がして、私の正面にいたサングラスが、ごみ屑のように吹き飛ばされていった。それから目のが一瞬暗くなつた気がして、別の人間が私の目の前に立ちふさがつたのだった。

その人物こそ、……あの男であった。

あの黒服の男が、いつの間にか私に背を向けた形で、真正面に立つていた。

「……なんだよ、てめえ」

最初に口を開いたのはピアスだった。男はその言葉に応えるかのように、ゆっくりと私たちの方へ振り向いた。ずっと目深にかぶつていた帽子を、くいと上に上げてみせた。

「だ、黙つてねえで、何か言えよ！」

ピアスの体が、私の体を通して震えているのがわかる。精一杯、虚勢を張つているのだが、声はうわずつていた。男はしばらく私たちの方を眺めていたが、ポケットから右手を出して、その長い腕をすばやく伸ばしてきた。私は反射的に目をつぶってしまった。

「ぎやつ！」

悲鳴と共に、ピアスが私の体から離れた。頬になにやら暖かいものがかかる感じがした。私がおそるおそる目を開けてみると、目の前には黒服の大きな握りこぶしがあった。指の隙間からなにやら赤いものが滴り落ちている。見れば、ピアスは口の辺りを押されてのた打ち回っていた。

私はそつと自分の頬にかかったものをぬぐってみた。その手にも赤いものがついた。血だ。私は全身からすううつと血の気がうせていくを感じていた。男はそんな私を見て、かすかに微笑んで見せる、そのこぶしを翻して開いて見せるのだった。その手の上には、

血にぬれたピアスがあった。男は力任せに、相手の唇からそのピアスを引きちぎったのであった。

「て、てめえっ！ なんてことしゃがる！」

最後に残った長髪がどなつた。やはり震えていた。いつたい何が起じたのか、信じることができないのかもしれなかつた。

「……その人から離れる」

はじめて黒服の男は口を開いた。不良たちとは対照的な、落ち着いた低い声であった。

「てめえ、このやうひ……」

長髪の手が私から離れた。その手を硬く握り締めて、まっすぐ黒服へと挑みかかっていった。しかしその拳が相手に届くことはなかつた。黒服の男は軽く一方後ろへさがると、すばやくその長い足を高く蹴り上げた。その足は突っ込んできた長髪のあごを、見事に捕らえていた。

「ぶふつ」

ぐもつた低い声を上げて、長髪はぐるぐると回転しながら、塀に衝突して倒れた。黒服の男は、例のゆっくりとした足どりで近づいていくと、片手で相手の襟をつかんで引き上げた。長髪にはもはや意識はなく、男の支えなしにはたつてはいられない状態であった。男は開いてる方の手をポケットに入れ、何かを取り出した。それは小さなコーヒーの缶だった。それは何時間か前に、私のバイト先で私の目の前で買ったものであった。そしてそれを握り締めたまま、まっすぐに男の顔面にたたきつけたのである。

「「コフッ」

ひどく嫌な音がした。長髪は後頭部を壁にうち据えられ、缶コーヒーとのサンドイッチとなつていた。男がそつと手を引くと、缶コ

ーヒーも手から滑り落ちてこころごとに私の方へ転がってきた。

私はその缶からも目を離すことができなかつた。はつきりとそこには、長髪のどす黒い血と、男の手形が残つていた。長髪がずるずると塀に黒い線を引きながら崩れ落ちた。そして、それからほんの一

りとも動かなくなつてしまつたのだつた。

「ぐ、ぐぞおうわあ！」

先ほど唇を切られたピアスが、何かわめきながら突っ込んできた。だが、ピアスも男までたどり着くことはできなかつた。あの長い足が素早く、まつすぐに伸びて、ピアスのみぞおちのあたりを貫いたのだ。

「ぐおふつ」

ピアスは腹を抱えてうずくまつてしまつた。そしてその場に、胃の中のものを吐き出していた。男はゆっくりピアスのところへ近づいて行つて、大きく足を振り上げ、その足をピアスの後頭部へと振り下ろした。

なんとも嫌な音を聞くのは何度目だらうか。ピアスは自分の吐瀉物の上に顔面からたたきつけられていた。そしてそれらはピアスの血痕とともにあたり一面に飛び散つたのだつた。当然黒服の体にもかかつっていたのだが、男はなんでもないかのように懐からハンカチを取り出して、それを軽くふき取るのであつた。やがてピアスは何も言わず動かなくなつてしまつた。

ついさつきまで私に悪態をついていた連中は、みんな黒服の男の手によつて無残な姿に変わり果てた。死んでしまつたのかも知れない。すべて、あつという間の出来事であつた。

次は私の番だ。発作的にそう思つた。次は私が殺される。私の体は恐怖に震え、歯の根が合わず、小さくカチカチと音を立てていた。男がついにこちらに向かってきた。私は逃げることも叫ぶこともできない。私はその場にへたり込んだままだつた。そしてとうとう男は私のすぐ側までやつてくると、ひざをついて、その顔を近付けてきた。私は視線もそらすことができず、そのまま男の顔を見ていた。

「……安心してください。あなたには何の危害も加えませんから」
男はにっこりと微笑んで、帽子をあみだにかぶり直すとそつと言つた。

「それより大丈夫ですか。どこか怪我はありませんか」

私は拍子抜けしてしまった。男はあくまで優しく、紳士的な態度で私をいたわってくれていた。その顔を見ていると、この場での少年たちを血の海に沈めた人間と同一人物とはとても思えない。大きくて丸い目。まだ少し幼さも見える顔立ち。そしてこの愛嬌のある笑顔。さつきレジで対峙した時よりも、さらに若い印象があつた。この表情を見ていると、この時までの出来事はすべて夢であつたかのように思えてくる。少しづつはあるが、恐怖が薄らいでいった。遠くからかすかにパトカーのサイレンが聞こえてきた。どうやらこちらへ向かっているようである。誰かがこの現場を見て、警察に連絡したのかもしれない。

「いけない……」

男がそっと私の手を取った。あくまで紳士的な態度をくずさなかつた。

「行きましょう。警察が出てくるとやっかいなことになる」

私は反射的に頷いてしまっていた。後から考えれば、私はあくまで被害者の立場だったので、警察が来るからといって、男と一緒に逃げる必要もなかつたのだが、この時は共に行くことが当然と考えていた。何故だかはわからない。あれだけ恐れ、逃げ回っていた相手なのに。この男に対する好奇心というか、何者であるのかを突き止めたい欲求が勝つたためかもしれない。

「大丈夫ですか。立てますか？」

私は男の手を借りて、何とか立ち上がることができた。

「じゃあ、走りましょう。いいですか」

私はまた頷いた。男がゆっくりと走り出す。私もその手をしっかりと握つたまま走り始めた。その手は暖かで、そこから何か見えない力が私に注ぎ込まれていくように思えた。

私はその一方で、これまでこの男に対して抱いていた感情について考えていた。はじめてその姿を目撃した時に感じた、あの思いとはなんだつたのか。

とりあえず私は、この男にことんまで付き合つこととした。この男の正体は一体何者なのか。あのやさしい目の奥には何が隠されているのか。私はすべてが知りたかったのだから。

その四

どのくらい走り続けただろうか。距離にすれば大したことはなかったのかもしれない。男に導かれるままに走っていたのが、私の体力はそろそろ限界に近づいていた。かかとがジンジンと痛くなり、足がもつれてうまく動かなくなっていた。もう休みたい。そう思つた時、男はそれを敏感に感じ取つたのか、徐々に速度を緩めて振り返り、

「少し休みましょうか」

と言つて、小さな公園を見つけると、そこへ私を誘つた。
すぐ上を高速が通つていた。猫の額ほどの小さな公園で、人気はまるでなかつた。小さな街灯が煌々とついていたが、なんとも薄暗い感じがしていた。

私は石でできたベンチに倒れるように座り込んだ。汗がどつと噴き出し、胸も苦しい。何度も大きく肩で息をついて、呼吸を整える。のどもカラカラだった。

「どうぞ」

顔をあげると、男がいつの間にかすぐそばに立つていて、どこで買つてきたのか、缶コーヒーを私に差し出してきた。私は何も考えないままにそれを手に取つた。

「！」

次の瞬間、私はそれを手放していた。それは男が私の店で購入したものと同じコーヒーであつた。そしてそれは、先ほどあの不良たちの顔面にたたきつけた、恐るべき凶器となつたものと同じ缶に見えたのだ。

缶は「ロロロロ」と男の足元へと転がつていつた。男は腰をかがめてそれを拾つた。よくよく見れば、それには赤い血痕などどこにもついてなどいない。あくまでそれは、先ほどの凶器とは同じ種類の別商品にすぎないのであつた。

「……コーヒーはお嫌いでしたか」

私はなぜか大きく首を振った。

「「ひかり」「ルクティー」があります。」ちらなりいいでしょ。どうぞ」

「……すみません」

私は頭を下げながらそれを受け取り、ふたを開けて一気に飲んだ。勢いよく飲みすぎて、器官に入つてしまつて、むせこんでしまつた。

「大丈夫ですか？」

私は近づこうとする男を手で制し、

「「ごめんなさい。だ、大丈夫です」

と、せき込みながら言った。

男はそんな私を見て、少し笑つたようだつた。見れば、男の顔には一粒の汗も浮かんではいなかつた。先ほど拾つたはずの「コーヒー」もいつの間にかその手にはなかつた。自分で飲んだ形跡もないことから、あの「コーヒー」もこのミルクティーも、ただ私のためだけに買つてくれたものようだつた。そういうえば、あの三人を相手にした後も、息ひとつ切らしてなかつたことを思い出した。

そこでふつと、私は急に全身に寒気を感じ、震え上がつた。汗で体が冷えてきたためではない。あの血まみれの惨状を、また思い出してしまうのだ。そしてそれを作り出した張本人が、私の目の前にいて微笑みを浮かべているのだ。

この日の朝に男をはじめてみた時から（すべてはまだ一日の出来事であるのだ！）、何度このことを考えたろう。この男はいったい何者なのだ？ なぜ彼や私のまわりに姿をあらわすのか。この男の真の目的は何なのか……？

「それにしても、危ないところでしたね。怪我はありませんか」

私があの三人のことを思い出していたことを知つてか知らずか、男はそうやって優しそうにたずねてきた。私はその言葉にすぐに応えることができず、ややあつてから小さく頷くのが精一杯だつた。

「そんなに怖がらなくてもいいですよ。あなたには何の危害も加え

ませんから

男は笑つた。まるで私の心中などすべてお見通しだと言わんばかりだつた。

「私の考えている」とが、……すべてお分かりになるみたいですね私は思わずせつ口にしていた。声が上ずつてているのが、自分でもよくわかる。

「何故、そうお考えになるのですか」

男が逆に聞き返してきた。

「聞いているのは私の方です!」

馬鹿にされたような感じがして、思わず声が大きくなつた。

「……まいつたな。まあ、全部が全部というわけではありませんが。何となく、そうじやないかと思えたことを話してみただけですよ」

男はそう言つて頭をかいだ。

「……そうですか」

「さ、次はあなたが私の質問に答える番ですよ」

「えつ」

私は思わず男の顔を見てしまつた。男は笑つて、こりりを見ていた。なんだかその顔を見ていると、本当に馬鹿にされているようで、すこし腹が立つてきた。

「私の質問、聞いていらっしゃいましたか」

「……ええ

「じゃあ、答えてくれますか?」

「私の考えている」とがわかるなり、……私が答える必要はないじゃないですか」

と、つい私が意地になつて答えると、男はいきなり大声で笑い出した。その笑いは、まったく嫌味のないものであることはわかつたが、そのことが逆に私の瘤に障つた。私はもうこの場から離れようと立ち上がろうとした。

「あ、危ない」

だが、私の足は私の意志に反して、まったく言つひととを聞いてく

れなかつた。立ち上がりかけたところで、よろけてしまい、そのまま前のめりに倒れそうになつた。そこを男の長い手が伸びて、私を支えてくれた。

「……大丈夫ですか」「……へ、平氣です」

「でも……」

「大丈夫ですつたら！」

私は男の手を振り払つて、またベンチに腰を下ろした。足が思い通りに動かせない以上、まだまだこの場に座つておかねばならない。恥ずかしさと悔しさが入り混じつたまま、私はしばらく黙つていた。冷たい木枯らしがふいてきた。思わず私は身を縮める。

「寒くなつてきましたね」

「……」

「……『一トをお貸ししましょつか』

「……結構です」

「……そうですか」

また沈黙が続いた。もう汗はすっかりひいていたけれども、とても寒くなつていた。だが、この男の黒い『一トを借りるなんてどんでもないと考えていた。男は気づいているのだろうか。黒地のため目立つてはいないが、近くで見ればいくつかの奇妙なしみが点在している。それはまぎれもなく、あの少年たちの血であるに違いないのだ。

「あの人たち……」

「えつ？」

思わぬ私の言葉に、男が振り向いた。

「あの子たち……死んだかもせんよ
言つてしまつた。

「かも、しれませんね」

男は私の言葉に動じず、ポツリと返した。

「でも、人間つて案外丈夫にできていますから。あれぐらいのこと

では死にはしませんよ

あれぐらい？あの血だらけの惨状を「あれぐらいのこと」と言うのか。

「大丈夫ですよ。でもまあ、一生不自由な生活を送る」となるかもしれませんが

そんなことはたいしたことではないとでも言つよつて、男はさらりと付け加えた。

「ぜんぜん大丈夫じゃないですか。その方が、もつと酷いじゃありませんか。可哀想すぎます」

「可哀想？ひょっとしたらあなたの方が一生消えない傷を受けたのかもしないんですよ」

「そんな。だからって……」

だからといって、相手にそれ以上痛い目をあわせることが正当化されるわけではない。

「他人に迷惑をかけたり、傷つけることを何とも思っていないやつらには、いずれ自分たちにもその分だけ、いや、それ以上の報いを受けるのだということをわからせないといけないんです。でないと、余りにも不公平ですからね」

「あなたはそのことを自覚しているんですか」

「ええ」

男は頷いた。しかし、この男にかすり傷でも負わせることのできる人間が、この世に存在するのだろうか。

「でもやっぱり酷いです。あそこまでするべきはなかつたんじやないですか」

「……あなたはとてもお優しい方なんですね」

やつぱり私のことを馬鹿にしているのか。

「あ、すみません。また不愉快な思いをさせてしまったようですね。他意はなかつたのですが……謝ります。ごめんなさい」

また私の心の中を見て取ったのか、男はあわててそう付け加えて恐縮していた。

ますます私は、この男のことがわからなくなってきた。眞面目な
のかふざけているのか、まともなのかおかしいのか、どちらにもと
れるしじぢぢでもない。一体どういう人間なのだろう。

またしばらく間が空いた。私がこの男から聞き出したいことは、
たつた一つのことであつたが、それはなかなか口に出せないでいた。
「正直言つて、あなたとは一度こうして一人だけでお会いしてお話
したかつた。……でも、かなり驚かせてしまつたようですね。すみ
ません」

また男の口からお詫びの言葉が発せられた。

「私のことを……以前からご存知だったのですか」
「いえ、まあ……『よく最近のことですがね……』」
なんとなく男は歯切れの悪い受け答えをした。

「あなたは、一体何者なんですか？」
聞いてしまつた。

男は驚いた顔をしてこちらを見ていた。そして少し悲しい表情と
なつた。だが、私の問には答えようとしなかつた。

「答えてください」
私は男の言葉を促した。
「あなたには関係のないことです」
「答になつていません」
「……知らない方がいいでしょう」
「……何故です」
「あなたの為です」
「意味がわからぬ」
「では、どうしてあなたは私の前に現れたのです？ 私に疑問
を抱かせるような行動をとつたり、私を助けてくれたのは何故なん
ですか」
「先ほどのあれば……あの時は仕方がありませんでした。あなたの
窮地を黙つて見過ごすわけには……」
「私のバイト先にも現れましたよね」

「あ、あれは単なる偶然ですよ。あそこであなたが働いていらっしゃるなんて知らなかつたんです」

「今朝、アパートの通りの角に立つていましたよね。そして彼を尾行していくかのように、後をつけっていましたよね」

「そんなことは……ありませんよ」

「でも、あなたは私の方を振り向いて、私を見たわ」

「……気のせいですよ」

「あなたのやつていることや言つていることは、矛盾ばかりで嘘ばかりです。ますます訳がわからないわ。私ははつきりとした、本当の答えが知りたいんです」

「わからないままの方が、いい時だつてあるんです」

男は私に向かつてそう言つてから、言葉を続けた。

「すべての真実を知つたからといって、それがよいことになるとは限りません」

「でも、私はあなたのことを持つてしまいました。あなたと直に話す機会を得てしましました。あなたに対し、消えない疑問をたくさん抱いてしまいました。……この責任はどうとつてくださるんですか」

「それは……私のことは、もつ忘れてください」としか言えません
「そんなの、するい！」

とうとう私は立ち上がつた。もう足も痛むことはなかつた。

「私はあなたが思つてゐるほど馬鹿ではありませんし、あなたにとつてそれほど都合のよい女でもありません」

「そう……なのでしょうね。でも……」

「……でも？ でも、なんです」

「あ、いえ。何でもありません」

男は背中を丸め、ポケットに手を入れて、寂しそうに元三歩ほど歩を進めた。

「逆に聞いてもいいですか。何故、そんなに私の正体を知りたいんですね？」

「ですか？」

私の方は見ずに、そう訊ねてきた。

「それは……知りたいと思うことは当然のことじゃないんですか」「そういうか。私みたいな怪しい人物には、係わり合いを持つまいとするのが、普通なんじゃありませんか」

「……」

「今も、逃げようと思えば逃げられるかもしませんよ。大声を上げれば、誰かが助けに来てくれるかもしない。いや、ここに来るまでにも、いくらでも逃げ出すチャンスはあつたと思います。何よりあの場でパートカーのサイレンが聞こえてきた時、あなたは私と一緒に逃げる必要はなかつたでしょう。それでもあなたはついてきた。……何故です？」

「それは……」

「あなたの目が……と言いかけて止めた。

「今は、お答えすることができません」

「ずるいのは私も同じだ。

私はこの男を信じてしまったのだ。いや、信じたいのだ。すべてを知ることで、自分の気持ちを正当化したいのだ。だがそれを口に出すのはためらわれた。そのことで、自分がまた傷つくかもしれませんことを恐れていたからだ。

「でも、知りたいと思つたから知りたいのだ、という言い方しかできません。たとえ今、私の疑問にすべてお答えされなくても、何もおっしゃられなくとも、これからどんなことをしてでも、私はあなたが私に隠していることすべてを、突き止めようと思います」

「……おやめなさい、そんなことは、そんなことは、しない方がいいですよ」

「いいえ、止めません。どうしてもやめないとおっしゃるのなら……」

私は息をのんで、こう続けた。

「私も、あの三人のようになさつたらいかがですか」

男は悲しそうな顔をして、それから大きなため息をついた。

「何度も言いますが、あなたに危害を加えるつもりはありませんよ。

私の目的は、あなたじゃありませんから」

そして私の顔をさまざまと見つめながら、そう言つのであった。

「本来の目的？……どういう意味ですか。私以外の人間なら誰でもいいんでしょうか？」

「いいえ。ここでの私の本当の相手は一人だけです。あの三人などはイレギュラーな対応でした」

「一人だけ？じゃあ、その一人って、一体、だ……」

不意に、私の頭の中に、その相手かもしれない人物の顔が浮かんだ。

そんな……まさか。

「……ご推察のとおりです」

ゴクリと大きくのどがなる音がした。それが私のもののか男のものなのかはわからなかつた。

「近日中に、今、あなたが一緒に暮らしている人物、すなわち江藤哲夫さんには死んでもらいます。私が直接手を下すことになるでしょう」

「……」

「あなたの疑問にお答えします。私は実は、『殺し屋』なのです」

その時私の目の前が、一瞬、真っ白になつた。

その五

白い光が消えても、私はまだそこにいた。頭上の高速道路には、何台もの車がせわしなくずっと行き交っていた。黒服の男は目の前に立っていた。小さなベンチ。夜の公園。さつきと何一つ変わってなどいない。あくまで表面的には。

それはほんの一瞬の出来事だったのだらう。だが私には、とてつもなく長い時間がたつてしまつたように感じられた。

……私は笑い出した。

笑つて笑つて笑い続けた。

無理して無理して無理して笑おうとした。

男は何も言わず悲しそうな表情のまま、こちらを見ていた。

「あなたは、やつぱり、頭が、おかしいんだわ」

とぎれどぎれに、なんとか私は喋つた。私の方が変になりそうだった。

「……そうかもしません」

男は答えた。

「わ、わかっているじゃない」

私は大きく肩で息をしながら、男から顔を背けた。男の目を、あの目を見ることができなかつたから。

「……殺し屋ですって？　ああ、おかしい。最高の冗談だわ……。

あなたみたいな人が、人殺し？　あはははは。そんな……人殺しつて言うのは、何か、こう……わかるでしょ、誰にも知られず、こつそりやるもんでしょ。そうよね、ばれたら刑務所行きだものね……。それなのに、あなたは……何よ。なんでそんなに、堂々としているのよ。そんな、一度見たら忘れないような目立つ格好して……。どうして？　なぜそんな姿で私の前に現れて、あまつさえ、『自分は殺し屋です』なんてことが言えるのよ……。」

「すみません……」

「謝つてほしいんぢやないの！ 私は聞いているのよ！」

私は頭をかきむしつた。私は何にいらだっているのだろう。目から涙が零れ落ちそうになるのを、必死で食い止めていた。

「いつもなら……いつもはこんな風ぢやないんです。もっと人知れずには……それこそあなたがおつしゃつたように……隠れて行動していました。ただ、今回は……今度に関しては……」

「今日は……何故なの？」

「……わかりません」

「わからない？ ……何なのよ、一体！」

私は両のこぶしを握って、何度も自分の足を叩いた。ひざから崩れ落ちそうになっていたから。

「あなたってさつきから『言えません』『すみません』『わかりません』って、そればっかりで、たまにそれ以外のこと言つても、訳のわからないことばかりで、肝心なことは何も話してくれないじゃなし。それともあなたは、何も理由もなく人を殺したりするの？ 何もわからないのに、『殺し屋』を名乗っているの？」

「……そんなことはありません。あくまで正式な依頼をもつて……依頼がない状態で、誰も彼も殺してしまつて……」

「ん

「それじゃあ……もし、そのちゃんとした依頼があつたら、お年寄りでも子供でも、誰でもみんな、みんな殺してしまうのね」

自分でもひどいことを口にしている自覚はあつたが、止めるわけにはいかなかつた。

「かも、しれません」

「……わたしでも？」

「……おそらく」

男はあくまで冷静だつた。

「じゃあ、今回も、誰かの依頼を受けたのね」

「ええ」

「じゃあ、それは一体……？」

「誰？ 誰からの依頼なの？」

「……お答えするわけにはいきません」

「……ご立派だわ。依頼人の秘密は絶対守るって言つわけね。さす

がプロだわ」

「……ええ。そうとつていただいてかまいませんよ……」

私はくじけそうになる自分を、必死に奮い立たせた。両腕を大きく回して、何とか体の中から言葉をひねり出そうとしていた。まだ言わねばならないことがある。まだ聞かねばならないことがある。

「……何故……」

そう、何百回分の「何故」という言葉が、私の口から飛び出そうとしているのだった。わからないことばかりなのだ。理解できないことが多すぎるのだ。

「何故、『彼』が死ななくてはならないの？ 何故、『彼』なのに私にとつて行き着くべき究極の問いはこれだった。何の権利があつて、彼を私から奪おうとしているのか。

だが、男はまたしても私の問いには答えず、口を開ざしてしまった。

「何か言つてよ！」

しばらくした後、やっと男は淡々とした口調で、事務的な言葉をつむぎ始めた。

「……江藤哲夫。二十五歳。S県出身。三人兄弟の次男。同県内の小中高を卒業し、上京。都内の某大学経済学部へて、某食品メーカーの営業部に勤務中。上京してから住居も転々として、今はJEX町のアパートに居を構えて……」

「そんなことを聞いているんじゃないの！ そんなこと、知つているわよ。彼のこと……彼のことなら、なんでも知つてているんだから！」

「本當ですか？」

「えつ……」

私はおもわず振り返り、男を見た。いつしか男は厳しい顔をして、

まつすぐじりじりを見ていた。先ほどまでの悲しそうな表情は消えうせていた。

「本当に……あなたは、彼のことを何でも知っているのだ、と言えますか？」

「それは……」

私は必死になつて、頭の中で彼の姿を思い浮かべようとした。彼と過ごした日々の思い出。彼との会話。彼のしぐさ。彼のぬくもり。しかしづつとずつと付き合つてきて、そして一緒に暮らしてもいるのに、彼の対する私の記憶は、何故だかその時、ぼづつとかすんで露がかかるつたようになつていた。私は一体、彼の何を見て何を知つているというのだろうか。私は……。

このところの朝の彼とのいざいざが頭をかすめた。やっぱり私は逃げている。私は実はこれまで一度も、彼と真摯に向き合つてこなかつたのではないか。知らうとすれば、すぐにできたことなのに。だがもし知つてしまつたら。彼の本当の気持ちや本当の姿、そのすべてがわかつてしまつたら。それが私の望むものではなかつたとしたら。私は……。

涙がでた。ポロポロととめどなく流れ落ちた。ずっと心の奥底に封じ込めていたものが、暴かれてしまつたかのようだ。私はその場にうずくまり、声を上げて泣き出していた。

「……すいません。あなたを傷つけることになつてしまつたようですね」

やがて男は私の肩に手を置いて、そしてまた詫びの言葉を口にしていた。私はもうその手を振り払うことができない自分の弱さを、呪うだけだった。

「……あなたはご存知なんですね」

私はやつとのことで尋ねた。

「私はただ、依頼の内容に嘘がないかを調べただけです」

「間違いはなかつたのですか……。その……彼はあなたが殺してしまふに値する人間だつたのですね……」

男は迷っていたが、やがてゆっくりと頷いた。

「私のことも、お調べになつたんでしょう？」

「それは……」

「いいんです。……答えてください」

「……ある程度は……」

男はきつと、私のすべてても調べたに違いない。何もかも知つているのだ。私の恥すべき過去のことも。男が私から不器用に視線をそらしたことどが何よりの証拠だつた。

「……やはりお会いするべきではなかつた。お話しするべきではありますでした。私の存在が、あなたに余計な誤解や負担を与えることになつてしまひました。……申し訳ありません」

だが、その時の私には、もう男の言葉は耳に入つてはいなかつた。

「殺させはしません」

「えっ？」

「彼を、殺させはしません。絶対に。私が守ります、彼を」

「そんな……」

「できないと、思つてらつしゃるんでしょ？」「

私は決めた。決めたのだ。

「いえ……ただ……」

もう逃げない。弱気な自分は、嫌だ。負けたくない。

「あなたは、彼を殺すことを止められないのですか？」

「……これは私の意志ではありません。あくまで依頼人があつてのことです。私はただ、それをそのまま実行することだけです。だから……」

「その方が、依頼を取り下げたら？」

「その時は……確かに……でも……」

「わかりました」

私は立ち上がりつた。涙はもう流れていなかつた。男はまだ、私に告げたいことがあるようであつたが、それを制した。

「もういいんです。何も言わいでください。私も、その意志に従

「う」とします

「……」

そんな顔しないで。あなたはあくまで私の敵なのだから。
「彼に、もしものことがあれば……」

私はしつかりと男を見据えて言つた。

「私は許しません」

これは私なりの、精一杯の宣戦布告である。

「ええ」

男は素直に、そしてしつかりとそれを受け止めてくれた。
「その人も、あなたも……その償いをしてもらいます」

「……」

「たとえ、あなたたちを殺してでも……」

こんな殺伐とした言葉が私の口から発せられたことに、当の私が一番驚いていた。余りも無謀な台詞だつた。しかし、もし本当に彼が死ぬようなことになつたら。たとえそれが、依頼主にとつては当然の報復なのだとしても、その人間を、そしておそらく実際に手を下すことになるこの目の前の男を、私は決して許さない。やつと見つけた私の居場所を、奪う権利が誰にあるというのか。たとえ殺すことはできなくても、せめて一矢、心か体に一生消えないような傷をつけてやりたい。私はそう思つていた。

「……わかりました」

これは彼のためだけではない。私の、私自身を守るために戦いなのだ。

そして私は男から離れて歩き出した。もう引き止められることもなかつた。だいぶ遠くまで来てしまつたが、大きな通りまで出れば、タクシーを拾うこともできるはずだ。私は帰るのだ。私たちのアパートへ。私の居場所へ。

内なる興奮が大きく私を包んでいた。できることなら、このままいつまでも歩いていい気分だった。体が熱い。

私はおそらく生まれて初めて、自分の意志で自分のために前向き

に行動しようとしていた。私はその先に待っていることへの恐怖など、その時は微塵も感じていなかつた。

その六

アパートへたどり着いたとき、彼はまだ戻つてはいなかつた。私は部屋に入つて、その場にペタンと腰を下ろし、そのまま「ロロン」と横になつた。

少しだけ、ほつとしていた。もし彼が先に戻ついたらどうしよう、と考えていたからだ。彼と会つて、どんな顔をして何を話せばよいかわからない。決意だけは大きなものであつたが、それに伴うものが私には不足していた。やはり相も变らぬ小心者にすぎない自分にうんざりした。

先ほどの興奮はすでに冷めていた。私にあるのは、疲労と不安だけだつた。昼食時から飲み物以外口に入れていなかつたが、空腹感すらない。……何もしたくなかった。

このところ、彼の帰りはいつも遅い。営業回りで、地方のスーパーにまで遠征せざるをえないのだとか、お得意先の偉い人の接待にかり出されたなど、理由はさまざま。なんでもないスーパーやコンビニの陳列棚の位置にも、それぞれメーカーの力関係のようなものがあつて、よい場所を確保するのは大変なことなのだと、以前話してくれたことがあつた。それに比べて、お前は気楽でいいよな、と付け加えることを忘れなかつたが。

彼はいつたい私のことをどう思つているのだろう。单なる世間知らずのお嬢さんだと思われるのは癪だつた。これまで何の苦労もなく生きてきたわけではない。ただ、彼が知らないだけなのだ。私は自分の過去について、ほとんど話してこなかつた。高校に行かなかつたことも、家を出て来てしまつたことも、結局詳しい理由をひとつ語つてはこなかつた。話すことはおろか、それを思い出すことすら嫌だつたのだ。特にここで一緒に暮らし始めた頃は、その思いが強かつた。

彼も、そのことについては深く訊ねてはこなかつた。それはそれ

でありがたかつたが、後から考えるに、私に同情したからというより、単に面倒くさかつた（もしくは余計なことに巻き込まれたくなかった）だけだったのかもしれない。これは一時的なことで、すぐに実家へ立ち戻ると考えていたのではないか。だがそれから長い日がたち、何より私は二度とそこへは戻らないと心に決めて、ここへやつて来ていたのだった。

私が彼の元へ来たのは、自分には当然過ぎるほどの行動の結果だつたと思う。あの時には、私が頼れる人間は、彼しかいなかつたのだから。

彼とはじめて出会つたのは、私が職を転々として、近所のレンタルビデオ店で新たにバイトを始めたばかりの時であった。そのバイト先の先輩として、彼は働いていた。彼はまだ学生で、その店でのキャリアは長く、不器用で失敗ばかりの私の面倒をよく見てくれた。ミスが原因で店長にしかられそうになつたときに、私をかばってくれたことも何度かあつた。明るくて話が面白くて、何よりも誰にも優しかつた。その店ではムードメーカー的な存在であつた。私が彼に惹かれたのは、その優しさゆえであつたかもしれない。それまで私は、人から優しく接されるという経験を、ほとんどしてきてはいなかつたのだ。それは驚きであり、新鮮な体験でもあり、彼という存在が、次第に私の中で大きくなつていつたのであつた。

「頑張らなくつたつていいんだよ」

ある日、彼が私に言つた。

「よくな、スポーツとか勉強をしている人に向かつて、励ますつもりで『頑張れ頑張れ』って言うじゃない。俺、嫌なんだよね、言うのも言われるのも。なんか無理強いさせているみたいでさ。その人にはその人なりのペースつて言つたが、やり方みたいなものがあつて、それに忠実な方がいいと思うわけ。遅くつたつていいんだよ。うまくいかなくなつていいんだよ。はじめのうちはどんどん間違つて、失敗してもいいと思うんだ。最終的に目標にたどり着ければいいんだから。だから硬くならずにさ、気楽にやればいいんだよ」

高校受験の失敗、実家や過去の職場で受けたつらい仕打ち。私はひどく落ちこんで、いつもナーバスになっていた。常に何かにおびえ、小さくなつて生きていた。そのビデオ店で働き出したのも、家や家族から逃げ出す口実がほしかったからに過ぎない。働く場所なんて、前と同じ場所でなければどこでもよかつたのだ。だが、そんな場所で彼と出会うことができた。彼のおかげで私は立ちなおり、彼の言葉で少しづつ前向きに生きる活力が沸いて来るようになつていた。

その彼と個人的に付き合う関係になつたのは、バイトをはじめてからだいぶ立つてからのことだった。告白というほどの大いそうなものではなかつたけれど、それが彼の口から、私と付き合つてほしいというようなことを言われたときには本当に驚きであった。私みたいな人間を好きになつてくれる人がいるなんて、とても信じられなかつたのだ。

「何か……違うよね。他の女の子たちとはさ。そこが新鮮だった、ていうか……」

確かに彼のことは好きだつたけれども、それを口に出すなんてことは決してできなかつた。その思いは、ひつそり自分の心の中にいつまでもしまつておこうと考えていた。それが彼も私のことを思つてくれていて、私はなんだが自分が彼だけでなくこの世界全部から認められた思いがして、とてもうれしくなつて、その告白を受けた後で、思わず泣き出したことを覚えている。

こうして私たちちは付き合い始めた。いつしか、それまで以上に彼は私にとつてなくてはならない存在となつた。幾度がデートを重ね、そして彼に抱かれるようになつてからは、その思いはますます強いものとなつていた。いつまでもこの人と一緒にいたい。そう思つた。それはずっとずっと変わらない気持ちだった。

その彼が殺される。

彼がいなくなつてしまつ。

そのことが私にとって、どれほどの衝撃であるか。もしそうなれ

ば、私は生きてはいられないだろう。彼は私のすべてなのだ。私が

私であるために、必要な大切な人。それが彼であるのだ。

なんとしても、それは避けなければならない。

とはいっても、この私に何ができるというのだろうか。具体的な術については、私は何ひとつ思いつかないでいた。

彼に四六時中、ずっとつきまとうわけにもいかない。それは不可能であるし、何よりもしもの時でさえも、私があの男に太刀打ちできることも思えなかつた。というより、どんな人間でも、あの男には敵わないのではないだろうか。私はあの三人の不良の無残な姿を思い出して、身震いした。

となれば、やはりあの男に殺しを依頼した人物を探し出し、そこから説得していくしかない。だが私には相手に依頼を取り下げてもらえるような自信はなかつた。そもそも、一体誰が彼を殺すよう依頼したというのだ。それがわからなければ、説得も何もできるわけがない。

私はその場で大きく寝返りをうつた。自分の手で彼を守つてやると大それたことを決意したまではよかつたが、いきなり行き詰つてしまつっていた。具体的に何をすればよいかがわからない。私は少しあせり始めていた。

それにしても彼を殺してやりたいほど憎んでいる人とは、どんな人間なのだろう。思うに、彼は人に憎まれ恨みを買うようなタイプではなかつた。以前のバイト先でも、彼を嫌っている人物は思いつかない。しかしながらこの度は「殺人」の依頼なのだ。彼に関しては、私の知らない何かがあるのかもしれない。それは私と彼が知り合う以前の出来事であるのか。それとも……。

あの男の言うとおりだ。私は彼について何も知らないに等しいのかもしれない。気分がますます滅入つてくる。私は意味もなく、ゴロゴロと部屋の中を転げまわつた。

その時、不意に自分の携帯電話を見てみると、着信が二件入つてゐるのに気がついた。マナーモードにずっとしていたので、気がつ

かなかつたらしい。確認すると、どちらも留守電メッセージが録音されている。あわてて私は続けて再生してみた。

「あ、俺だけ。今日は戻れなくなつたから。それじゃ」

一件目は彼からだつた。まるでそつけない淡々とした言葉だつた。私は少し悲しくなつた。

あなたは命を狙われているのよ。

すぐにでも彼の身に危険が迫つてることを伝えてあげたかつた。だが、それを私の口から聞いたとしても、彼は一笑に付して、真剣に取り合つてはくれないであろうこともわかつていた。この日に私が体験した数々の出来事も、信じてくれないに違いない。

「私はあなたのことをこんなに大事に思つていてるのに……」

どうしてわかつてくれないのである。こんなに心配しているのに。どうしてそんな態度ばかりとるようになつたのだろう。いつからこうなつてしまつたのだろうか。

私はため息をつきながら、もう一件のメッセージを聞いてみた。それは彼の友人である、島崎さんからであった。

「あ、えーと、島崎です。江藤君の携帯がつながらないので、失礼してこちらにかけさせていただきました。えー、その、高校時代の同級生が亡くなりまして、そのお葬式のことについて、江藤君と相談したいことがあります。まあその、えー、よかつたら折り返しご連絡ください。では」

島崎さんは、彼の高校のときからの友人である。一番仲のよい友達らしく、このアパートにも何度か遊びに来たことがある。そのたびごとに、私のことを「奥さん」とか「若奥様」などと呼んでからかつてくるのだった。籍を入れたわけではないし、私はそう呼ばれることが何とも照れくさくて嫌なのだが、島崎さんはそんな私の反応を楽しんでいるのか、決して改めようとはしなかつた。

それはともかく、私は島崎さんからの短いメッセージの中の、「同級生が亡くなつた」という言葉が引っ掛かった。私はすぐに島崎さん宛てに電話してみた。ワンコールもせずに、元気な声が返つて

れた。

「ああ、これは奥さん。お久しぶりです。お元気ですか」
やつぱり島崎さんは私を「奥さん」などと呼んでいたが、私はす
ぐに「くなつた」という彼の同級生の件について話を振つた。
彼は最近特に仕事が忙しく、なかなか時間がとるのが難しいこと
(もちろんこの日も仕事で戻れなくなつたことを付け加えた)、し
かし昔からの親しいお友達のお葬式なら、出ないというのも失礼に
当たるので、よかつたら私が代わりに出てもよいのだが、といった
ことを告げた。かなり強引な言い訳とも思つたが、島崎さんは特に
気にしたようでもなかつた。

「いやあ、奥さんにはここまでしていただかなくてもいいですよ。高
校ん時に、ちよいちよいつるんでいたつて程度の関係の奴なんです
から」

「でも、高校を卒業なつた後でも、お付き合にはあつたんじょ
う?」

「そりゃまあ、そうですけれどね。俺の方はまあ、親同士の付き合
いもあつたんで、顔を出さなきやならないんですけれども。江藤は
どうかなあ。忙しいなら、また弔電の一本でもうつとけばいいんじ
やないですかね」

「そうですか。……あの、変なことをお聞きするんですけども、
確か一円ぐらい前にも、お友達がお亡くなりになつましたつ
け」

「ああ、そうですね。中島つて奴ですけれど、やっぱり高校の時の
ダチです」

「そうですか……」

私が引っかかったのは「これだ。私が代わりに弔電をうつたから、
よく覚えている。」このときも彼は多忙であり、弔電のうち方や文句
が思いつかず、面倒くさくなつて私に頼んできたのだ。

「あいつはもう高校でてから縁遠くなつていていたんで、俺も弔電で済
ませたんですけどね。今度はさつきいったような事情でして。」つ

忙しい時期にバタバタ死にやがるなんて、友達がない奴らですよ」

それにしても、島崎さんの口ぶりでは、かつての友人たちの死に対する悲しみや哀悼の意はまったく感じられないようである。

……彼も同じなのだろうか。

「なんか、どちらも事故みたいなんですね」

私が一人の死因について訊ねてみると、そんな答えがかえってきた。

「今回死んだのが、仁科つて奴なんですけれど、酔っ払って川に落ちこちたらしくてね。中島は工事現場で働いていたらしくて、高いところから落ちたとか、何かものがおちてきたとかなんとか。……あれ、逆だったかな」

どうにもさっぱり要領が得ないが、どちらも事故というのが気にかかる。本当にただの偶然なのか。

「……わかりました。それじゃあ、今度も私の方から弔電をうたせていただきます。」連絡先を教えてください

「いいですよ。ちょっと待つて下さい」

しばらくして、島崎さんが読み上げる住所をメモしつつ、なんでもない世間話をするかのように、私はちょっと話の矛先を変えてみた。

「でも……」こんなときにこんな話するなんて失礼ですけれど、私、ちょっと残念なんです

「どうしてですか？」

「ちょうどいい機会だなとおもつて。一度彼の田舎つてどんなところか見てみたかったんです。彼、昔のことはあまり話してくれないし

「恥ずかしいんでしょ。それに、何もないところですよ」

いざれにせよ、彼の故郷へは一度行って見なければならぬないと考えていた。彼の昔の同級生が、一人続けて亡くなつた。このことが今度の彼への殺害依頼と、何らかの関係があるかもしない。その

「人の死は、ひょつとしてあの黒服の男の手によるものではなかつたか。もしそうならば、事の発端は彼らの高校時代にあると見なけばならないだろう。私一人の力で何処まで調べられるかわからぬが、うまくいけば、殺しの依頼者まで早くにたどり着けることができるかも知れない。そうでなくとも、思わぬ重要な手がかりを得られるかも知れないのだ。

「高校時代の彼って、どんな人でした?」

私は本心を隠して、それとなく島崎さんに探りを入れた。

「どんなって言われても……。今とあまり変わつていませんよ。俺もあいつも、少々ワルぶつてはいましたけどね」

その「ワルぶつて」という言葉は、少々意外で、私の耳に残つた。「そうなんですか。へえ、……ひょつとして不良だったんですけど」「いや、それほどのもんじやないですよ。たつた今も見ていたんですけど、笑いましたもん、自分の格好の可笑しさに

「えつ? 今、何を見ていらつしやるんですか?」

「卒業アルバムですよ。高校のときの。これに仁科の住所が載つていたんで、引っ張り出してきたんです。最近じやあ個人情報なんたらでうるさいですけれども、この頃はまだまだ甘かつたみたいですね」

卒業アルバムにクラス全員の住所が記載されているという。さらには彼ら一人一人の写真も載つているに違いない。私はそれがどうしても見たくなつた。彼のものは、実家においてきたらしいのだ。

「見てみたいなあ……。よかつたらそれ、貸していただけないでしょうか?」

「あ、いいですよ」

島崎さんは、あっさりと了承した。

「本ですか?」

「他ならぬ奥さんの頼みですから。明日あたりどうです? 仕事帰

りにそちらへよつてもいいですよ。俺もあいつに会いたいし

それはちょっとまずい。今回の島崎さんとのやり取りは、できれ

ば彼には隠しておきたいのだ。私は彼は泊り込みが多くてしばらく帰つて来れないのだと嘘をつき、わざわざ来てもらひのも悪いので、こちから取りに伺う旨を伝えた。そして島崎さんが昼休みの時間に、仕事場の近くの喫茶店で会うことになった。

私はこれはちょっとした好奇心なのだということを強調して、無理に無邪気さを装つてしゃべり続けた。島崎さんにあの黒服の男の存在について話したところで、信じてはもらえないに違いない。それに今度のことには、あまり他の人を巻き込みたくはなかつた。これは私と彼と、あの男との問題であるのだ。その後もしばらく話をしたが、内容についてはうわの空で話す側からすぐに忘れていつしまつた。そして電話を切つたとき、手にはびっしょりと汗をかいていた。

とりあえず、自分のとるべき行動が見えてきた。一息つくと、とたんに睡魔が襲つてきた。長い一日だつた。だが私はまだ、あくまでこれから長い道のりの第一歩を、やつと踏み出したに過ぎない。明日にはどんなことが待ち構えているだろう。くじけちゃいけない。頑張れ頑張れ。私はあえて、自分にそう言い聞かせた。

朝になつてから、彼の会社へ電話を入れてみた。彼の携帯にはまた連絡がつかなくなつたからである。会社の同僚の方の話では、すでに外回りに出てしまつたらしく、会社にはもういな様子だつたが、定時には無事出社していらっしゃい。私は少し安心した。彼はまだ生きている。ゆうべは何処に泊まつたのだろう。食事はちゃんと取れているのだろうか。

私はバイト先にも電話して、体の調子が悪いので一三日休みたい旨を告げた。店長は昨日の私の様子から勝手に解釈し、「お大事に」とだけ言つて深く追求もしなかつた。私がいなくとも、いつものシフトの人数で十分に店は回るはずだ。私とのコンビでレジを担当しているあの娘のことをちらつと考へた。だがすぐに頭から消し去つた。私にとつては、こちらの方が大事なのだ。

私は朝食の膳を片付けて、急いで身づくりをはじめた。簡単に化粧をし、グレーのスーツを引っ張り出した。私の唯一といつてもいい、フォーマルな外出着である。以前職を転々としていた時に、いつかはちゃんとしたところで働きたいと考えて、なけなしの貯金をはたいて購入した品だ。

私のはじめての就職先は、市内にいくつかの支店を持つ、あるベーカリーの製造工場だつた。私は高校受験に失敗し、私立に進学することも許されなかつた。慌てて勤め先を探したのだが、中卒程度の女がすぐに働ける場所は、そんなところしかなかつた。中では白衣の作業着を支給され、ずっとそれを着せられていた。だがそこは結局一月と持たず、すぐに辞めることとなつた。

そこで班長をしていた男が最悪で、作業になじめず、いろいろ手間取つっていた私を、罵倒し徹底的に苛め抜いたためである。男はその工場では主のような存在であった。なぜあそこまで嫌われたのか、まだにわからない。あれはあの男の性格のゆえなのか、私に相手

をいらつかせる何かがあつたためなのか。私のやることなすこと一つ一つにケチをつけていた。精神的にも肉体的にも痛手を受けてしまい、私は結果的に耐え切れずにそこを飛び出した。ろくに給与すら手にできなかつた。働くことすらもまともにできないのかと、家族から責めたてられ、私はひどく落ち込んだ。

苛められるのは、馬鹿にされるのは、しつかりしていないからだ。ちゃんととしていないから、相手になめられ蔑まれるのだ。と、その頃の私は思つていた。だから思いつきり背伸びをする感じで、大人の女性に見えるようにと、このステッツを準備したのである。しかしその後実際の職場や面接の場で、この服を披露する機会はとうとう訪れなかつたのであるが。

それも過去の話だ。それでもこの服を身に着けると、気持ちがひきしまる思いもする。何しろこのところ、スカートをはく事すら少なくなつてきてているのだ。大きな街に出ることも、とんとご無沙汰であつたし、彼とも一人で外出したり、買い物や食事に行つたりすることもなくなつていた。私は人ごみの中が苦手だったし、彼は彼で、休みの日は家で一日中ゴロゴロしていることばかりであつた。

イヤリングをつけながら、小さな鏡を覗き込む。につこりと笑顔を作つてみた。大丈夫大丈夫。心配ない。ぜんぜんたいしたことじやない。きっとうまく解決できるはず、私は鏡の自分に語りかけ、勇気づけた。

そして無事にことが片付いたら。二人でどこかへ遊びにいこう。うんと贅沢して、思いつきり楽しもう。私たちを覆う黒い雲は、すぐに過ぎ去つていくだろう。あとちょっとの辛抱だ。頼れる人は誰もいない。私が、私一人が頑張らなければならないのだ。私は拳を握り締め、気合をいれて立ち上がつた。

私は彼宛てに、かんたんな置手紙を書き残した。もちろん島崎さんと会うとは書いていない。もしできるなら、調べられることは全部調べたいと考えていたので、帰りが何時になるかわからなかつた。いろいろ考えたが、昔の友達と会うことと、帰りが遅くなるかもし

れない旨だけを書いた。念のため、冷蔵庫の中には、簡単なおかずになるようなものを入れておいた。

「これでよし。私はやはり一足しかもつていらないパンプスを履いて、外へ出た。

「お出かけですか」

玄関から外へ出たとたんに声をかけられ、驚いて固まってしまう。言わずもがな、あの黒服の男である。どうしてこの人は、いつも心臓に悪い現れ方をするのだろう。

「……ええ、まあ」

「どちらく」

「あなたには関係ないじゃありませんか」

私は男を背にしてドアに鍵をかけ、できるだけそちらを見ないように歩き出した。自然と足が速くなる。

「彼は、ゆづこちからくはお戻りにならなかつたよつですね」

「……よく」存知ですね」

男が後ろからついてくる気配がある。

「心配じやありませんか」

「会社へは、いまさつき電話しました」

「ちゃんと出社してましたか?」

「ええ、そう聞きました」

「おや、直接お話はしなかつたんですか」

「同僚の方にお聞きしただけです」

「本当ですかね」

「……どういう意味ですか」

私は顔だけを男の方へ向け、歩きながら書つた。何が言いたいのだろう。

「何で会社の方が、私に嘘をつく必要があるのですか」

「アリバイサービス会社つてご存知ですか」

「……いえ」

私の心中を不安の影がよぎつた。

「風俗関係で働いている女性とか、あるいは会社をリストラされてしまった人たちなどが、そのことを家族や知人たちに隠すために、架空の会社に勤めているように装うサービスがあるらしいんですね」

「……」

私は立ち止まってしまった。

「名刺や履歴書の偽造はもちろん、時には偽の保険証も用意するそうです。なかなか手の込んだやり方ですね。その人宛に家族から会社へ連絡が入った時には、担当者が来客中とか外出中とか適当な嘘をついて、すぐには電話に出させないんだとか。そしてすぐ担当者から本人に連絡をして、本人から折り返し連絡させるようにするんだそうですよ。相手も簡単にだまされるみたいですよ。よほどのことがない限り、ちゃんとした会社勤めと思い込むでしょうね」

「何が言いたいんですか」

とうとう私は口に出して言ってしまった。

「いえ、……あなたが彼について、一体どれだけご存知なのかと思いまして」

「彼は私の知っている会社に勤めていないと、おっしゃりたいんですか」

「そこまでは言つていませんよ。ただ人を欺くことは、非常に簡単なことだということです。家族に知られぬ小さな秘密を作ることなんてのはね」

「彼もその小さな秘密とやらを隠しているといつのですか」

「それはわかりません」

「わからないのは私の方だわ！」

のせられまいと思いつつも、ついつい声が大きくなってしまった。

男は飄々とした態度で話をつづける。

「つまり何故嘘をつくのか。何故隠そうとするのか、ということです。その理由ですね」

男は両手をポケットに入れたまま、すぐ側のアパートの壁に背をもたれた。それは昨日の朝、私がこの男を初めてみたときと同じ格

好であつた。

「大なり小なり理由が伴つものなんですよ。ただ、その理由が問題でしてね。ある種の後ろめたさゆえ、なのかも知れません。やむにやまれぬ事情があつたのかもせません。眞実がわかつたからといって、それが当人にもまわりにも、良いことであるとも限りません」「あなたは、私があなたの依頼人を突き止めようとしていることを、あきらめさせようとしているのね」

私は男の正面に回つていった。やつと私の鈍い頭でも理解できた。さきほどからの男ののらりくらりとした態度は、私の意気込みを削ぎうとする意図が明白だつた。よくよく考えれば、彼が何処の会社に勤めているか、男の言つようなアリバイ会社を本当に利用しているかどうかなど、男はすでに調査済みのはずではないか。私の不安をあたり、また私を怒らせることにより、本来の目的や目標を見誤らせる魂胆であるのかもしれない。

「かも……しません」

男は頭を搔きながら、また断定を避けるかのように答えた。これも男のポーズなのだ。その手にはのるものか。

「だからといって、知らないままにいる」との方がいいことだけは限らないじゃないですか」

と、私は言つた。それならば、私の方にだつて大きな理由というものがあるのだ。

「それでも、あなたのやろうとしていることは……無謀だと思います」

男は言いにくそうに言つた。

「そんなことはわかっています」

「いいえ。わかつていらつしゃらないんだと思ひます」

男は今度はきつぱりと言つた。だが、その顔はある悲しそうな表情をしていた。

「あなたは真つ直ぐな方なのだと思います。そして物事に対してもすべて真正面からぶつかろうとしている。あくまで正攻法でね。そ

して相手に対しても、そつあるべきだと考へてゐる

「それのどこがいけないのですか？……確かに私は馬鹿正直かも
しません。でも、私にはこんな生き方しかできないのです」

「……本当にそうでしょうか。世間では、もつと巧妙でしたたかな
生き方もあるじゃないですか。たとえ昨日愛する人が亡くなつたと
しても、明日には別な恋人を作つてその時間をすることができる。
そんなものなんですよ」

ふと私の脳裏に、バイト先のあの娘の姿が浮かんだ。

「それは……あなたは私に、彼のことをあきらめるとおっしゃつて
いるんですか？」

「別な生き方、別な人生の過ごし方もあるんじやないか、そう思つ
ただけです。あなたにふさわしい……何か別の人生が……」

「ありがとうございます。でもそれは、あなたにも言えることじや
ありませんか。人を殺すより、何かほかのやり方が……」

男は黙つてしまつた。私たちはお互ひ見つめあつたまま、なかなか
口を開こうとしなかつた。長いながい間があつた。

「彼はもう……死んでいるのですか？」

私は精一杯の力を振り絞つて、言つた。

「いいえ……まだ……」

「本当に」

「本当です」

男も私から視線をそらさずに、はつきりと答えてくれた。私は大
きく息を吐いた。

「そう……ですか？」

「……」

「もうひとつ……お聞きしてもいいですか？」

「……なんでしょう？」

「氣を悪くしたうめんなさい。その……つまり……あなたは一体、
何ですか？」

「……私はただの殺し屋ですよ」

「ううん、そうじゃなくて。……なんていえばいいのかしら」

「……どうぞ」

「つまり、私は、あなたという人が、よくわからなくなってきたいるのです」

強い冷たい木枯らしがふいた。だが、男も私もそれをさけようとはしなかった。

「あなたはゆうべから、何度も私の田の前に現れていますよね。そんな目立つ格好をして私に印象付けたり、いきなり声をかけたりして私を怖がらせたり。かと思うと、不良たちから私を守ってくれたり、今のように親身になって忠告してくれたり……。あなたの目的は、彼なんでしょう？　なのになぜ、私に必要以上に接してくれるのですか」

「……」

「前にも言ったかもしませんけど、殺し屋というのは、それこそ人知れずに行動しなければいけないんじゃないでしょうか。だけどあなたはその逆を行おうとしている。私の田に止まろうとしている。……どうしてです？」

事実、（まだ男の手によるものだとはつきり確認したわけではないが）先の彼の同級生の死は、それぞれ事故死として処理されている。それと同じように、時間と場所と方法さえ気をつければ、たとえ彼が突然死したとしても、その死因を疑う人間なんて（私を含めて）ほとんどいないはずではないのか。

しばらく互いに沈黙が続いた。やがて男は私の視線をそらすかのようにな、ゆっくりと壁から離れて話し始めた。

「しばらくこんな仕事をしていますとね。たまに趣向を変えたくないときがあるんですよ。……ただそれだけのことです」

抑揚のない喋り方だった。私は男が本当のことを話していないと思った。それこそ理由がきっとある。何故話してくれないのでだろう。

「でも、まったくそうですね。あなたのおっしゃるところだ。……おかしな話ですよね、こんなの……」

「このお仕事、長いんですか」

淡々と話し続けようとする男の言葉を遮つて、私がした質問はなんとも間の抜けたものだつた。相手は人を殺して、しかもその犯罪を商売にしている人間なのだ。だが男は笑うでもなく、真面目にその問い合わせに答えてくれた。

「そうですね……。もう七、八年にはなりますか」

「どうして、こんな仕事を……？」

いざれにせよ、割に合う仕事とも思えない。

「さあ、忘れました。昔のことです」

ここでやつと男は笑みを浮かべた。しかしその笑いはどこかぎこちなかつた。それに、私とは視線を合わせようとは決してしなかつた。

「私には……あなたがあんなことをするような人には……とても思えないんです」

私の目の前にいるのは、シャイで真面目で不器用そうな一人の若者だつた。わざと偽悪ぶらうとして、変に肩に力が入りすぎてしまふような青年だつた。気持ちよりも体の方が先に大きくなりすぎてしまつて、それをいつまでも持て余しているかのようにも見えた。

「それは買いかぶり過ぎですよ。私はそれほど立派な人間じやありません」

「そんなことは、ないと私は思います」

「……ありがとうございます」

男は軽く頭を下げた。さつきよりは少しばらかな笑みになつていた。しかしそれとは逆に私の心には、先ほどから淀んだ霧のようなものが覆い始めていた。それを口に出すことを探はためらい、何とかそれを押しとどめて、必死に別な言葉をつむごうとしていた。

「お金をもらつて人を殺すつて、楽しいですか？」

私ははつとなつた。それまでの気持ちを抑えるのに集中しようとしましたあまり、あまりにもそれとはかけ離れた言葉が口から零れ落ちてしまつていた。自分の心の奥底に、そんな秘められた惡意があつ

たことを知つて、悲しくなつた。

「『』、ごめんなさい。こんなことを聞くつもつじや……」

「あなたはどう思つていらっしゃるのですか」

今度は男の方が、私の弁明を遮るかのように問いかけてきた。先ほどまでの優しい口調ではあつたが、あくまでそれはうわべだけのものだつた。これまで少しずつではあるが、垣間見え始めた男の内面に、また厚いカーテンが閉められたかのよつだつた。

怒つているというわけではない。なんと答えようかと迷つてゐるかのようにも見えた。意識して自分の意見を封じ込め、相手の出方を見て言葉を選ぶかのように。そしてそれは……その姿はあるで……。

「楽しいですよ。……ともね」

そして男は、「わざわと」、そう言い放つのであつた。

「やめて！」

私は叫んでいた。

そうだ。私は男の姿に自分を見ていた。それは鏡に映つた自分の姿なのだ。そして男も、そのことに気がついてゐる。お互に相手が気になるのは、そのためなのだ。

「……すみません」

長い沈黙の後、私は深く頭を下げた。できればこのまま消えてなくなりたいとも思つてゐた。

「謝ることはありますんよ。悪いのは私の方なんですから」

「いえ……そうではないんです……」

私はこの男を否定したかつた。私は私を否定したかつた。なんてむなしいことだらう。なんて悲しいことだらう。

「……お願いがあります」

「なんでしょう」

私は何とか力を振り絞つて、いつ告げた。

「私のことを思つてくださるのなら、……彼を殺すことをおきらめて下さい」

「……」

「お金なら払います。依頼額の一倍、三倍、いえ十倍だってかまいません。お望みの額をお支払いします。今すぐには無理でも、何年かかるってでも必ず……。それでも不十分というのなら、私を、私のことを……」

「おやめなさい」

男は言つた。またあの悲しそうな表情に戻つていて。私はどうなつてもかまわない。彼にどんな秘密があつてもかまわない。ただ彼のことは、彼を愛した自分の気持ちだけは否定されたくなかった。ただそれだけだったのに。

「いいですか。自分をこれ以上貶めることはもうおやめなさい。それに私はお金のためだけでこの仕事をしているわけではないんですね」「それは今度のことも、同じなのですね」

「……ええ」

彼は、死に値するような人間といふことなのか。私の気持ちの中で、さつきまではすぐ近くまでたどり寄せることができたと思った。男の存在が、今は前よりも遠く離れてしまつたように思えた。「わかりました。取り乱してすみませんでした」

「……ええ」

「最後にもうひとつだけお尋ねしてもいいですか」

「……どうぞ」

「仁科といふ名前に聞き覚えはありませんか？」

「……」

「答えてください」

「……いいえ。そのような『男』は知りません」

「……ありがとうございました」

それで十分だった。私は男に頭を下げて、再び駅への道を歩き始めた。背中に男の視線を痛いほど感じたが、私の後をつけてくる気配はなかつた。

私の見え透いた問いかけに、男はわざとのつてきてくれた。私は

「仁科」という人物を、男性とも女性とも言つていなし。だが黒服はそれが「男」であることを知つてゐた。単なる偶然であろうか。連續する彼の同級生の死は、やはりこの男の手によるものではないのか。

私はいつしか歩きながら泣いていた。せつかくの化粧も無茶苦茶になつてしまつてゐるに違ひない。だが私は顔を上げたまま、まつすぐに前を見据えて歩いていた。くじけてなどいられない。なぜなら、まだまだスタートラインに立つたばかりなのだから。

その八

駅のトイレで化粧を直すのに手間取つたが、何とか待ち合わせの時間には間に合つた。島崎さんが指定した駅の近くの喫茶店は狭く、お昼時にもかかわらず店内には客はほとんどいなかつた。私は食欲がやはり湧かなかつたため、レモンティーだけ頼むことにした。やがて待ち合わせの時間から十分ほど遅れて、島崎さんが姿を現した。

「いやいや、すみません。客からの電話に時間とられてしまつて。何言つているかさっぱりわからなにやつて、ホント、困つちまいましたよ」

そう早口でまくし立てる、席に座るや否や、大声でピラフとハムサンдвとサラダとコーヒーを矢継ぎ早に注文した。

「いやあ、これくらい食べないと、午後からやつていけないもので」と照れくさそうに頭を搔いた。

「あ、あとですね。申し訳ないんですが、それほど長居できなくなつてしまいましてね。風邪でバイトが三人も休みやがりまして。うちのフロアも手が足りなくなつちやつて」

仮病を使ってバイトを休んでしまつた私には耳の痛い話だつた。島崎さんは、都内にいくつも支店のある大型有名ティスカウントストアに勤めている。かなりのやり手らしく、もうフロアの主任を任せられているのだとうだ。

「お忙しいところ、無理言つてすみません」

「いえいえ、他ならぬ奥さんの頼みですから」

そう言つて島崎さんは笑つた。やつぱり面と向かつて「奥さん」と言つてしまつと、なんとなくむず痒い。しかし、その人懐こそうな笑顔を見ていると、いちいちそれを訂正する気にはならなかつた。

「それあの、アルバムは……」

「あ、はいはい。ちゃんと持つてきていますよ。これです」

島崎さんはバックの中からそのアルバムを引っ張り出した。すぐに私に手渡そうとしたが、ちょっとと思ひどまつて、それをまた引つ込めた。

「奥さんさあ、タベの電話で江藤のかわりに、仁科の葬式にも出たいなんて言つていただけど、あれ、単なる口実でしょ」

「えつ？」

いつたい何を言い出すつもりなのか。

「図星でしょ。あいつのことで何か気になることでもあつたんじやないですか」

「気になること……？」

「やつぱり、あるんだ」

「いや、でも、それは……」

「ゆうべもあれからいろいろ考えてみたんですけどね

と語つて、低い声で含み笑いをした。笑うと田と田じりのしわが一緒になつて見えなくなる。見かけによらず（と言つては失礼だが）鋭いところもあるのかもしない。島崎さんになら相談してもいいかも、と私は思い始めた。今度のことについて、私の考えを笑うことなく、協力してもらえそうな気もしてきた。

「ズバリ！　あいつの浮氣を疑つているんでしょ？」

「は？」

まったく予想だにしない解答が返つてきて、私は啞然てしまつた。島崎さんは、そんな私を見て、わが意を得たりとケタケタ笑い始めた。

「例えばさ、高校時代にいつしおだつた女からあいつに連絡があつてさ、それから妙に奥さんに対してもそよそよしい態度をとるようになつてきてさ、帰りは遅くなるし、連絡はいつも取れなくなる。本人は仕事だつていついていても、どうなのかこつちはわからないものね。今もどこかでその女といちやついているんじゃないか、そう思つたらいても立つてもいられなくなつちゃつて。そんなときにおちよ

うど俺からの電話があつたものだから、これ幸いと俺のことをダントンりじゃないですか

よくもまあ、そんな馬鹿な想像ができるものだ。私の島崎さんに 対する評価は、また百八十度変わってしまった。

「違います！ そんなことじやありません」

「いいですよ、隠さなくとも。だつてそういうことじやなきや、 アルバムなんて貸してもらうために、わざわざこんなところまで出てこないでしょ。あいつには秘密で、いろいろと調べたい大事なことがあつたんじよ」

「ええ……確かに……それは……」

「ほうらやつぱりだ」

島崎さんはまた笑つた。明らかに他人の不幸を楽しんでいるかのように見えた。私はあきれた。これでは本当のことを話しても、まったく信じてはもらえないだろ。自分が了見の狭い女だと思われるは癪だったが、あえて島崎さんの思い込みはそのままにすることにした。とにかく、アルバムは見せてもらわなければならぬのだ。

「でもなあ、俺も一緒にいましたからよくわかりますけれども、うちの学校、あんまり大した女子はいませんでしたよ……」

「ど、とにかく、ちよつと見せてもらえますか」

やつとのことで、私はそのアルバムを手にすることができた。緑色の装丁で、あまり厚くもない。まあかさばるような代物なら、たとえ私が頼んだとしても、島崎さんはここまで持つててくれることもなかつたに違いない。

中身は一般的なよくある内容のようだつた。最初に校歌が書かれていて、それから校長をはじめとする教職員の写真、校舎などの全體写真、体育祭や文化祭などのイベントや授業風景のスナップが続いて、それから一組からの生徒たちの集合写真と個々の顔写真のページになつた。

彼と島崎さんがいたのは四組である。やや顔を斜め下に向け、眉間にしわを寄せながら上田遣いにこちらをこちらでいる彼の写真があつた。

「馬鹿でしょう。つっぱっているのが格好いいと思つてたんだよね、この頃は。まあ、俺も人のことは言えないんだけどね」

見れば、島崎さんも似たようなアングルで写真に納まっている。何だか可笑しかつた。

中島・仁科の両氏も見つけることができた。このわずか数年後に、自分の命が絶たれてしまうなんて、想像できなかつたに違いない。

「こちらが先日亡くなつたといつ……？」

「えつ？ あつ、そうですそうです。俺たち三年間同じクラスでしたから。よくつるんでいましたよ。ちょっといいですか。確か前のページに……ほらこれ」

前ページの日常のスナップ写真の中に、文化祭のときのものであらうか、喫茶店の催しでエプロン姿の四人が写つているのがあつた。「こんな気持ち悪い写真、残さなくてもいいのにさあ……」

それでもいい思い出なのだろう。私の体験することの出来なかつた、文字通り高校時代の青春の一ページがここにある。島崎さんは照れくさそうだった。気がつくと注文した品はきつちり平らげていで、ピラフの皿はすでに空だし、サンドイッチも後一切れぐらじしか残つていなかつた。

「じゃあ、今度のことは、突然のことでショックだつたでしょうね」「いやあ、ゆうべも言つたかもしませんけど、中島なんて高校出てからほとんど連絡とつてませんでしたしね。仁科もねえ。あんまり悲しいとか言つのはちょっとないかもですね。まあ確かに死んでしまつたつて言つのは、びっくりしましたけれども、これで三人目のことですしね」

三人目？

「あの……三人目つて、仁科さんと中島さん以外で、同じクラスでお亡くなりになつた方がいらっしゃるんですか？」

「ああ、そうですよ。……ちょっと貸してください」

島崎さんは食後の「コーヒーを飲み干すと、アルバムを手にした。

「ええと。『コイツですよコイツ』

と言つて、メガネをかけたやせた一人の青年を指差した。

「なんか陰気そうな奴でしょ。実際そつだつたんですけれどね。」

向井つて言つて、卒業してから一年か一年ぐらいしてかな、いきなり死んだらしいんですよ。なんでもなにかの病氣ですかうつと入院していましたらしくて」

集合写真の中でみるとよくわかるが、小柄な上に瘦せていて、確かに健康そうには見えない。うつむきがちにカメラの方に向かってこちらを見る田つきも、どこかうつろだつた。

「病氣で入院してたつておっしゃいましたけど、どんな病氣だったんですか」

「さあ……」

「この頃から、お体も悪かつたんですか」

「どうだつたかなあ。いや、そんなことはなかつたと思いますよ。体育だつていつも出ていた記憶もあるし。高校卒業してからの病氣なんじやないですかな。俺も知り合いからのまた聞きなもので」

「この方のお葬式には、皆さん出席されたんですか」

「だつて知りませんでしたもん」

島崎さんは、何を馬鹿なことを聞くのかといった表情をして、ポケットから煙草を取り出して、火をつけた。

「あと、これも聞いた話なんですけれどね。当時のクラスメイトだった人間には、誰にも知らせなかつたらしいんですよ。それでもまあ、近所に住んでいた奴らはわかりますよね。で何人かは参列しようとしたんですけども、母親に全部追い返されたとか

「……どうしてなんですか」

「わからないですよ。わからないですけれども、……言っちゃあなたですけど、聞くところによるとコイツの母親がちょっと『コレらしくて』

と、頭の横で指をくるくると回して見せた。

「自分の息子が死んだのは、そのクラスメイトのせいだって思い込んでいたらしいんですね」

「クラスの皆さん、原因?」

「ええ、というか、学校全体つて行つたほうがいいのかな。向井が通つていたとき、その高校にいた奴ら全部です。当時の校長や担任も含めて」

まさか……それは……。

「……どうこいつことなんですか」

「いじめですよ、いじめ。その高校でいじめがあつたっていうんです」

やはりそうなのか……。一瞬、自分の学生時代のことがフラッシュバックした。

「向井が死んだのは、それが原因だつたつて、葬式のときもわめき散らしていたらしいんですね。でも、誰もそんな大層なことした記憶がまつたくなくて。へんな濡れ衣を着せられて、大迷惑ですよ」

「……本当なんですか? いじめはなかつたつて」

「そんな馬鹿なことしませんよ。だつて写真見てもわかるでしょ。コイツ本当に暗くて、何考えているかわからないような奴だつたんですよ。声かけてもぼそぼそ聞こえないような声で話すし、気味悪いし。俺は係わり合いを持ちたくありませんでしたね。皆もそうだったんじゃないですか?」

「それは、『無視』していた、ということですか、島崎さんだけではなく、クラスの方々も、みんな」

島崎さんはすぐには答えようとせず、さほど短くもなつていない煙草を、急いでみ消した。

「……そうですね。無視していくても視界に入つてくるような奴でしたけどね」

結局、いじめはあつたのではないか。肉体的ではなく、精神的なものが。あながちその母親が言つていることは、間違つてはいな

いのではないだろうか。

「でもコイツが死んだのは、卒業してからかなりたつてからですよ。どこか勤め先か就学先でなんかあつたのかもしないし、自殺したわけでも遺書を残したわけでもないみたいだし……。昔のことをあれこれ穿り返して、逆恨みされても……ねえ」

私の見る目に、非難の色を感じ取ったのか、島崎さんは早口でそうまくし立てた。それはおそらく、その同じクラスの他の人たちも、そう感じていることなのだろう。自分たちのせいではない。自分たちは悪くない。あくまで濡れ衣なのだと。だが、母親はそうは思わなかつた。ひょっとしていじめがあつたこと、そしてその後の死の原因が高校時代にあつたということを、確信するに足る何かがあつたのではないか。島崎たちが忘れてしまつたような、ささいな、それでいて重要な出来事が。

私は今度の殺人の依頼をしたのが、その母親ではないかと思い始めていた。だがまだ情報としては少なく、決め手に欠ける。まさか彼を含めた当時同じ高校にいた人間全員を、皆殺しにするという訳でもないだろう。それはますます非現実な行為だ。

となると、ここ最近亡くなつた一人と 考えたくはないが彼と、この向井という青年との間には、何か特別な関係があつた可能性が考えられる。他にもそんな人物がいるかもしれない。たとえば島崎さんもその一人であることも考えられるが、今の状況ではこれ以上聞き出すことは難しそうだつた。

その母親に会つてみよう。私はそう心に決めた。素直に全てを認めてくれるとは思えない。だが、まずは一目見てみたかつた。直接会話してみたかつた。すべてを知るには、それが一番の近道ではないだろうか。一か八か、その可能性にかけてみようと思つた。

あの黒服の男の言葉が頭に浮かんだ。確かにもつとうまく、真実を突き止めるやり方があるのかもしれない。でも私には、やっぱり私にはこんなやり方しかできないのだ。後悔しないためには、今、自分が最良と思えることをやるべきなのだ。

いつしか会話はすっかり途絶えてしまつていた。島崎さんはそんな沈黙に絶えられなくなつたのか、休み時間の終わりが近づいたためか、そそくさと自分の伝票だけもつて出ていってしまった。結局アルバムは、そのまま借り受ける形となつた。

私はずっと向井青年の写真を眺めていた。これまでも、そしてこれからも会うことのできない人物。その当時に会つていれば、友達になることもできただろうか。互いに相手を理解することもできただろうか。私が本当に話をしてみたいのは、母親ではなく、実はこの青年なのであつた。

その九

店を出てから、携帯から彼に電話をしてみた。

「……はい」

「もしもし、哲ちゃん。あたし」

彼は電話に出てくれた。まだ生きているし、きっと会社にも（本当に会社にも）出社しているに違いない。私はほつと胸をなでおろし、あまりにも安心しそぎてしまったため、その時の会話に大きな間が空いてしまっていることに、しばらく気がつかなかつた。

「もしもし？ 哲ちゃん？」

「聞こえてるよ。……なんだよ。何か用かよ」

「ごめんなさい。でも心配で……」

「何がだよ」

「ゆうべはアパートの方に戻らなかつたじゃない。だから……」「留守電にメッセージ入れといたる。仕事で遅くなつちまつたから、帰るのがめんづくせくなつただけだよ」

島崎さんの言葉が頭をよぎつた。「帰りが遅いのは仕事のせいだつて言つけど、本当のところは……」馬鹿な。彼の何を疑うといつのか。

「ねえ、朝ご飯はちゃんと食べた？」

「食つた食つた。……もういいか。切るぞ」

「あ、待つて。……今日も遅いの？」

「……そんなもん、わかんねえよ。仕事の出来次第だからな」

「後でちゃんと帰れるかどうか連絡頂戴ね」

「ああ。わかつたわかつた」

「……哲ちゃん」

「なんだよ。まだあんのか」

私は向井という彼の元同級生のことについてみたかつた。彼は覚えているのだろうか。

「ううん。何でもない。……お仕事頑張ってね。それから……気をつけて」

だがそのことも、あの黒服のことも、何も聞くことはできなかつた。

「わかつたよ。じゃあな」

電話は切れた。まだ大丈夫かもしれない。知らないままならその方がいい。私は携帯電話をかばんにしまった。

私はこれからることを少し考えるために、近くの公園に入った。そこは昨日の公園とは違い、都会の緑化対策のために設けられたかなり大きな場所で、一息入れにきているサラリーマンやベビーカーを押す若い主婦、散歩に来たと思わしきお年寄りたちが点在していた。しばらく歩いた後、まわりに人がいないベンチを見つけ、そこへ腰掛けた。

遠くから音楽が聞こえてきた。近くの店が店内で流している有線なのかな、誰かがラジカセを持ち込んでいるのかはわからないが、最近、良く聞く曲であるようだ。歌っている歌手や曲名についてはよく知らない。だが、よく聞くということは、それだけ人気のある曲なのだろう。それとも流行りせるために、頻繁にかけているだけなのだろうか。

じばらぐその曲に耳を傾けていると、それはいわゆる「信じれば夢はきっとかなう」ということを言いたいらしかつた。サビの箇所でそのことを強調するかのように、なんども繰り返している。それはこれまで手を変え品を変え、常にずっと歌われてきたことでもあるのだろう。

夢……。私の夢とは何だろう。私は子供のころ、どんな夢があつたのだろう。

少なくとも、今の私の夢は、このまま何もなく平和に今的生活を続けて行きたい、ということだけだ。自分が愛した人、自分を認めてくれた人と一緒に、ずっと生きてゆきたい。貧しくつたつてかもしれない。誰にもわかつてもらえないかもまわない。ただ、彼がい

れば。ただ彼と一緒にならば、それでいいのだ。

精一杯努力をすれば、心からそれを願うならば、そんなささやかな夢でもかなえることができるだろうか。

でも、何をどう努力すればよいのだろう。何を信じればよいのだうひ。

私はかばんの中から、あのアルバムを取り出した。おしまいの方のページには、教職員と卒業生全員の住所が記載されている。先に亡くなつた二人と彼の実家の住所、そして向井青年のものを急ぎメモした。そしてまた、クラス写真のページを開いた。

向井青年の写真をまじまじと眺める。ふと、この青年が抱いていた夢は何だったのだろうか、と思った。いじめを受けていたらしい高校時代。そして卒業後わずか数年でこの世を去るまで、何を夢見て生きていたのだろう。叶うことはなかつたかもしれないが、それは信じる力がたりなかつたせいなのか。そんな馬鹿な。それは誰かが奪つたかもしれないのだ。そしてそれは……。

私の彼の仕業であるかもしれないのだ。

私の目の前に、あるひとつ可能性がある。それは今度の出来事のすべての真相であるかもしれない。仮にそれが本当のことであるのなら、私はどうするだろう。どうすればよいのだろうか。

私にできることは、この青年の死を悼み、そこから生まれてしまつた恨みを開放することだけなのかもしれない。

私のために。私自身の夢のために。

それも、单なる私のおごりでしかないのだろうか。

私は必死にその考えを封じ込めようとした。その一方で、この青年ならわかってくれるはずだという、甘えにも似た期待があるのも事実だった。

その根拠はこの写真だった。この中にも、私がいる。いつも何かにおびえ、心を閉ざした悲しい目つきをした孤独な人間。それは学生時代の私のことではなかつたか。ただひとつ違っているのは、もし私がクラスの何者かの手によって（直接的にせよ間接的にせよ）

命を落とすことになつたとしても、私の親は恥じることはあつても悲しむことなどなかつただろう。もちろん殺し屋まで雇つて復讐をしようなどと、これっぽっちも思いはしなかつただろう。

小さい頃から私は、親という暴君の元で虐げられ続けた奴隸のような存在だつた。両親は一人ともプライドが高く、特に母親は世間体を人一倍気にするたちであつた。自分の生んで育てた子供たちは、決して人前に出ても恥ずかしくない存在でなければならない。と言つよりも、すべてにおいて人より抜きん出た存在でなければならぬいと考え、それを強いた。実際高い学歴を持ち、職場でも世間でもかなりの地位を得ていた人たちではあつた。自分たちは優秀なのであるから、その子たちもそうあるべきだと考えていたのだ。

傍から見れば、単なる教育熱心な母親に見えたかもしれない。ところがそれは上辺だけで、その実その欲求は度を越していた。異常だつたと言つてもいい。

理想的なわが子を育てるために、まずあの人たちが行つたのは、親の絶対的な管理下におくということだつた。テレビを見ることも許されなかつたし、自由に外で遊ぶこともままならず、決められたタイムスケジュールに沿つた生活を余儀なくされた。何時間もひたすらに机に向かう毎日。食生活にまで干渉して、間食や買い食いをすることなどもつての他であつた。そのころ家の外へ出られたのは、学校に行くときと酔い事へ行くときだけだつたといつても過言ではない。

やがてそんな生活を続けているうちに、両親は自分の娘の方が大して優秀ではないことに気がついてしまつた。私には歳の離れた兄がいたが、この兄がある意味要領がよく、親の期待にそれなりに応えたのに対し、私は劣等生であつた。ひとつ問題を解くだけでもすんなり答えにたどり着くことができず、理解をするのに時間がかかり、同じ失敗を何度も繰り返す。特に一度躓くと、なかなか挽回できずに悪あがきして、ますます被害を拡大してしまつた始末だつた。幼い頃から非常に不器用だつたのだ。

私なりに一生懸命努力は行つた。だが駄目だつた。うまくはやれなかつた。そんな私を両親はしかつた。女だから幼いからということは理由はならなかつた。兄が出来てることが私に出来なかつたのだから。時には私に酷い体罰を与えて、時には私をののしり、聞くに堪えない罵詈雑言が浴びせられた。ますます私は萎縮し、両親の期待からどんどん外れていったのだった。

なかなか先に進めないのであつたから、成績も伸びなかつた。管理や監視の目はますます厳しくなる。そして私は高校受験の時期を迎えた。両親は私を県内でもっとも優秀な進学校に入れたかった。でもその時の学力では、無理であることは誰の目にも明らかであつた。担任もややランクの落ちる女子高を勧めたが、聞く耳はもたれず、そのまま進学校にこだわり、無理にそこを受けさせられることになった。

それはあくまで面子の問題であつた。それでもその時は、私はそれに従うほか道はなかつた。今までの何倍もの勉強につぐ勉強。睡眠時間も減らされ、食事もろくにとれず、付きつ切りで私は監視されていました。今がいつ何処で自分が誰なのか何をしているのかさえわからなくなるときもあつた。

そんな生活を続けていくうちに、私の体の方が悲鳴を上げた。一応病名は神経性の胃炎ということになつたが、そんな生易しいものではなかつたと思う。半死半生の状態で、ベッドに横たわる私に向かつて、それでもあるの人たちはこう言い放つたものだ。

「こんな大事な時期に体を壊すなんてたるんぢやない証拠だ」

「冗談などではない。本当にそう言つたのだ。そして主治医の先生が止めるまで、私に病室で受験勉強を続けるよう強いたのだ。そんな度を越えた要求に、私はなんとか応えようとしていたのだが、無理だつた。受験日までには退院することができたのだが、さすがにそんな状態ではまともに試験を受けることができなかつた。私はタフではなかつた。逆境を跳ね返す力もなかつた。私は受験に失敗した。高校はそこしか受験していなかつたので、私は進学をあきらめざるを得なかつた。

「お前は金ばかりを喰うクズだな」

発表の日、不合格の結果を報告した後で、母親はこうも言い放ち、

さらに最後通告を下した。

「お前にはほとほと愛想が尽きた。もうお前に出してやる金など一
銭もない。この家に居ようが外で暮らそうが好きにすればいいが、
自分の生活費用は自分で稼げ。それから今までお前のために費やさ
れた金も、全額返してもらうからそのつもりで……」

もうイヤだ。やはりこのことは思い出したくはない。私はベンチ
の上で、両の拳を握り締めたままぶるぶると震えていた。悲しみよ
りも、何よりも怒りが、の人たちへの怒りが心のそこからわき出
でていた。

死のうと思ったことも何度がある。でもそれを実行する勇気がな
かつた。たとえ私が死んだとしても、誰も悲しむ人間がないのだ
と思うと、むなしくなり悲しくなつた。私にできることと言えば、
夜、やつと床に就くことのできた布団の中で、声を殺して泣くこと
だけだつた。

こんな話は信じられないのかもしれない。しかし事実なのだ。あ
の人たちのせいで私は……私の人生は……。

お前たちこそ人間のクズだ。そうだ。死ぬべきなのはお前らのよ
うな連中なのだ。何故私が死ななければならないのか。何故彼が死
ななければならぬのか。何故あんな奴らがのうのうと生きながら
えているのだ。そんなのは理不尽だ。許せない。許せない許せない
許せない。努力すれば夢もかなう？ テレビの中でちやほやされて
いるような人たちに、そんなこと言う権利などない。所詮口だけの
たわごとだ。いつでも本当に救われたり、恵みを受けなければなら
ない人間ばかりが、つらい目にあうなんて。世の中を器用に渡り歩
くこずるい人間だけが、甘い汁を吸いつづけるなんて。そんな
そんなことつて……。

私は負けない。私は間違つてなどいない。報われなければなら
いのは私の方だ。そして今度こそ、夢をかなえてみせる。自分の思

い通りに未来を変えてみせる。必ず。全体に。きっと……。

ふとみれば、私はす向かいのベンチには、いつしか一組の若いカップルがいた。女の子のひざの上に、男の子の方が頭を乗せて横になり、人目をはばからず、いちやついて何事か話している。

私はその女の子に聞いてみたかった。もし今、側に居る彼氏が何者かに殺されるかもしないとわかつたら、生死にかかる重大事に巻き込まれていたとしたら、あなたはいつたい、どうするの？自分の命をかけても、彼のこと守る？ それともそんな危険な状況からは逃れて、すぐに別な彼氏を見つけて、すべてを忘れてしまう？ それとも…… それとも…… ？

私は、彼を、守つてみせるわ。必ず。

私は大きく深呼吸して空を見上げた。体が熱い。いろいろなことを考えいろいろなことを思い出し、体に変な力も入つてしまつたためか、軽い疲労感すら感じられた。私は息を吐いて脱力し、そのまま空を眺めていた。いつしか大きな厚い雲が、空を覆い始めているのに気がついた。不吉な予感がする。だが私はあえて何も考えないようにした。ただひとつのこととのぞいて。

実は、今のこの世界は、嘘なのだ。このときの私の立場もこれまでの私の人生も、太陽を遮る黒雲でさえもすべて偽り……。誰かそうだと言つてくれないだろうか。何もかも、なくなつてしまえ……。

私は目をつぶり、すべてが変わることの望みながら、ゆっくりとゆっくりと十を数えた。そして、再び目を開けたとき、その時、世界は。

もちろん、何一つ変わつてなどいない。 負けるものか。その一言だけを、私は口にだしてつぶやいた。

「もしもし。大丈夫ですか」

「……えつ」

はつと顔を上げると、目の前に心配そうな顔をした警察官が立っていた。

「どこかお体のかげんでも悪いのですか。真っ青ですよ」

「あつ、いえ、平氣です。もう大丈夫です。『心配なく』」

私はあわてて立ち上がり、警官に頭を下げてそそくせとその場を離れた。いつの間にかベンチにへたり込んで眠ってしまったようだ。しばらくの間、記憶がまるでなかつた。

心と体がうまくかみ合つていなかのようだ。こんなことで本当に大丈夫なのか。

先ほどから頭上を覆い始めていた雲が、さらにいつそう濃く黒くなつた気がする。冬の早い日暮れとあいまつて、あたりはすでに薄暗くなり始めていた。大した時間をこの街で過ごしたわけではないが、彼の田舎の方へ出向くのは時間的に難しいように思えた。見知らぬ土地でいろいろと調べたり、人に会つたりする（もちろん向井青年の母親ともできれば会わなければならない）には、もつと時間が必要だと思った。精神状態や体力にも不安があつた。私はやむを得ず、いつたんアパートへ戻ることにした。

しかし、次の日は無駄に時間を費やしたりしないようにしなければならない。ある程度は計画を立てておかねばならないだろう。私は帰りがけに大きな本屋に立ち寄つて、地図と時刻表を探した。彼の地元の町並みと具体的な場所を確認し、移動や帰宅するまでの時間調べておくねばならないと思つたからである。しばらく探してみたが、なかなかいいのが見当たらず、そこではやや大きめの地図と、ポケットサイズの時刻表を買い求めた。

会計を済ませ、外へ出ようと店内を横切つた時、ふと、そこの一

角にいじめに関する書籍を集めたコーナーがあるのが田に止まつた。ちょっと覗いてみると、小さなコーナーであったが、多くの種類の書籍が並べられていた。過去のいじめが原因で大きな事件に発展したケースのドキュメント、現在の学校でのいじめのリアルタイムなレポート、どうすればいじめはなくなるのかといった対処方法等々……これだけの本が出ているということは、それだけ「いじめ」が深刻な問題であると言う証明であるように思えた。

だが 簡単にそれらに目を通した限りでは、どの本も根本的な問題解決のための術は見出せてはいない様子だつた。それは当然と言えば当然の結果なのかもしれない。「いじめ」が行われている最中は、いじめている側や、それを取り巻くクラスメイトや教師や父兄たちにとっては、その行為が「いじめ」であるという認識は薄いものなのだ。何かことが起こってはじめて、その重大さを知ることになるのである。そしてその時には、もう取り返しのつかない状態まで進んでしまっていることが多いのだ。

私の小学中学時代も、「いじめ」はあつた、と言えると思う。このときの私は日頃から親にずっと責め続けられ、自分が無能な人間だと思わされて来ていたため、同じクラスの人間に對してもすっかり萎縮してしまつてしまつて、自然にコミュニケーションをとることもできなくなつてしまつて、そして、まわりはそんな私を常に「無視」していた。何人かはちょっとかいをかけてきたり、きまぐれに声をかけてくれることもあつたが、まともな受け答えすらできないので扱いづらいと思われたのか、それつきりになることが多かつた。私はひとり隅のほうで、息を潜めて小さくなつているばかりであつた心の中では誰かと友達になりたい、誰かに助けてもらいたいと考えていても、それを実行に移すことはできなかつた。私にとって他人は、私を叱責しあざ笑うだけの存在に見えていたのだから。ここで何か事件や事故が起これば、世間の耳目を集めることにもなつたのかもしれないが、私はひとりで自滅しひとりで逃げ出しただけである。もつともその逃げるという行為ですらも、後の彼の存在がな

ければできなかつたことだ。結果として、私は立ち直ることができた。私は過去を断ち切ることで、抑圧された人生にけじめをつけ、何とか生き延びることができていいのである。

そうだ。いかにしてけじめをつけるか。というよりも、けじめは正しくはつきりとつけられなければならないのだ。そうでなければ、より悲惨で大きな事件が引き起こされてしまふことになるのではないか……。今回のように。

向井青年の母親にとつてのけじめのつけ方が、今度のような誤った行為であつたとしても、まだ時間はある。ほんのわずかかもしれないが、ゼロではない。私はそう思つことにした。彼の代わりに、私がけじめをつけよう。私が過去の恨みの連鎖を断ち切らせよう。私はその場を離れた。これらの本は参考にはなるが、実用的ではない。ただ、私ははつきりと、自分に必要とされるものがなんであるかを自覚することができた。この危機的事態を耐え抜く強さと、この状況を好転させる術を見つける理知。この二つだ。それがわかつただけでも、頼るべき人のいない私にとつて、よいと思わねばならない。私は本屋を後にした。

駅に入つたあたりで、とうとう雨が降り出してきた。急いで飛び乗つた電車の窓を無数の冷たい雨つぶが覆いはじめていた。傘は準備していない。駅に着くまでに、小降りになつてゐるといいが。私は雨に関するいやな思い出を呼び戻すまいとしていた。あの日の、兄と母との……思い出を。

私はぐつたりと電車のシートに深くもたれかかった。体がいやに重い。昨日あんなに走つたおかげで、足は筋肉痛だつた。何度も転びそうになつた。これまで運動とは無縁の生活を送つてきたので、当然と言えば当然なのかもしれないが。体を鍛えれば、あの黒服の男のようにすぐくなれるのだろうか。何の気なしに見上げると、その視線の先に都内の有名スポーツクラブの広告が私を見ていた。私はなんだかおかしくなつて、声を出さずに笑つた。偶然にしてはでき過ぎだ。

あの男はどこであんな体を作ったのだろう。どういう鍛え方をすれば、あんなに物凄くなるのだろうか。冬場とはいえ、何キロ走つても汗ひとつかかず、危険な三人の若者たちをあつという間になぎ倒す。まるでスーパーマンだ。まったくあの三人も、とんでもない人間を相手にしたものだ。

そう言えば、あの不良たちは結局どうなつてしまつたんだろう。あの血だらけの惨状がフィードバックして、寒気がした。しかし元はと言えば、私がぶつかつて謝らないで逃げようとしたことから始まつたのだ。事の発端は私なのだ。あの三人の生死も気になる。もう一度現場へ行つてみようか……そんなことも考えた。

そうだ、新聞。ゆうべのあの出来事が事件記事になつていいかもしない。朝はいろいろなことで頭がいっぱい、朝刊に目を通すことも、テレビを見るともしなかつた。あれだけの事件がニュースになつていなければ、もし誰か死んでいたらなおさらである。

私は駅に着くと、売店でビニール傘（無駄とは思いつつも買わざるを得なかつた）と、いろいろな種類の新聞をまとめて購入した。それぞれに別角度から様々な情報が載つてゐるかもしだれないと思つたからだ。そして急いでアパートへ飛んで帰り、地元の新聞とあわせ一紙一紙くまなく目を通した。ところが……。

何も載つてはいなかつた。どの新聞もすべて。

これは一体どういうことなのだろう。何がなんだかさっぱりわからない。タベのことは、あれは夢だつたのか。そんなことはない。あの血、あの声、あの鈍い音。忘れてくとも忘れられるものではない。それにあの男が逃げる前に、確かにパトカーのサイレンが聞こえてきた。誰かが現場を見ていたのだ。あの現場を見ていれば、誰だつて騒がずにはいられないのではないか。なのに小さな記事にもなつていないので。

私はあれがニュースにならない可能性について考えてみた。一つはあの三人の怪我が思つた以上に大した物ではなかつたということ。

パトカーが近くを通っていたのは単なる偶然で、無事に三人はあの場を離れることができたという場合だ。

しかし、あの大量の血はどうだろう。路上にあれだけの血が残つていれば、皆何事があつたかのかと、大きな騒ぎになるはずだ。まさかあの後、きれいさつぱりとなくなつてしまつたわけではあるまい。それにあの量の血を流して、当人が無事でいられるとも考えられなかつた。

もうひとつは警察などが何らかの形で、事件の公開を差し止めている場合だ。他に何らかの大きな組織が動いているかも知れないと考えたが、新聞社やマスコミを押さえ込むことができるほどの組織など、警察以外に考え付かなかつた。しかしこちらも納得できない。誘拐事件ならともかく、傷害事件（ひょつとしたら殺人事件）なんかかもしれない。より広く事件の詳細を広めた方が、重要な情報や手がかりが手に入りやすいはずだ。

私はすぐにでも警察へ行つてすべてをぶちまけてしまつたかつた。だが、すべてを相手に納得させる自信がなかつた。あの時、一緒に男と逃げてしまつたのが悔やまれる。警察は男と私の関係を深く追求するだろう。誰が信じてくれると言うのか。あの男は殺し屋で、私の大事な彼氏を殺そうとしている奴だと。名前も居場所も何も知らない男の言葉を鵜呑みにしている馬鹿な女と見られるだろう。

何一つ確かなものなどない。すべてが推測ばかりである。彼のかつての同級生の相次ぐ死を、今度の彼の殺人予告と関連があるのだと思い、そしてそれがやはり過去のいじめを受けた青年の死から端を発しているのだと、その母親が、復讐のために殺人を依頼したのだと。なんと冷静に考えればかけた発想なのだろう。

でも私は、あの男と会つたのだ。あの男と話したのだ。それをすべて否定することはできなかつた。

何でもいい。はつきりしたことが知りたい。自分の力で、眞実にたどり着きたい。後になって、こんなことがあつたのだと、笑い話にできるならその方がいい。

私は新聞を片付け、テレビをつけた。ちょうどビタ方のニュースの時間だった。新聞には載つていなくても、テレビで取り上げてはないだろうか、そんな気持ちであつたに過ぎないのだが……第一報で流れてきたニュースに私は愕然となつた。

「本日、S区M公園内のベンチ付近で男性が倒れ、そのまま死亡するという事件が発生いたしました。この男性は内ポケットの社員証から、近くのディスカウントショッピングに勤務の島崎一夫さん、二十一歳と判明……」

私は画面に釘付けとなつた。画面に映つているのは、さつきまで私がいた公園であり、写真是出なかつたが、画面に出た文字は昼過ぎにあつたばかりの島崎さんの名前であつた。そしてその名前のすぐ側には、「死亡」の文字が……。死んだ? 島崎さんが? 私と会つた後で、私もいた公園の中で殺されたのだ。

「……後頭部に錐のような鋭利な刃物で刺した後があり、この傷による出血死が原因と見て調査を進めております。島崎さんは本日の昼休み、人と会う約束があると言つて外出してから職場には戻つておらず、警察ではこの待ち合わせの人物が、このたびの事件と何らかのかかわりがあると見て、調べを進めています」

携帯が鳴つた。突然の大きな音で、心臓が飛び出るかと思つてしまつた。番号表示は非通知となつていた。普通ならそんな電話は無視するのだが、なにかの知らせのようなものを感じて、私はおそるおそる電話に出た。

「私です」

あの男だつた。私ののどが大きく鳴つた。

「テレビをご覧になりましたか」

「……はい」

それから長い沈黙があつた。

「あなた……なのですね」

「はい」

簡潔な答えだつた。

「私があそこで島崎さんと会つ」とを知つていたんですね

「ええ」

「そして別れた後で、島崎さんを……」

「ええ。殺しました」

その短い受け答えの意味するものはとんでもなく重いものだつた。

「私も……あの公園に行きました……」

「ええ。知つていましたよ」

「知つていて……ひょっとして、わざとそこで島崎さんを殺したのですか」

「そうかもしません」

何か得体のしれないものが、頭の中を、体中を這いずり回つてい
る。私の行動は、男にすべて筒抜けであつた。私は男の手の中で、
みじめにうごめいていただけにすぎないのだ。

「私……今度のことをすべて警察にお話します」

「それはやめた方がいいでしょ」

男は相変わらず抑揚のない声で答えた

「なにか確実な証拠でもあれば別なのでしょうが、警察は信じては
くれませんよ。それに生きている島崎に最後に会つたのはあなたで
すから。逆に変な疑いをかけられるかもしれません。ゆうべもあなたは私と一緒に逃げていますし」

「あれは……では、ゆうべのことが新聞にもテレビにも報道されて
いないのはどうしてです」

「さあ……何故でしょうね」

何という言い草だらう。私は腹が立つた。私の心中で黒服の男の存在が大きくなる分だけ、私のこの男に対する怒りも大きくなつ
ていつた。

「次は……彼の番ですか」

「かも……しませんね」

「私は今度の件の依頼人が誰であるか、うすうす検討がついていま
す」

私ははつきりとそう告げたが、男は少しも動じる様子を感じさせなかつた。

「それはすばらしい。でも、仮にあなたが思つてゐる人がそうであつたとしても、依頼を取り下げるなんて事は絶対にないと思ひますよ」

「何故ですか」

「それはその人にお会いになつてみればわかるでしょう。負けるな。負けるな負けるな挫けるな。ここで負けてしまつていけない。

「依頼人は、かつて彼や島崎さんと同じ高校に通つていた、向井という人のお母さんなのでしょう」

「……どうでしよう」

「それあの方の逆恨みです。向井さんがなくなつたのは、高校を卒業してから何年もたつてからですし、それを今になつて復讐しようだなんて、馬鹿げています」

「あなたは、あなたご自身も、本当にそうお考へなのですか」

私は息を呑んだ。その言葉に、そして男のその話し方に。いつの間にか、いつものあの男に戻つてゐるようだ。悲しそうでそれでいてどこか寂しそうな……電話口の男の表情まではつきりと見える気がした。

「……すいません」

「いえ、あなたが謝られる」とはありませんよ。私も調子に乗りすぎました

違う。いつも先に謝らなければならぬのは、私の方だ。男は常に、本音で話をしようとしている。正面から私に向き合おうとしている。それから逃げようとしているのは、私なのだ。

「……いつ、何が起こつたか、それは大した問題ではないんです。その結果として何が『残つた』かが重要なのではないですか」と、男は続けた。それは私がこれまで考へていたことと、おおむね合致する考へともいえた。

「そしてそのためには何をするのか、何をすべきなのか。それは今度のようだ。法的には道の外れた行為であるのかもしれません。それでも裁かれるのは、自分の心の中だけなのだと思います」「でも……それがまだ間に合ひのなら、私はなにかをしたいと思います」

「そうですね。それは正しいと思います」

その言葉を受けて、私も男に自分の決意を伝えることとした。

「私……明日、その向井さんのお母さんに会います」

「……………」

返事が発せられるまで、やや間があった。

「自信なんてありません。でも、知りたいんです。何があったのか。話がしたいんです。今何を思つていらっしゃるかを。何故こんなことをなさったのか、そのわけを」

「前にも言つたかも知れませんが、眞実を知ることがすべてよいことであるとは限りませんよ。あなたにはさらにつらい思いをなされるかもしれません」

「その覚悟は……できていると思います」

「そうだ。私はひとりで闘うと決心したではないか。でも……」

「そうですか……あなたなら大丈夫でしょうね」

私は、男にもうひとつ伝えたいことがあった。

「あの……ひとつお願いがあります」

「何でしようか」

私は呼吸を整えてから、

「明日、またお会いしていただけませんか」と言つた。

「えつ」

「私が母親の方とお会いした後で、もう一度直接お話をしたいんですね。あなたと」

「それは……いったいどういうお考えなのですか」

男は明らかに戸惑つてゐる様子だ。無理もない、と私も思つ。

「不安……だからでしょうか。昨日から私の中で、色々なことがぐちゃぐちゃであやふやになつていてるんです。でもただひとつだけ、あなたが、あなたの存在だけが、確実なものなのです」

「……」

結局私はひとりでは何もできないということだろう。気持ちでは負けたくないと思っていても、誰かの助けがほしかった。それを頼めるのも、もう黒服の男しかいないのだ。

「わたしとあなたは今、どうこう立場にあるのか……ご存知ですかね」

「はい」

「つまりそれは……その……」

男が言葉を選ぶよりも先に、私の方から助け舟を出した。

「……そうですね。あなたの口から『はい』とは言えませんよね」

「……すみません」

電話の先でも、男は深く頭をたれていいるのだらうか。

「いえ、無理を言つてすみませんでした」

「でも……考えておきますよ」

「ありがとうございます」

「じゃあ……これで……」

「はい……」

電話は切れた。私は電話を受ける前とは、まるで違つた気持ちになつていた。心の安らぎと、ふつふつと湧き上がる前向きな意欲。あの男と話をした後は、なぜかいつもそんな気持ちになつてゐる。私はまた「ロロン」と横になつた。つけっぱなししだつたテレビを消した。おなかも少しすいてきた。まだ化粧も落としていない。私にはやらなければならぬことがたくさんある。これからも、そしてあしたも。

私は勢いをつけて起き上がりつて、卓上の鏡を私の正面に置き、自分の顔を見つめた。そして朝と同じように笑顔を作つて、「頑張れ」と自分に言い聞かせるのであつた。

週末ではあつたが、都心行きの電車は嘘のようにすいていた。その後、別の郊外へ折り返す電車に乗り換えて、同じ状態であった。昨日から降り続いている雨のせいなのかもしれない。私はいろいろと静かに考えたい気分だったので、ゆっくり座って行けるのは好都合だった。

考えると言つても、実はずっとまつたくの堂々巡りであった。何よりも、あの向井青年の母親と連絡を取つていなかつたのだ。いきなり行つてもよいのだが、不在であるかもしれないし、会つてもらえるかもわからない。だからとりあえず連絡を先にしてみようと考えたのだが、家でも駅でもできずじまいだつた。私はまた自分の優柔不斷さをのろいながら、目的地へ向かう電車に揺られていた。ゆうべはあまりよくは眠れなかつた。極度の緊張とプレッシャーのためか、眠ることはできても、なんだか短い嫌な夢を見て、それすぐに目を覚ましてしまうということを繰り返した。その夢は、自分の忘れない過去のものばかりであった。その中の、あの時の兄や母親の囁い顔……。

私は頭を振つた。忘れよう、思い出すまいとしても、のことだけは強烈に頭に焼き付いていた。それはいつも思いがけない時にフラッシュバックして、私の心を暗く、みじめなものにしてしまうのだ。

窓から外を見る。曇つたガラスの向こうは、いつ止むともしれない強い雨が降つていた。そしてあの日もこんな雨が降つていた……。

それは、私があの家をでるきつかけともなつた出来事であつた。私はバイトを終えて帰ろうとしていた。外は雷も鳴るようなひどい夕立になつっていた。出掛けに天氣予報を確認してこなかつたせいもあつて、私は傘をもつて来てはいなかつた。しばらく待つてみた

が、雨脚はますます強くなつて止む気配がみられない。私はあきらめて走つて帰ることとした。

あの時、どこかで傘を買うかバイト先で傘を借りてさえいれば。急いで帰らず、どこかでゆっくり時間をつぶしてから戻つていれば。

バイト先から自宅まで、普通なら歩いて二十分ぐらいの距離だつた。まだ暗くなつていなかつたし、ほとんど道なりにまっすぐ進めば家に着くのである。少しごらり濡れてもかまわないと思ったのが失敗だつた。

私はすぐにずぶ濡れとなつた。小さな鞄などでは、少しも雨よけにはなりはしなかつた。服や靴は水を吸つて重くなり、顔には強い雨粒が当たつて痛かつた。すぐに後悔したが、後の祭りである。必死になつて走り続けるしかなかつた。そしてなんとか家に着くことができたが、こんな濡れた格好では玄関からは入ることができない。母親に見つければ、何を言われるかわかつたものではなかつた。私は裏口にまわつた。裏から入つてすぐの場所に風呂場があり、私は暖かいシャワーで早く体を洗い流したかつた。

家中に入る前に、できる限り服から水を絞つて、おそるおそる戸を開けた。母親がいれば別の雷が落ちる事を覚悟しておかねばならない。傘を忘れた私の不注意をののしり、こんな姿で帰つてきた私を叱責するだろう。しかし、そんなことは後でゆっくり聞くつもりだつた。とにかくまずはシャワーを浴びることが、頭の中の大部 分を占めていた。そうして中に入つてみると……

兄が立つていた。

私はびっくりして、しばらくその場に固まつてしまつた。何故なら兄は大学に入ると同時に独立し、都内で一人暮らしをしていたからである。休日でもないこの日に、我が家に兄がいたことに、私は困惑していた。

すでに私は兄とは、会話らしい会話をほとんど交わすことがなくなつていた。以前にも述べたとおり、兄は親の期待にそこそこ応え

る人間であり、逆に不器用で失敗ばかりの私を、いつしか見下すような目や態度をみせるようになっていた。口数が少なくて、何を考えているかがわかりづらいこともあり、次第に私は兄を避けるようになっていた。母親とは別な意味で、兄が怖かったのである。なるべく顔を合わさぬように、こそこそ逃げ回つてばかりいた。だが事情はどうあれ、こうばつたり出合つてしまつては、無視するわけにもいかない。私はぎこちなく頭を下げるだけだつた。

兄は動かなかつた。私なんかに挨拶をする義理などないと叫うのだろうか。だが目だけはしっかりと私を見ていた。その目つきの異様さに、私はもつと速く気がつくべきだつた。

私は、白のブラウスを着ていた。そしてそれは雨に濡れ、肌にぴつたりと張り付いて私の下着をはつきりと浮かび上がらせていたに違ひない。兄の視線は、間違ひなく、それを捕らえていた。

その時、兄が嗤つた。

私はすぐに風呂場へ駆け込み、中から鍵をかけた。「視姦」という言葉があるが、まさにあの時の兄が取つた行為がそうだつた。しかもその卑しい態度を隠そつともしなかつた。逆に見せ付けるかのごとくだつた。あの嗤いがすべてをあらわしている。私は強い恐怖と深い憤りを感じていた。

狂つたように湯を浴び続けた。しかし先ほどの不快感は、熱いシャワーできれいに流がせるようなものではなかつた。それに浴室のドアをすり抜けて、後ろからあの目が私の裸をじつと眺めているようと思えて、気が気ではなかつた。

私は少し冷静になつてから、あることに気がついた。最初に風呂場などに向かわずに、自分の部屋へ逃げ込めばよかつたということに。洋服や下着の替えは、部屋の洋服ダンスの中にはいつている。私は今度はバスタオル一枚の姿で、あの兄の前を通らなければいけないのでだ。

脱衣場から耳を澄ませば、家の中は驚くほど静まり返つてゐる。母親もどこかへ出かけてしまつてゐるようだ。雨音だけが遠くから

聞こえていた。近くに兄のいる気配も感じられない。

私はこの時も、母親が戻ってくるのを待つべきだったかも知れない。だがまだ心のどこかで、この状況を甘く見ていた。裸を見られたわけではない。兄だってそんなに長居をするはずはない。少しだけ怖い思いをするだけだ。それに自分と血がつながった妹に、これ以上酷い目にあわせるはずはないとも考えていた。まだまだ兄のことを信じていたのだ。

私はおそるおそる脱衣場の扉を開いた。開けた先には誰もいなかった。そおっとそこから出て、居間の方も覗いてみたが、人がいる気配はない。いつのまにか家中は真っ暗になっていた。もう兄は下宿へ帰ってしまったかも知れない。

私は一階の自分の部屋へ向かって走り出した。部屋に入ってしまえば、乾いた服を着てしまえば、この不安から開放される。暗闇の中、おそるおそる階段を駆け上がり、目指す部屋のドアを開いて明かりをつけたその瞬間　私は、見た。

兄が、私のベッドに、座っていた。

やがて私を見上げたその顔は、先ほどの死んだ目と、卑しい嗤いで固まっていた。

兄は立ち上がった。そしてゆっくりとした手つきで、自分のシャツのボタンをはずしていく。ひとつひとつ。目は私を見据えたままだ。私は兄のその目に捉えられ、動くことができない。すべてのボタンをはずし終えると、無造作にシャツを剥ぎ取った。兄の異様にやせ細った上半身があらわになる。それから次にベルトとズボンのボタンをはずし、ジップパーをおろした。ズボンは蹴り上げるかのように乱雑に脱ぎ捨てられた。兄の体に実につけられているものは、グレーのブリーフのみとなつた。中央の大きなふくらみ。兄はゆっくりと右手をそこへのばして……。

私はその時になつてはじめて、相手が何をしようとしているかが理解できた。というより、そうあってはほしくないと願っていたことが、目前で行われていたのだ。たとえどんな人間であろうと、実

の妹に対してそんな……。そんなことを……。

頭よりも先に体が反応をした。ニゲナケレバナラナイ。すぐさま私は踵を返して、駆け出そうとした。だがそれよりも早く、ついさつきまで私の兄だと思っていた男の手が、私の髪をつかんだ。恐ろしい力で引っ張られ、私はベッドに倒された。

一匹の獣が私を襲ってきた。バスタオルがほどけそうになる。私は必死に抵抗しようとしたが、鬼のような力で手首をつかまれて離すことができなかつた。胸がはだけた。そこへよだれをたらした大きな口がかぶさってきた。痛い。硬い歯がたてられて、乳房に激痛が走つた。私は自分の足でなんとか相手の体を剥がそうともがいた。だが相手はその足すらも払いのけると、私の腹の上に馬乗りになつた。その重みに顔をゆがめた瞬間、顔面に平手がとんできた。

何発も何発も私はぶたれた。体をよじつて逃げようとしても駄目だつた。そしてついに私が動けなくなるまで、その手は止まらなかつた。

私は泣いた。なぜこのようにあわなければならないのか。何故このような仕打ちを受けなければならないのか。荒い呼吸が聞こえる。そして私の体を何とも形容し難い、氣味の悪いモノが這い回る感触がした。何をしているかわかりたくなかつた。何も考えたくなかつた。

だが、やがてそれが下腹部に達しようとしたとき、どうにも我慢することができなくなつた。私は思いつきり足に力を入れて相手を蹴り上げた。そしてやつとのことで体を引き離すことができると、裸のまま急いで立ち上がり、出口へ向かつて走り出した。しかしまたも完全に逃げ切ることはできなかつた。後ろから羽交い絞めにあつて、そのままもつれてベッドに倒れこむ。また上から圧しかかられ、私は必死に抵抗を繰り返した。

すると突然、相手の手の動きが止まつた。と同時に、何度も小さな痙攣を繰り返していた。恐る恐る顔を上げ、相手の視線の先をたどっていくと、あのグレーの下着の真ん中に大きなしみができる

た。そしてそれは痙攣の動きとともに、大きくなつていくのであった。

男がはつと顔をあげた。顔を見合す形となる。一瞬にして相手の表情が悪鬼と化した。両の腕で私の髪をつかむと、強引に私の顔を自分の股間に押し付けようとした。不快なにおいと感触で息もできない。苦しくてもがいたが、相手の力が緩むことはなかつた。私は夢中で、思わずその部分を力いつぱい噛み付いてしまつた。

「ぎやっ」

初めて相手は声を出した。そしてやつと私から離れて、股間を押さえながら転げまわつた。私は必死に口や顔をぬぐい、つばを何度も吐いたが、ぬるぬるとした不快感は、決して消えることはなかつた。頭の中を鐘のようなものがめちゃくちゃに鳴り響いていた。早くこの場から逃げ出したい。早くこのいやな光景から目をそらしたい。私はゆりゆりと立ち上がり、二度出口へと歩を進めた。

「……！」

何か怒号のような咆哮のような声が聞こえた気がした。それはあの男から発せられたのかもしれないが、そうでないかもしれない。破れたグローブといふか、つぶれたヒトデのみたいなものが、まつすぐ私に向かつて伸びてきた。私はすんでのところでそれをかわし、やつと部屋の外へ出ることができた。私は後ろ手でドアを閉めた。中から恐ろしいほどの力でドアを叩いたり押したりしてくるので、私も全身で力を込めてそれを抑えなくてはならなかつた。この部屋に何がいるのか、何故それを外に出さぬようにしているのか、それもわからなくなつていた。

それから先はよく覚えていない。すぐそばにいつの間にか誰かが立つていて、今度は甲高いノイズを奏でていた。それは母親であつたような氣もするし、近所の別の誰かであつたような氣もする。その音と同時に後ろから強い衝撃があつて、私は倒れ際に強く頭を打ち、そのまま氣を失つてしまつた。

再び目を覚ましたとき、私は両親の部屋のベッドの上にいた。い

つの間にかパジャマを着せられている。長い間眠っていたようだ。体が自分のものでないかのように重く感じられた。ひどい頭痛もした。そつと手を触れてみると頭には包帯が幾重にも巻かれていた。私はそのまましばらく横になっていたが、だんだんとひどくなる頭の痛みと、のどの渴きに耐えられなくなり、起き上がらうとした。だが、指一本動かそうとするだけで激痛が体を走った。なんとか片方の腕だけを布団から出すことに成功したが、そこにはいくつものみみず腫れと青あざがあつた。これが体全体ではどのようになっているのかと、想像するだけでも気分が悪くなりそうであった。

私は時間をかけてやっと布団から抜け出し、足を引きずりながら這うようにして部屋のドアを開いた。その瞬間、自分の部屋の惨状が目にに入った。私の部屋は、この両親の部屋の隣に位置していたのだった。

部屋のドアは開いたまま斜めに傾き、大きな穴がいくつも開いて裂け目が斜めに走っていた。どす黒い血のしみが点々とついていた。部屋の中をのぞいてみると、さらにめちゃくちゃな状態になっていた。ベットから机から本棚からすべてがなぎ倒され、部屋中にいろいろなものが破壊され投げ捨てられていた。カーテンはぼろぼろに破れており、窓ガラスにはいくつものひびが走っていた。強大な台風が、この部屋の中を通り過ぎて行ったかのようだった。

私はしばらく呆然とその光景を眺めていたが、次第に気持ちが悪くなり、その場を急いで離れようとした。と、そうして振り返ったとき、背後には、いつのまにか私の母親が立っていたのだった。

「……！」

母親の顔は無表情だった。だが、やがて母の心の中の声が、すべて私へと伝わってきた。それは耳をふさぎ、心を閉ざしてもどうすることもできなかつた。

「今まで育ててやつた恩を仇で返すようなまねを」

「世間様にどう顔向ければよいのか」

「この娘があの子をたぶらかしたに違いない」

「いつもこの娘には裏切られてきた」
「ちゃんとした高校にも行かずまともに就職もせずぶらぶらと
外でどんなことをしているかわかつたものじゃない」
「最近は帰つてくるのも遅くなりがちだ」
「悪い男といちゃついて」
「このあばずれが」
「あの子はいい子だつたのに」
「親の言うことも良く聞いて」
「大学になじめなかつたなんて間違いに決まつてゐる」
「この女さえいなければ」
「私の人生もめちゃくちゃだ」
「被害者面してのうのうと」
「さつさと死ねばよかつたのに」
「どうせ心の中では舌をだして」
「私たちをあざ囁つてゐるに違いない」
「満足行く結果になつて良かつたわね」
「かえせ」
「かわいかつたあの子をかえせ」
「これまで築きあげてきたものをかえせ」
「私の幸せをかえせ」
「かえせかえせ今すぐかえせ」
「このメス豚」
「この人間のクズめ」
「私は決してお前を許しはしない」
「ひとおもいに殺してなどやるものか」
「お前のやつたとこへの報いを」
「その体に徹底的に刻み込んでやる」
「これからずっと」
「永遠に」

「永遠に」

「……」

昔読んだSF小説の中に、テレパシー能力を持つ少女の物語があった。少女は普段は意識して、相手の心を読まないよう自分的心にも鍵をかけているのだが、なにかのきっかけでその留め金が外れてしまつたとき、まわりにいる大勢の人の考えていることすべてが、洪水のように頭になだれ込んできてパニックを起こしてしまつ、というシーンが印象的だった。その時の私は、その物語の少女と同じだった。ただひとつ違うことは、その思考はただ一人の人間、しかも母と呼んでいた女性から発せられた怨念であつたと言うことだ。時間にしてみれば、ほんのわずかの出来事であつたかも知れない。しかしそれはまるで何百何千もの人から憎悪の念を浴びせられたかのようだった。

そしてその時、

母も、囁つた。

口元には確かに笑みが浮かんでいた。しかし目は真っ直ぐに射抜くように私を見つめ、その奥にはかすかに、それでいてめらめらと怒りの炎をたえぎらせていた。その表情は表面上は能の面を連想させたが、その内は悪鬼のごとくであつた。やがて私はその場に膝から崩れ落ちてしまった。

「……大丈夫？」

そつと女が私に近づいてきた。肩にその手が触れた。
「まだ歩き回れる状態じゃないわ……」

優しい言葉づかいとは裏腹に、その手には恐ろしいほどの力が込められていた。つめが深く私の肉に食い込んでいく。

「あんなことがあつたんですね。当然よね。せ、ベッドに戻りましょう。元気になるまではずっと側についていてあげる。これからずっと……」

「ずっとずっとずっと……」

私は促されるままにベッドに向かうしかなかつた。

……なんとかその手を逃れることができたのは、奇跡としか言いようがない。私にとつて幸運だったのは、騒ぎがひと段落つくまでに時間がかかったことだつた。女はおそらく警察などに呼ばれる機会もあり、一日中私を監視し続けることは不可能であつた。父を名乗る人物は、あの日以来、自宅で姿を見せなくなつていた。家には私との女しか居らず、私が逃げるチャンスはまだまだ残つていたのである。私はじつくりと怪我を癒して力を蓄え、ある日とうとう逃げ出すことに成功した。私はその足で、彼のアパートへ転がり込んだ。その時彼はすでに就職をしていて、都内に居をかまえていたし、彼の存在についても、あの女に話してこなかつたことが幸いした。彼も私を受け入れてくれた。こうして私は平穏で安息な地を、改めて得ることができたのである。

それから長い月日が流れた。確かにこのところの私たちの関係には、薄ら寒い木枯らしのような虚しさがあつたかもしない。だがそれは私たちに課せられた試練なのだと考へることにした。お互い世人君子などではないのだ。それぞれ嫌な面、至らない面があつて当然なのだから。

そうだ。彼は何一つ変わつてなどいない。それは昨夜あつた電話が証明しているではないか。

「俺……あいつの側についていてやりたいんだよ」

彼からの電話がかかってきたのは、深夜遅くになつてからだつた。その声は暗く沈んでいた。島崎さんが運ばれた病院の外からかけているのだと想つ。

「別に何ができるつていうわけじゃないんだよな。もうあいつは死んでしまつたんだし。もう何もかも手遅れなんだつていうことはわかつているんだ。わかっているんだけど……でも……それでも側にいてやりたいんだ。あいつとは小学校からの長い付き合いだつたらな……」

長年の友人を失つた彼の気持ちを考えると胸が痛い。それにもち

ろん、島崎さんの遺族の方々も、どんなに悲しんでいたんだが。

「司法解剖とかなんやらで、しばらく」の病院に安置されるみたいなんだ。俺もちょうど週末で休みだから、その間だけでも、一緒に……」

「…………そり」

私は彼になんと黙つてあげたら良いかわからなかつた。

「ちくしょう、何処のどいつがあいつをあんな目に……許せねえよ、まったく」

私はそれが誰だか知つてゐる。何故島崎さんが死ななければならぬかも、ある程度の検討はついている。そして次は彼の番であることもわかっているのだ。この時なら彼も、ひょっとしたら、私の話を信じてくれるかもしだれない。あるいは彼なら、良い智慧を出してくれるかもしない。

だけどやつぱり、彼には言い出すことはできなかつた。いや話してはいけないと思つた。これは私自身の手で解決しなければならないことだ。これまで幾度となく、彼に助けられてきたではないか。その恩を返すときなのだ。

「…………じゃあ、そろそろ切るから。遅くにわるかつたな。明日は早くにバイトなんだろ?」

「ううん。明日は休みだから……」

「あれ。今日がバイトの無い日だつたんじやなかつたつけ」「え、あ、うん。休んだことは変わりないんだけど、今日はちょっと風邪気味だつたから……」

実は島崎さんと会い、島崎さんが殺された現場のすぐ近くにいたのなどとは、とてもじやないが言えなかつた。

「あ、ああ、そうなのか。大丈夫なのか

「うん、もうだいぶよくなつたから」

「そりか……。あんまり無理すんなよ」

「…………うん。ありがとう……」

彼からこんな優しい言葉を聞いたのは久しぶりだ。付き合い始めた頃の、あのビデオ屋で一緒に働いていた頃の、彼の言葉であった。やっぱり彼は変わってなどいない。そしてそれは、私への十分すぎるほどの励ましとなつた。

哲ちゃん、今度は私があなたを救つてあげるからね
車内アナウンスが、いよいよ次が私の目的の駅であることを告げた。私は小さく気合を入れて立ち上がつた。ドアの前に立つ。ゆつくりとその駅に列車が入り、止まつた。
ドアが開いた。私はポンと飛び降りて、ホームですぐにバックから携帯を取り出した。

その十一

駅から十五分ぐらいの閑静な住宅街の中に、その家はあった。平凡な何処にでもあるような一階家で、私は迷うことなくそこへたどり着くことができた。表札の「向井」の文字を確認しながらインターホンのボタンを押す。

「……はい」

中から中年の女性らしき声が聞こえた。いよいよ母親と会うことになるのだ。

「先程、お電話いたしました伊藤というものですか……」

「……少々お待ち下さい」

私はもう一度大きく深呼吸した。しばらくした後、玄関のドアが開いて、小柄でやせた女性が姿を見せた。くすんだいろのセーターに藍色のスカート。それこそ何処の町にでもいるような「おばさん」であった。特に化粧をしている様子も見られない。

いきさか拍子抜けしそうな感じであったが、私は身を引き締めた。この女性があの黒服に、連續殺人を依頼した人物であるかもしれない。自分の息子の復讐を行おうとしているかもしれないのだ。「わざわざ遠いところをこじめんなさいね。寒かつたでしょう。早く中へどうぞ」

傘をさし、急いで急いで表の門のところまで歩いてきた。そして門を開けると、私の濡れた肩にそっと手をやつた。私は軽く頷いて、促されるままに家中へ足を踏みいれた。

入った正面には階段があり、下駄箱の上には大きな花が飾つてあった。階段脇の廊下を進むと、左手に八畳ほどの和室があった。中央に大きな仏壇が飾つてある。

「ゆっくりしていいって下さいね。今、お茶を入れますから」

「あ、いえ、お構いなく」

私を座らせるやいなや、すぐに台所へと消えた。かちやかちやと

カップか何かを用意する音がする。大きな石油ストーブがあかあかと火をともしていた。私が着くずっと前から、暖めておいてくれたらしい。見れば床の間にも、大きな花を生けた花瓶が飾つてある。生け花が趣味の方なのだろうか。

確かに鬼のような人物を想像していたわけではないが、しかし昨日の島崎さんの話から、会うだけでも相当手こする事態になるのではと考えてはいた。

私は先の電話で、自分のことを中学時代の同級生だと名乗った（「伊藤」と言うのも思いつきで話した変名に過ぎない）。卒業前に引っ越してしまい、最近こちらへ戻ってきたので、死んだこともしらなかつたのだということにした。そしてぜひともご焼香させていただきたいのだが、といった風にお願いをしてみた。断られることも覚悟の上だつたし、それでも何度でも頼み込もうと気合だけは十分だつたのだが、相手はあっさりと来訪を承諾して、いきなり自宅に訪れた女をこづしてもなしている。

「……昭一郎も、昔のお友達が見えると知れば、きっと喜ぶと思いますから」

電話口でこんなことまで言つたのだ。

私はまた、見た目の問題から、相手に別な懸念を抱かせるのでは（実際は私は向井青年よりも年下であるため）とも思つたが、こちらも杞憂に終わりそうだった（グレーのスーツが効果的だったかもしれない）。

まあいい。とにかく第一段階はクリアしたのだ。それでもやっぱりどこか落ち着かなくてそわそわしていると、おぼんにカップとお茶菓子をのせた母親が戻ってきた。

「何もないですけれど」

「いえ、そんな……」

なんだか恐縮してしまう。

「あの……まず、お線香をあげさせて下さい」

「まあ、そうでしたわね」

テーブルをぐるりとまわって仏壇の扉を開いた。真ん中に向井青年の遺影が飾つてある。その写真は、昨日から私が何度も目にしているものであった。上目遣いの悲しげな表情。あの卒業アルバムからとつたのだろう。ただ、首から下は学生服ではなく、ワイシャツにネクタイをしていた。服を後から合成したものらしい。

「あなたが会っていた頃の面影があるかしら」

いつのまにか私のすぐ側に寄つてきていた母親がつぶやいた。

「本当はこの写真は使いたくなかったんだけれど……。なかなか他にいいのがなくて。これでもまだ元気だった方なんですよ。高校を卒業してからのあの子は見る見るやつれていって……。仕事が忙しいからだつてあの子は言つていたけれど、病院に入院した頃にはもう……」

おしまいの方は声を詰まらせていた。私は遺影に線香を手向け、静かに手を合わせた。安らかに眠つっていてほしい。そして彼や島崎さんたちが、あなたに対し行つたかもしれない罪を許してほしい。私は代わりに心からわびた。そしてもしこの母親が過ちを犯していふのならば、止めてくれるよう願つた。

「昭一郎、あなたの中学時代のお友達が、わざわざ来てくださったのよ。……中にはこんなに立派な方もいらしたのね……」

中には、か。私は実は面識があつたわけではないし、決して立派な人間でもないのだ。でも、この母親の前ではそれを演じ続けなければならない。

「入院していたとおっしゃいましたけど、どこがお悪かつたんですか」

「ええ、まあ……」

さすがに表情が曇る。やや单刀直入すぎたか。思い出すのはつらいかもしれないが、それを話してもらわなければならぬのだ。

「昔の向井君は、確かに活発とは言えませんでしたけれど、だからといって、ひ弱とか、病弱であったとか、そんな感じではありませんでしたから……」

「ええ、昔のあの子はそうでした。ずっと皆勤賞をもらっていましたからね。……でも高校を出てから半年位した後で、急に倒れてしまつたんです」

そう言つて遺影を見上げ、ふっとため息をついた。

「母一人子一人でしたからね。幼い頃から私が苦労してきたことを見てるせいか、一時は高校には進学しないで働くとまで言つてくれたんですよ。早く私を楽させてやりたいんだって。それでも高校ぐらいは出させてやりたかった。だから無理にでも行かせてあげたんです。それが……」

それが仇になつたということなのか。その高校で、何かが起つたというのだろうか。

それについても母子家庭であつたとは知らなかつた。仏壇に父親らしき男性の遺影が飾つていないところを見ると、幼少時に別離したのかもしれない。すると彼女はこの家に一人で住んでいるのだろうか。自分の息子の復讐が遂げられるのを、今か今かと待ちわびながら。

しかし田の前の女性を見ると、何度も言つようだが、とてもそんな恐ろしいことを考へてゐる人物には見えない。まだまだすべて憶測に過ぎないので、私は早く確証を得たい気持ちを抑えた。

「良かつたら……聞かせてもらえませんか。私に何か……もう遅いかもしれませんけど……話していただければ、何かその、力になれることがある……」

「ありがとうございます。その気持ちだけで十分です」

母親はハンカチを取り出して、そつと目じりを押さえた。二人の間に沈黙が訪れた。線香の淡い香りだけが、部屋の中を流れしていく。

「高校で何があつたんですか」

相手が硬直してしまつたのがわかる。またやつてしまつた。私は母親の顔がまともに見れなくなつて、うつむいてしまつた。まつたく自分は何様のつもりなのだろう。上からストレートに問いただせば、何もかも話してくれると思つてゐるのか。これも愛する彼のた

めなのか？ なんとおごり高ぶつた女なのだろう。

しばらくまた沈黙があった。私の勇み足が、まずい方向に進んでしまっていた。どうもこれ以上話を聞くのも無理そうだ。直接、一番怪しい人間に真相を問いただすというのは浅はかだったのだ。私はこれまでの非礼をわびて、辞去しようとしたその時、

「先日、あの子の命日だったんですよ、

と、母親がポツリと呟いた。

顔を上げると、母親は背筋をピンと伸ばし、まっすぐに遺影を見詰めていた。その顔は毅然としていて、先ほどまでの表情とはうつてかわって、まるで別人のようだつた。

「優しい子でした。誰に対しても、特に私に対する気の使いようといつたら、それこそもつたいたないぐらいでした。就職先も、地元のあまり家から離れていないところを選んでくれて、判で押したかのように、毎朝同じ時間に出て、夜同じ时刻に帰つてきました。まだ遊びたい盛りであつたでしょうし、そんなに無理して私に付き合つことはないのだと、何度も言つた覚えがあります。そんなときはいつも大丈夫だと、笑つて答えてくれました。でも、実際はそうではなかつたんです。あの子の体は、だんだんと自分のいうことすらもきかなくなつていたのです」

その喋りはどこなくテレビのドキュメンタリーのナレーションを思い出させた。なるべく感情をはさまないよう、声のトーンを抑えていよいよ聞こえた。

「勤めていた会社では、経理に配属されていたようです。一日中電卓とらめっこだなんて言つっていました。ある日、最近右手が震えることがあつて、その電卓のボタンが押し辛くなつたということを、ポツリとこぼしたことがあつたんです。お酒を飲んだわけでもないのに変だよね、と冗談ぽく話していましたが、事態はもつと深刻でした。やがて手の震えがひどくなつて、その腕全体がまともに動かなくなつてしまつたんです」

「腕が、ですか……？」

「腕だけじゃありません。おしまいには体の右半分が、ほとんど麻痺してしまったようになりました。歩くことはもちろん、話すことすらままならなくなつて……」

「病院で検査してもらつたんですね。何が原因だったのですか？」
おのずと私の言葉も低くなる。それでいて先を促す自分がたまらなく嫌だった。

「頭です。脳の一部に障害が……」

「障害……」

「人の脳みそつて、大きなおわんに浮かべたお豆腐みたいなものだつて、お医者さんはおっしゃつていました。だから頭に強い衝撃を受けたりすると、まわり大丈夫でも、中身が……脳が思わぬ損傷を受けたりすることがあるんですつて。今度の場合は、その脳の損傷が少しづつ、広がつていつて……。もつと早くに、検査を受けて治療していれば、こんなにひどくはならなかつただろうつて」

「頭に……そんな強い衝撃を受けたことが、過去のあつたんですか」「はつきりとはいえませんけど、私はあの子が高校生のときに受けたあの傷が……原因だと思つています」

高校時代……。私の背中に冷たいものが走つた。

「高校も三年になつた時でした。あの子が頭に包帯を巻いて早退して帰つて来たんです。本人はよそ見をしていて、電柱にぶつかつたんだといつていましたけど、後から保健の先生から連絡がありました。昭一郎は学校でひどいいじめを受けていたんです」

恐れていた言葉が私の耳に入った。そしてその言葉は私の頭の中で、大きく反響し始めていた。

「誰が、という風に特定できたわけではありません。ただ同じクラスの不特定多数のグループが、たびたびあの子にちょつかいを出しているところを、目撃した先生もいたんだそうです。そしてその日も階段の下で倒れているあの子のある先生が見つけたとき、何人の生徒が逃げるよう走つていく足音を聞いたそうなんです。だから生徒の誰かがいたずら半分に足を引っ掛けるなどして、あの子を

上から突き落としたんじゃないかなって……」

だがそれは、まだあくまで仮定でしかない。いくつかの些細な出来事や見聞が重なって生まれた、憶測に過ぎないのかもしれない。だがもちろんそれが間違っているとも言い切れない。何しろ結果的に、人一人の命が奪われる結果となっているのだから。

しかし、昨日の島崎さんは、いわゆる「肉体的」ないじめは、「なかつた」ように言つていなかつたか。「ちょっかいを出」したりはせずに、「無視」することで、間接的ないじめ行為を行つていたのではなかつたか。それともそれは、島崎さんの口から出た、その場しのぎの「でまかせ」だったのだろうか。

「向井君は……何か言つていましたか」

「いいえ。何度も問いただしましたけど、階段から落ちたことは認めましたが、誰かに突き落とされたとか誰かに足を引っ掛けられたとか、そういうことは決して口にはしませんでした」

なぜ相手の名を口にしなかつたのだろう。

「その時は保健の先生からも、すぐに病院で検査を受けた方がいいといわれていたんです。でもそれもあるの子は嫌がって……。見た目は傷も大したことなさそうでしたから、私も結局折れてしましました。無理にでも連れて行つておけば、と今でも悔やんでいます」

そう言うとひざの上に置いた手をぎゅっときつく握り締めた。

怖かつたのかもしれない。ふつとそんな考えが私には浮かんだ。そのいじめグループが、ではなく、ことが次第に大きくなってしまったことが。もし病院で脳にも重大な損傷が見受けられた場合（それは事実そうであつたのだが）、それは単なるじやれあい程度のいじめのレベルではなく、大きな傷害事件へと発展してしまうことになるかもしれない。学校内だけでなく、世間にも大きな波紋が広がるだろう。そして自分はその当事者として、その渦に巻き込まれていくのである。それに耐えられるだろうか。不安になるに違いない。

確かにそういう不当な行為は告発されるべきであるのかもしれない。でもそれはあくまで单なる「正論」に過ぎないのでないが、

とも思う。精神的に弱いのだと言つてしまえばそれまでなのかもしれない。しかし自分一人が耐えることによつてすべてがが丸く収まるのなら……。そう思うことすらも「逃げ」なのだろうか。

私が先日のバイト先で、女性客から受けたクレーム。そんな風に考える私のような人間が、あの時のとつた行動も、単なる「逃げ」でしかなかつたのだろうか。

「結局、その一件はうやむやのままに終わつてしましました。何度も学校に詰め寄つたりもしたのですけれど……」

また目尻に涙が光つていた。母親はそれをハンカチでぬぐつた

「じめんなさい。こんな話をしても……」

「いえ……」

いつもの私なら、それ以上のことは聞くことはできなかつたらうが、このときは違つた。

「その……向井君をいじめていた人たち……その場から逃げて行った人たちというのは、誰だかわかつたのですか」

「四人の男子生徒が中心になつて、いじめを行つていたらしいとうところまではわかりました。でもその子たちがあの日、階段の上にいたという証拠は見つかりませんでした。学校側も犯人探しには、非協力的でしたから」

男子生徒が四人。それがこの度亡くなつた島崎さんたち三人と、彼を加えたメンバーなのだろうか。本当に「いじめ」は存在していたのか。

この母親の証言が、やはり「眞実」なのだろうか。

「……憎いですか」

私は問うていた。

「えつ」

「その子たちが憎いですか。……殺してやりたいほどに」

「……」

私の問いは、唐突で珍奇なものに聞こえたかもしれない。しかし、それはあくまでこの母親が、今度の殺人の依頼とは無関係であつた

ならば、である。

「……あなたなら、いかがですか」

「……」

はからずも、今度は私が問い合わせられる立場となつた。

もし、あなたが私の立場であつたなら、どう思つたかしら」

「私は……」

相手は背筋をただしたまま、こちらをみすえていた。見えない威

圧感が、私を捉えて離そとはしなかつた。

「……憎いと思うかもしれません」

「……ええ」

「殺してやりたりたいと思う」ともあるかもしません。でもそれは思うだけで……。結局、何もできないのではないでしょつか」

「そうかしら……」

「ええ……何より本当にその四人のせいなのか、確証もないわけですし……」

私はずっと抱いていた疑惑も口にした。ところが、「それでは、もし、確証があつたら?」

新たなる問いは、思いもよらぬものであつた。

「……どうじうことですか」

「もしもその四人の生徒が、昭一郎を階段の上から突き落としたのだという確証が得られたら、どうかしら」

「でも、実際は得られなかつたわけですし……」

「あの時は確かにそうでした」

「あの時……?」

「……どうじこと、こと、でしょか……?」

「……」

返答はなかつた。でもそれが、明確な答えだつた。

「……殺さない、いえ、殺せないと私は思います」

「……何故?」

軽く首をかしげながら訊ねてきた。これが先ほどまで、涙に暮れ

てばかりだつた弱弱しかつた女性だろうか。

「何故つて、それは……単なる逆うらみにすぎないから、だからです」

「いいえ。あの子たちがいわば昭一郎を殺したも同然なのですよ。それならば」

「それでも……死ぬことが、いえ、殺してしまつことが、それに値する罰なのでしょうか」

「……！」

言葉の代わりにその目が大きく見開かれた。何を馬鹿な、とでも言つよう。に

「偶然、あるいは結果としてそうなつてしまつたかもしれません。それに確かに法的には、何の咎めもなかつたのでしょうか、精神的にはつらい目に、負い目を感じて生きているかもしれません。苦しんでいるかもしれないのです。別な形で罰を受けているかもしれません。それはそれで、十分なのではないでしょうか。それにその四人にだつて、家族や友人や愛する人がいるはずです。その人たちを同じように悲しませるわけには行かないと思います」

昨日の島崎さんとの態度。向井青年の写真を前に発せられた言葉。私はそれを思い出していた。

「同じ悲しみ？ そんなことはないわ。それはまったく違つものでしょう」

「そんなことはありません。その人を、心から愛していれば。そんな人が必ずいるはずです。そんな人たちも、その苦しみに巻き込むことはないと思います」

だから私が、ここに来ているのだ。

「じゃああなたは、私だけが、私一人が悲しめば、苦しめばよいとおっしゃりたいの？」

「そうじゃありません。ただ……」

「あなたが言つてのこととは、ただの理想です」

「……」

今度は私が黙り込む番だつた。

「今も負い目を感じて苦しんでいる? 「冗談じゃない、あいつらはね、もう昭一郎のことなんて忘れてますよ。手荒くいじめていたことも、それこそこんな奴同じクラスにいたのかなんてね。まわりのクラスメイトもみんな一緒に、うのうと楽しくやっていやがるのよ! 」

母親は矢継ぎ早にそつまくしたてた。言い終わると大きく肩で息をつく。

「……あなたには所詮、大事な人を失った本当の悲しみなんてわからぬのですよ」

「そんなことはありません! 」

私は叫んでいた。

「だから……だからそれを守れるなら、守ることができたら、守りたいんです。あの人の、今のこの危機を救つてあげたいんです。愛しているから、本当に大切に思つていいから、彼を……」

「やつと本当の目的を話してくれましたね」

はつとなつた。まさかこの人は、最初から私が何者であるか知つていたのか。私の下手な演技は、とうに見透かされていたのだ。重苦しい空気が漂つっていた。私は母親を見つめたまま固まつていた。そして相手も同じく、私を見ていた。

「……不憫な子だつたと思います」

やがてそんな言葉をふつと漏らされた。

「親ばかだと思われるかもしれませんけど、あの子は人の気持ちを一番に思いやる、優しい子でした。その優しさが、かえつて仇になつてしまつたのでしょう。小学校の頃から、何度も理不尽ないじめにあつてきたようです。それは中学・高校と行つても替わりありませんでした。時にはクラス全員から、つまはじきにされるような目にあつたのだと聞きました。相手にとつては、たとえあの子が死んだからといって、心からお悔やみなど言つ人はいないものと思つていました。特にあなたのような立派なお嬢さんが……」

それは買いかぶりすぎだと思つ。私はすぐに否定した。

「そんなことはありません。中には過去の、自分の罪を悔いでいる人もいるはずです。そんな人が存在するとは、考えなかつたのですか」

事実、向井青年の葬式に訪れた者がいたのではないのか。それを追い返したのは誰なのか。

「まさか。何度も言いますけど、もう昭一郎のことなんて、すっかり忘れてしまつていてるに決まっています。あの子をどんなに傷つけたのかも」

「そんなことは……ないと思います」

そうだ、きっと彼なら向井青年のことは覚えていてくれているに違いない。私に漏らさなかつただけで、私に見せなかつただけで、きっと学生時代の不祥事を、心の奥底で悔いているに違いない。きっと、きっと……。

「皆が皆、いじめに加わったわけではないでしょ?」

「変にかかることを恐れていただけです。下手をすれば自分がいじめを受けることになるわけですからね。見殺しにしていたんですね」「違います。それは絶対に違うと思います」

私は大きくかぶりを振つた。

「たつた一人かもしません。いえ、たつた一人でいいんです。同じクラスでなくても、それどころか同じ学校でなくても、年上でも年下でもなんだつていいんです。誰かいたばずです。向井君のことを理解してくれて、思つてくれた人が」

「それは、私以外にありえなかつたと思います。世間の人たちは皆、あの子に、いえ私たち親子にいつも冷たい仕打ちをし続けてきました。その結果、あの子はあの若さで……」

それは……違う。例えば、私がそうだ。私がここに来た目的は、彼のためだけでなく、この向井と言う青年のことをもつと知りたいと思ったからなのだ。そんな人間が、何処か他にもいたはずなのだ。きっと、きっと……。

「だから世の中に復讐しようというわけですか、こんな仕打ちで。向井君あなたに対して行われたことを、思い出すせよ」としたんですか」

母親は口をつぐんだ。なんて悲しい人だらう。他のやり方で自分の過去を清算することができなかつたのだろうか。

「……その理由がどうであれ、こんなことをして、向井君が喜ぶと思こますか」

「あの子が何をしたつて言つたですか！ 何故、あの子が死ななくはならなかつたのですか！」

「……何もしなかつたからだと思こます」

私の声は自分でもゾッとするほど低かつた。

「……何があつしゃりたいんですね」

「いえ……あの……」

「あの子が死んだのは、自業自得だつたとでもあつしゃりたいの」

「そうじやあありません……そんなことじや……ただ……」

「ただ、何ですか」

私は必死になつて言葉を捗していた

「ただ……その状況を受け入れたのは、向井君自身なのです。すべて……自分の問題なのです。死ぬも生きるも……向井君が責任を負つて行動した結果なのです。だから……あなたが……介入すべきことではないと思うんです」

「……」

しかしそれは、私にも、私自身にも言えることではないのか。

「あなたがやつてていることは、向井君のためでも何でもありません。あなたのエゴでしていることです。そして、そのことは……それは愚かな行為だとも思います……」

自分のことを棚に上げて、よくもそこまで言えるものだ。しかし、この女性には、そこまで言わなければならなかつたのだ。

母親は答えなかつた。目を閉じて、平静さを装つてゐるが、拳は先ほどよりも硬く強く握り締められていた。別の怒りが、その中で

燃えたきつているのかもしけなかつた。それを表に出やうとしないのは、プライドゆえのかもしけなかつた。

「……ご立派ね」

「えつ？」

「あなたのおつしゃつていることは、嫌になるへうこ正しこじだと言つてゐるのです」

「そう言つて、私をキツとにらみつけた。

「でも、それだけでは生きてはいけません」

「それこそ抑揚のない喋り方だつた。

「……わかつてこます」

それは十分過ぎるほどだつた。

「わかつちゃいなわよ！」

いきなり相手は私を怒鳴りつけた。

「あなたには何一つわかつてなどいないわ。生きるつていうことがどういうことか。人を愛するつてことがどういうことか」

そう一氣にまくし立てた。そこには一人息子をなくした悲しい母親の姿はなかつた。一人の、ただの、女だつた。

「あなたはの言葉は、私に死ねと言つてゐるようなものです」

「……」

私は答えられなかつた。

「何と言われようと、私はあの子の為だと思つことをやるだけです。それがたとえどんなに間違つたことでも。鬼にでも何でもなるつもりです」

相手の為だと思えるからこそ、何でもできるのだひへ。

私も、彼の為だと思えるからこそ……。

「もう、お引取り願えますか」

そう言つて私に背を向けた。

「帰つて下さい！」

私は無言で頭を下げて立ち上がつた。きつと私の前では、声を上げて泣くことができないに違ひない。それが、この母親に残された

最後の意地であるよ^うな気がした。私はそのまま家を辞した。

冷たい雨はまだ降り続い^ていた。外に出た私は、一歩ほど歩きかけた後に振り返り、中^にいるあの母親のことを考えた。私に生きることや愛することが何なのか、それがわからないと言つた、あの言葉。そつじやない。いや、そつじやないと思^ひいたかつた。愛する人のことを想^うこの気持ちに、優劣などないのだと思^ひいたい。私だつて鬼になりたい。何としても、彼を守りたい。

だが結果として、状況はまたも何一つ変わりなどしなかつた。そればかりか、もつと悪くさせてしまつたかもしない。でも、私にあれ以上何ができるだらう。あの場で他に何が言えたというのだらう。

私はとぼとぼと歩き出^した。歩きながらも、そのことばかり考えていた。

やがて、通りの向こうに一人の男が立つてゐることに気がついた。黒いこつもり傘をさして。こちらを見ていた。

黒いコートに黒のスース。帽子も靴もネクタイも黒づくめの。あの男が立つていた。

私との約束を守るために。

私たち一人は、並んで通りを歩いていた。ずっと無言だった。私の赤い傘と男の黒い傘とが、降りしきる雨の中、川を漂つ葉っぱのようになっていく。

「あの……」

私の方から、小さく声をかけた。雨音に隠れてしまつぽどの小さな声であつたが、男は立ち止まって私を見た。

「はい」

私も足を止めて男を見上げた。しばらくずつと、男の顔を見ていた。男も特に続きを促すわけでもなく、そのまま黙つたまままで私を見ていた。何処からか、子供のはしゃぐ声が聞こえてきた。

結局、私は話すことができずに、また歩き始めた。男も一緒だった。

角を曲がると、正面に児童公園が見えてきた。中を覗くと、小さな子供が一人、それぞれに色違ひの雨合羽と長靴をつけて、小さな傘を振り回しながら、この雨の中を走り回っていた。水溜りを見つけては、互いに両足から飛び込んだりしている。

私はその公園へと入つていった。男も後からついてきた。するとその子供たちは、叱られるとでも思つたのか、せつかくの楽しみを邪魔されるとでも思つたのか、すぐに走つて出て行つてしまつた。

そこは何処にでもあるような小さな公園だつた。この間のところよりは、やや広く感じられるのは、頭上に高速道路のように遮るものがなせいか。中央には馬を形どつた大きな遊戯具がそびえ立つていた。滑り台や鉄棒などと一体になつてゐる。私は歩をゆるめずに、まつすぐそこへ近づいていった。

遠目にはあまり汚れていないようにも見えたが、近くで見ると、ペンキの剥れた箇所や傷ついているところがいくつも田についた。大勢の子供たちがさまざま遊びをした結果なのだとと思うと、痛々

しぐもあり微笑ましくもあつた。さつきの子供たちも、天氣がよければここに上つて、いろいろな遊びをしていたに違いない。大きくなつてから、ここで遊んだことを思い出したりすることもあるのだろうか。

「公園にも、いろいろな種類があると思いませんか」

男が後ろから声をかけてきた。考えてみればこの数日間、私たちは共に異なるタイプの公園めぐりをしているのだ。

「そうですね」

私は遊戯具のまわりを歩きながら答えた。

「昔を、幼い頃を思い出していらっしゃるんじゃないですか」

「……ええ」

私は同意したが、今回は正確には少し違つていた。

「でも私にはこんな公園で遊んだっていう記憶は、実はあまりないんです」

私が思つていたのは、楽しい思い出などではなかつた。必死になつて考えていたのは、自分が幼い頃に戻れたら、晴れた日にこんな公園でどんな遊びをするだらう、ということだつた。あの子供たちはいつも、どんな遊びをしているのだらう。「いろいろ」遊びといつても、具体的に何をするのか、何をどうするのかというのことはわからぬままだつた。

「小さい頃から、塾とか習い事に無理やり行かされていましたから」
本当の幼い頃の私は、こんな公園で遊んでいる子供たちを、はたから見つめるだけだつた。それは小学や中学になつてもかわらなかつた。

「私も似たようなものでしたよ」

意外な言葉に私は立ち止まって、男の方を振り向いた。

「小さい頃はとても体が弱かつたんです。いつも病気ばかりで、ベッドに横になる生活が多かつた。病院や家の窓から、こんな公園で遊ぶ子供たちを見ているのは、とても辛かつたですよ」

「そなんですか？」

「今では想像もつかないかもしません」

そう言つて、男は笑つた。

「だから逆に、強さに憧れがありました。自分の体の弱さがたまらなく嫌でした。必死になつて体を鍛えましたよ。おかげで病氣ひとつしなくなりました」

自分の過去と照らし合わせながら、男の過去を想像してみた。広くて大きな家の、二階のはずれにある子供部屋。その窓側に備え付けられたベッドの上に横たわる、小さくやつれた一人の少年。その瞳は大きく見開かれ、食い入るように外の風景を眺めている。だが現在の目の前に立つていてる男の姿とは、どうしても結びつかなかつた。

「あの……お聞きしてもいいですか」

「どうぞ」

「私も必死になつて鍛えたら、今からでもあなたみたいになれるでしょうか」

車内の吊り広告が思い出される。私のばかげた質問に、男は真面目に答えてくれた。

「かもしれません……たぶん。でも……」

「でも、なんですか」

「『健全な精神は健全な肉体に宿る』ということは、あれは嘘ですよ。体を鍛えるのなら、何よりも心を鍛えないと。……私みたいになつてしまします」

「そんな。あなたは……」

立派な人だ、と言いかけて止まつてしまつた。どうも私は、この男が殺し屋だということを忘れがちだ。

男はそんな風に言いよどんでしまつた私を見て、また笑つて先を続けた。

「結局、私の心はベットから外を眺めていた幼い頃から成長していない気がします。自分の身に着けた強さをもてあまして、そらがどちらほどのものか証明したくてたまらなくなつたんです。武道もいく

つか、かじりましたからね」

ただ見ていたわけではないのだ。変わらう、変わりたいと、ただいつも漠然と思っていただけの、私とは違うのだ。

「そして……人を……？」

「ちつとも強くなんかなつていなかつたんです。今もそうですね……」

「でも今なら……今からでも、やり直す」ともできるんじゃないですか」

そこまで変わる事ができたのなら、もう一度変わる事もできるのではないか。それがわかっているのなら、もうこれ以上、罪を重ねる必要もないのではないか。これ以上、人を殺さなくとも良いのではないか。……彼を殺すことも止めることができるのではないか。しかし男は、そんな私の浅はかな思惑など、やはりお見通しのようだつた。無言で、ただ首を振るだけであつた。

「……また失礼なことを聞いてしまうかもしだせんが……」

私はならばと、別な問いかけを行つた。

「はい」

「今まで……何人の人を殺したのですか」

これは失言ではない。私は必死に虚勢を張つて、男を睨みつけながら訊ねた。男はそんな視線をすうつとそらして、傘を手にしたまま大きく伸びをした。

「忘れました。……というより、忘れようとしました」

「どうしてですか」

「いろいろ人の恨みとか悲しみとか……そんなものを抱えたまま生きていけるほど、強くはなれなかつたからですよ」

「そんな……そんなことって……するい」

私の小さな本音が、ポロリと零れ落ちた。

「そう……ですね」

「もし彼を、江藤哲夫という人間を殺したとしても、いづれはそのことを忘れてしまつんですか」

「たぶん。でも……あなたもそつなりますよ」

「そんなことは、ありません……」

私ははつきりと否定したかったが、何故か語尾はかすれで小さくなっていた。

「でも、忘れた方が良いこともあります。あなたも……いつもまで過去に囚われていてはいけないんじゃないかなと思います」

「囚われてなんて……」

「そうでしょうか」

だがそれを言うなら、そういう人間は、私だけではないはずだ。

「じゃあ、何故あの母親の依頼を受けたんですか」

「……仕事ですからね」

「それは、ずるい……やっぱり、ずるいです。そんな言い訳で逃げるなんて……」

私はこの期におよんで、何を知りうとしているのだらう。この男の本心？ でもそれを知つてどうするというのだろう。

「……ただ、前にもお話したかもしれません、私はむやみやたらと人を殺してまわっているわけではありません。たとえ、どんな大金を詰ましても」

「それは……」

私は迷った。次の句を続けるのが怖かつた。だがあえて話し続けた。

「それではやつぱり、彼は死ぬべき人間だとお考えなのですね。でも、世間知らずで愚かな娘がずっと側にくつづいているから、仕事に支障をきたすから、必死で引き離そうとしているわけですね」

「そうは言つていませんよ」

「でも、そうでしょう、そういうことなんですよ！」

あの悲しそうな表情が、男の顔に浮かんだ。私たちは見つめあいながら、長い沈黙の時が流れた。

「……これも前にお話したことですが、そんなに自分を貶めてはいけませんよ」

「でも……」

「過去に囚われている人間がどんなものか、どんなに悲しいものか、あなたはついたとき、その日で『らんになつたはずです』

「だから、私を……あの母親にあわせたのですか」

「……」

男は答えなかつた。

「私がどんな過去を過ごしてきつたか、あなたは『存知のはずですよね……』

「ええ。まあ」

私は改めて同意の言葉を引き出した。

「でも……でも、彼は……彼はまだ生きているんです。まだ死んではいなんですよ。私の力で……なんとか助かるかもしねいんです。だつたら……だとしたら……」

「私にできることは……いや、無茶を思われるようなことでも、やらなければならぬのだ。

「確かに戻れるかもしません。誤った選択をしてしまつた前の、以前のあなたに戻れるかもしません」

「私が彼を愛したことが、『誤つた』選択なのでしょうか」「いや、それは……」

「……今にして思えば、私はこれまでにいくつも『誤つた』選択をしてきたのかかもしません……」

親の言いなりになり、世間とは干渉をもたず、ただ小さくなつて己を苟み続けた末、どのような結果が待ち受けっていたといふのか。

「でも、彼を選んだこと、彼を守るひつとすることが、そうであることは私には思えません」

「……うよ、そう思つたかった。『誤つた』ことだと思つたくなかつた。

「はつきり言いますが、あの男はあなたが愛するに値するほどの人間ではありません」

他人だから、直接会つて話をしていないから、実際に救われてい

ないから、そんなことが言えるのだ。

「私だって、彼に愛されるに値するほどの立派な人間ではないかも
しません」

「そういうことではなくて……」

「あなたは……人を好きになつたことがありますか」

思わずそんな言葉が口に出てしまつた。すると男は、はっと息を
呑み、そしてそんな自分を恥じるように下を向いてしまつた。それ
までずっと年上の人のように思えた男が、急に幼い少年のように見
えた。

「……ある……と思います。……いえ、あります」

どれも雨音に消えてしまつほどどの、小さい声だつた。

「だったら、少しでいいんです。私の気持ちもわかつて下さい」

「はい……すみませんでした」

男は深々と頭を下げた。

その時、私に少しだけ傲慢な気持ちが芽生えてしまつたことは否
定できない。理由はわからないが、結果として、やや私が精神的に
優位に立つたように思えたのだ。このまま責めれば何とかなるので
はないか、そう私は思い始めていた。

「もう一度、もう一度だけお願ひします。彼を殺すことにはあきら
めてくれませんか」

私ははつきりと男の顔を見据えながら言つた。だが男はある悲し
そうな表情のまま、視線を合わせようとはしなかつた。

「……お願いです……」

「……」

男は無言のまま一三歩ほど歩いて、すぐに立ち止まつた。目を開
じて、傘を持たぬ手をポケットに入れ、いつそ背中を丸めるよつ
にうつむいた。そして大きくため息をついた。

「私は……やはりあなたとは会つべきではなかつたのかもしれませ
ん」

「えつ？」

男のぼそぼそと喋りはじめた。それは私に向かって、といつより自分自身へ、といった感じであった。

「……今さら、何を言つているんだ……」

「あの……」

声はますます低く、小さくなつていった。

「……つぐづぐ自分がいやになる……」

「……」

「何様のつもりなんだ……何とかなると思つていたのか……お前の方が世間知らずの大ばか者だ」

「あの!」

つい声が大きくなつた。でも、この声のおかげで、やつと男はこちらを向いてくれた。しかし、男は私が側にいたことすら忘れてしまっていたかのように、その表情には驚きの色が浮かんでいた。

「……」

男はまた恥じるかのように俯いてしまつた。体が小刻みに震えている。実は私も、男の言葉に動搖を隠せないでいた。それはまるでまたこの私のことを言つているかのように思えてしまつたからだつた。だが、男が私の方を見ていないおかげで、心のうちを悟られることにはならなかつた。

「……ごめんなさい。無理なお願いだつてことはわかつていいんです。でも……」

よくもまあ、そんな言葉がすらすらと口から出るものだ。そんな自分に、次第にまた嫌惡の情が湧き上がつていいくを感じはじめたその時、

「違うんです。そうじゃないんです!」

大声で男が叫んだ。

「……」

「あ……すいません」

男はまた弁明の言葉を繰り返した。「……でも私の本当の気持ちを知られずに済んだ。

「何と言つが、……その、つまり……時間が欲しいことです
よ。……ひとりで、考えたいんですよ。」

「……」

「……もう一日だけ時間をくれませんか」

「何と、答えてあげればいいんだね。」

「……お願いします」

「……わかりました」

それが男にとつて、ぎりぎりの譲歩なのだろう。私は素直に、それに従うこととした。というより、もはや、この男にすぎるより他にないようと思えた。男はまた、歩き始め、今度はやっとあの馬の遊戯具に手を触れた。走り終えた競走馬を、慈しむよつた。「あなたと私は敵同士なんですね」

ふいに男は言葉をもらした。

「えっ？」

そして、問い合わせ返した私のすぐ側まで歩いてきた。

「今日はもうアパートへお帰りなさい。それに、彼とも今日は会わないほうがいいでしょう」

「……どうして」

「彼は今、病院にいるでしょう。友人の遺体に付き添つために。ですかね？」

どうして男が知つているのだろうと思つたが、知る術などいくらでもあるのだろうと考え直した。

「……え、ええ」

「私が言つのも変ですが、ひどくまいっていると思います。そんな彼の側についてあげたいと思うかもしれません、今は逆に、一人でそつとしておいてあげるべきです。彼自身、いろいろと考えたいでしようから」

「でも……」

「今は待つべきなのだと思います。私を信用してください。約束は必ず守ります。それに、男というものはですね、あまり女人に悲

しんでいるところや、惨めな気分でいるところを見られたくないんです。察してあげてください」

「……わかりました」

ひどく饒舌になつた男の態度をいぶかりながらも、私は了承した。

「改めて、『』連絡をします」

男はそう言って、すぐに踵をかえ歩いて歩き出した。男の背中がひどく寂しそうなのは、私の気のせいだろうか。

「あの！」

私はその背に向かつて声をかけた。男が立ち止まる。

「ありがとうございました……」

男は振り返らず、すぐにその歩を進めて、そのまま公園の外へと出て行ってしまった。

その十四

男が去つて行つた後も、私はしばらくその公園でたたずんでいた。さて、これからどうしようかと、思案にくれていた。それから、意味もなく巨大な馬の遊戯具のまわりをぐるぐると回つてみたりもした。じつとしていることができなかつたから。

この日の朝までは、私には何をすべきか、はつきりとした目的があつた。向井青年の母親に会い、私の彼への殺しの依頼を取り下げてもらうこと。それは失敗には終わつたが、その後、黒服の男と話し合つことができた。見たところ、男は心の中で迷いはじめているようだつた。そして事態も、はからずも好転しかけているのではないか。

だが、急にそのようになつてしまつたことで、私自身も動搖してしまつっていた。何をしたら良いのか、わからなくなつてしまつたのだ。

男は「まつすぐアパートに戻つた方がいい」と言つた。その言葉の通り、部屋で待つべきなのか。だがしかし……と私は思う。本当にそれでいいのか。他に、私のやるべきことがあるのではないか。もう一度、あの母親と会つてみようか、そんなことも考えた。もつと時間をかけてゆつくりと説得すれば、理解を示してくれるのではないか。母親が殺しの依頼を取り下げるれば、あの男も悩まずに、彼を殺すことをやめることができる。

……なんと虫のいい考え方だ。

これから行つて、あの母親が私と会つてくれるわけがないではないか。それに説得できるといつて、何かそういうことに対する当てでもあるのか。けんもほろに追い返されたのは、それこそつい先ほどのことではなかつたか。

じゃあじやあじやあ……。本当に私には、もはや何もやるべきことはないのか。一番大切なことを、人任せにしているだけではない

のか。

結論を先に延ばしているだけではないのか。

私にも何かできることが……。

そこまで考えてしまふと、また頭に変な痛みを覚え、体と心に疲労を感じてしまう。雨が降つていなければ、またその場に、公園のベンチにへたり込んでしまったに違いない。体を使うことも、頭を使うことも駄目だなんて。

私は怖かったのだ。取り残されてしまった感じがして、もう自分が必要無いのだと言われてしまった気がして、寂しかったのだ。自分がタフな人間でないことは、自覚しなければならない。私ができることなどたかが知れている。だからといって、待つことだけに耐えられる強さもなかつた。

彼に会いたい。

心のそこからそう思う。誰かに側にいてほしい。すぐにへたり込んでしまう私を、支えなくてもいいから。一緒にいてくれるだけでいいから。あの日の朝が、はるか遠い昔のように思えた。あの時以来、電話以外に彼と話す機会は訪れなかつた。あの駅へと向かう彼の後姿が、ますます遠いものになつてしまつたように思えた。

彼に会いに行こう。私はそう決めた。黒服の男との約束を忘れたわけでは決してない。ただ、そつと遠くから眺めるだけでいいのだ。生きている彼の姿を、自分の目で、はつきり見ておきたいだけなのだ。そうすれば、ほんの少しの間は我慢することができる、ほんの少しの間だけでも息をつくことができる、そう思えた。

私は公園を出た。駅の方に向かいながら、まずは島崎さんの実家へ電話してみようと考えた。

司法解剖というものが、どれくらい時間のかかるものなのか私はわからなかつたが、遺体はまだ病院からは戻つていないのでないかと思う。そしてその安置先の病院がどこなのか知りたかつた。昨日の話では、彼は島崎さんの遺体にずっと付き添いたいと言つていたから、その安置先さえわかれれば、彼の居場所もわかることにな

る。もしくは先に実家の方へ移動しているかもしれない。

島崎さんには私自身もいろいろとお世話になつたし、何より向井青年の存在を教えてくれた人だ。しかも、その私と会つた直後に殺されてしまつたということであれば、本当のこととはまだまだ話すことはできないにしても、せめて哀悼の言葉くらいは、私の口から遺族の方に伝えたかった。

「はい、島崎ですが……」

番号はすでに登録済みだ。早速携帯からかけてみると若い女性が出た。島崎さんの『姉妹の方』だろうか。

私は自分の名前を名乗り、生前、私の彼を通じて親しくお付き合いさせていただいていたことを話した。続いて、今度の悲惨な出来事に対するお悔やみを述べた。

「わざわざ兄のためにお電話頂き、ありがとうございます」というやうに妹さんらしい。

「『遺体は、もうそちらで戻られたのですか』
「いえ、まだ……。何でも明日にならないと戻してくれないみたいですね。通夜も明晩に行う予定です」

いろいろと事細かく調べられるのだろうか。身内の体を切り刻まれるなんて、遺族の心中を思うと胸が痛くなつた。

「あの……お忙しいところ申し訳ないのですが、彼が……江藤が来ていると思うのですが」

「江藤さん？……………いえ、いらっしゃいませんが」

「では病院の方ですか？」

「いいえ。あちらには両親しかいないはずです。母は兄の側から離れることができないみたいで。タベは私もいたんですけど、通夜の準備もありますので、先に戻つてきているんです」

「彼が、いない？」

「じゃあ、あの、失礼ですけれど、彼が、江藤が何処にいるかご存知じやありませんか？」

私の心の中を一抹の不安がよぎつた。

「さあ……。江藤さんとはここ何年もお会いしておりませんし。兄とばかりよくお会いになっていたのかもしれませんけど、会つていらない？ 何年も？」

「でも、ゆうべは島崎さんが運ばれた病院へ、彼も行つてゐるはずです」

「いいえ……確かに病院へは、兄の会社の方や親しいお友達とかがお見えになつてくれましたけど、……その中には江藤さんは、いらっしゃいませんでしたね」

……。

「もしもし？ もしもし？」

彼は病院へは行つていない、そんな馬鹿なことがあるものか。昨夜の沈痛な声で、私に電話をしてきたではないか。島崎さんの側にいてやりたいと、涙ながらに語つていたではないか。

落ち着け落ち着け。ひょつとしたら、妹さんの勘違いかもしれない。何年も会つていないと語つたではないか。他の誰かと間違えているかもしれないのではないか。あるいはたまたま、妹さんのいない時に訪れたのかもしれないのではないか。ずっと側にいる決心をしていながら、いたたまれなくなつて外へ出てしまつたのかもしれないではないか。中に入ることができず、病院の外をぐるぐる歩き回っているかもしれないのではないか。あるいは……それとも……。

では、彼は、何処にいるのだ？

「もしもし。どうかなさつたんですか。もしもし？」

私はようやくまだ通話中であつたのを思い出した。私は今の非礼を詫び、もし良かつたら、島崎さんが安置されている病院名を教えてはもらえないかと頼んでみた。

「それは構いませんけど……。今から行つても中には入れないと思いますよ」

私の心中を見透かすように、妹さんは答えた。

「私が言つのも何ですけど、犯人もまだ見つかっていないし、あんな形で兄が殺されてしまったのですから、マスクミの方も大勢来

ているんです。こちらにも何人か張り込んでいるらしくて……。なので兄の元には、警察の方か、うちの両親ぐらいしか近寄れないぐらいなんです。だから、江藤さんが病院にいるとは思えないのですが……」

おそらくその通りなのだろう。それでも私は無理やり病院名を聞きだし、形ばかりのお礼の言葉を付け加えて、電話を切った。

心臓が破裂しそうなほど、大きく脈打っていた。頭の中が、煙を上げそうなほどフル回転していた。それでも私は何度も深呼吸することで、冷静になろうとつとめた。

ひょっとしたら彼は、自分の実家へ戻っているかもしれない。やはり病院へ行くことはできなかつたのだろうが、それでも明日の通夜には参列するだろう。それならば実家からの方が何かと便利に違いない。私はすぐさまそちらへ電話した。だが……。

「哲夫ですか。いいえ、こちらへは戻つてきてしませんよ」

電話口に彼の母親と思わしき人物が出て、そう告げた。

「仲の良かつたお友達があんな日にあつたのにねえ。知らないはずはないと思うんだけど……。こつちから何度電話しても出ないんですよ。喪服だつてこつちにあるんだから。でもつながらなくてねえ。どうするつもりなのかしら、あの子」

会社へ出ているかも知れない。確かに今日は彼の会社は休日のはずだが、今までも何かといつては休日出勤をしていたではないか。きっとやむにやまれぬ事情があつて、会社へ出勤せねばならなくなつたのではないか。きっとそうだ。

だが彼のオフィスへは何度電話しても、誰も出るものはいなかつた。

「こじでやつと私は、彼の携帯電話に電話してみた。「……電波の届かないところに居られるか電源が入っていないため……」というコールがむなしく響く。何度も何度もかけなおしてみたが同じだつた。

わからない。彼は何処へ行つてしまつたのだ?

……「彼とは会わないほづが良いでしょ」「う……

男の言葉が頭をよぎる。

彼はもう殺されてしまったのであるつか。

いや、そんなことはない。そうではないと思いたい。あの男も言つていたではないか。「もう一日だけ時間をくれ」と。「改めて連絡する」と。

やはり私には、待つしか道が残されていないのだろうか。

はつと気がつくと、いつの間にか雨はやんでいた。あわてて傘をたたむと、ちょうど雲の切れ間から、太陽が顔を覗かせてまばゆい光を差し込んできた。光は一陣の線となつてあたりを貫き、その光景はまるで宗教画のようでもあり、いやになるほどきれいだった。

その十五

その後、私は念のため病院の方へも行つてみたが、あの妹さんの言ひとおり、門前払いをくわされただけだった。そして、もはや私にできることと言えば、あのアパートに帰ることしか残されていなかつた。あたりはすっかり暮れていて、冬の夜風が身にしみた。室内に入つて、薄暗い部屋の真ん中に座ると、出るのはため息だけだつた。そういうば今日も朝から何も食べてはいなかつたが、少しも食欲は感じられなかつた。

私は携帯を手にして、彼の元へ電話をかけた。これで何回目になるだろう。一度だつて、彼が出ることはなかつたし、そして今回もまた同じだつた。

「……あなたのおかげになつた電話番号は、電波の届かない所にうられるか、電源が入つていなため、かかりません……」

無機質で乾いたアナウンスが流れた。私はまた力を落とし、電源を切つた。

彼は一体何処へ行つてしまつたのだろう。

先ほど島崎さん宅や、彼の実家などあちこちに電話をかけて以来、私の頭の中にはいくつもの嫌な考へが、浮かんでは消えていった。やつぱり彼はもうこの世にはいないのではないか。あるいはどこかに軟禁されているのだろうか。裁きが下されるまで、何処か暗い地下室に閉じ込められていやしないか。そして彼のすぐ側には、あの黒服の男が立つていて……。

あの黒服なら、彼が今何処にいるのか、生きているのか死んでいるのか知つてゐるに違ひない。だが、こちらからあの男へ連絡を取る術はないのだ。男はいつも突然現れ、突然電話をかけてくる。ひょつとしたら今も、この近くで私を見張つているのかもしれないのだ。

私は外へ飛び出して、大声で叫びたかつた。彼に会わせてくれと。

彼の声を聞かせてくれと。

結局、私があの男を信用するにたる材料など、何一つなかつたのではないだろうか。すべて私の思い込みでしかなかつたのではない種だ。あの男は人殺しなのだ。犯罪者なのだ。その話し振りや態度など、相手によつていいくらでもえうるに違ひないのだ。それに騙されてしまつた私が馬鹿だつたのか。現にあの男は島崎さんを、私と会つたすぐ後で、私も居た公園で殺しているではないか。あれこそ悪意の果てでなくてなんだろう。

しかし、あの男を否定しようとするほど、あの悲しそうな顔が、今日あの雨の公園の中で見た、あのやりきれなさをにじませた横顔が、私の瞼に浮かんでくるのだ。信じたい。信じてあげたい。それはとりもなおさず、その時の私を気持ちを、私を信じるということなのだから。

だが、そうだとすれば、今度は彼の方を疑わなくてはならなくなる。昨夜の電話。親友の死に対する戸惑いと悲しみにあふれたあの言葉。あんな真剣な彼の話し振りを聞いたのは、いつ以来だらう。でも実際は、彼は病院には姿を見せず、実家にも戻つていない……。

私は首を振つた。彼を疑うなんてどうかしている。きっとなにか理由があるに違ひないのだ。すべてが納得できるような、何かしらの理由が。これまでの私の苦労が報われる、すばらしい夢のような結末が準備されているのだ。

そう。そうであつてほしい。お願ひ。お願ひだから。神様。いや、神様でなくともかまわない。誰でもいい。誰でもいいから。笑つて、そんなに気にすることはないよと言つて欲しい。こんな目にあうのはこれが最後だから。そう言つて。お願ひ。彼とはこれからやり直していけばよいのだから。別れたくない。捨てられたくない。一人でなんて生きていけない。私の至らないところは何でも治します。彼の言うことなら何だつて聞いてあげる。だから。私をこれ以上不安にさせないでください。幸せになりたい。これ以上私を、不幸に

しないで。だからお願ひ……。

私は泣いていた。両の目から、涙が無慈悲に流れ落ちていった。それと共に、私の想像はとめどなく悪い方悪い方へと流れしていくのだった。

私は無力だ。どんなにあがいていても、どうすることもできない。何一つ変わりはしない。私自身も、私を取り巻く環境もすべて、変えることなど出来はしなかったのだ。ここではない何処か。そんなものは最初から存在していなかつた。幸せな生活。明るい未来。それもありはしない。すべては私の単なる思い込みの結果に過ぎなかつたのだ。何もかもが私の幻想でしかなかつたのだ。毎朝のように行つていた、あの一人遊びの延長が、惰性のごとく延長されていただけだったのだ……。

いやだ。そんなのはいやだ。

私は携帯を手に取り、もう一度、もう一度だけ、彼の携帯へ電話をかけた。いや、彼が出るまでかけ続けようと思つていた。出て。早く出て。すぐ出て。今出て。必ず出て。お願いだから……。

「……はい。もしもし……」

でた！ 間違いない、彼の声だ！

「もしもし？ もしもし？」

私は彼がまだ生きていることに思いが入つていたので、こちらから話すということが飛んでしまってうだつた。

「もしもし、哲ちゃん、あたし……」

それだけの言葉をひねり出すのにかなりの気力が必要とした。

「……ああ、わかってるよ。なんだよ、突然」

向こうにもこちらの番号が出るのだから、私からかけていることは当然わかるわけだ。でも、彼が少し動搖しているように思えるのは氣のせいだろうか。声が少し上ずつっているように聞こえるのも氣のせいだろうか。

「何度も……何度も電話したんだよ。でもなかなか出てくれなくて

……」

「ああ、やうだな。悪い。ほり、病院の中だと携帯が使えないだろ、だから……」

「嘘……。」

「…………哲ちゃん。ねえ、哲ちゃん。今……何処にいるの？」

「…………何処つて、病院だよ。ほり、島崎が運ばれてきた。遺体はまだこっちなんだよ」

「なんて言つ病院？」

「えつ」

「名前よ。病院の名前……」

逆に私の声はこれまで以上に低く、驚くほど冷静になっていた。
まるで自分が喋っているんじゃないみたいだった。

「それは……いいじゃねえか。何処だつて」

「答えられないんでしきう」

「そんなことはねえよ。…………S区だよ。S区にある大きな病院」

「だから、名前は？ S区の何ていう名前の病院？」

「…………お前、何が言いたいんだよ」

「私は哲ちゃんの口から、島崎さんの遺体が運ばれた病院の名前が知りたいだけなの」「二ユースでもやつっていたら？ 僕の口から聞かなくつたって、わかるだろ」

「答えないのは、知らないからでしきう？」

「…………」

「哲ちゃんは今、その病院にはいないんでしょう？ ううん、今だけじやなくて、必ずべから、島崎さんの処へは一度も行つていらないんでしょ？？」

「馬鹿。そんなことはねえよ。……俺はずつといたよ。あいつの側に」

「嘘嘘嘘……。」

「あたし、行つてみたわ。島崎さんが運ばれた病院に」

「なんだつて？」

「でも、遺族の人でないと会わせてはもらえなかつた。マスクの人も大勢来ていたから」

「そりやあ、お前はな。でも、俺は……」

「でも、島崎さんの妹さんはお話をきたわ。電話でだけど……」

「親しいお友達の方が何人も来てくれたって言つていたけど、哲ちゃんは来ていなかつたつて。それに今日はじ両親以外は、病院にいなはばずだつて」

「それは……」

「それから……それからいろいろなんところにも電話したわ。ずっとずっと、今日一日中ずっと哲ちゃんのことを探していた。携帯はぜんぜんつながらないし、ひょっとしてもう死んでしまったのかとも思つた。とてもとても悲しかつた。だから、だからだから、こうして話をすることができて、うれしくて、それで……それで……」

私はまた泣いているのかもしれない。だがその涙は、何のための涙なのか。誰のための涙なのか。

「……ねえ、哲ちゃん、怒らないから、本当のこと教えて。今、何処にいるの」

「何処つて……さつきから言つているじゃねえか。病院だよ」

「哲ちゃん!」

「うるせえな。お前には関係ないだろ」

「哲ちゃん……怒らないって言つているじゃない。ただ……ただ、知りたいだけなのよ」

「知つてどうするんだよ」

「今から、そこそこ、行くわ……」

「はあ?」

「会いたいの。会つて話がしたいの。三日よ。もう三日も会つてこないのよ」

「たかが、三日じやねえか。付き合い始めの頃は、一週間以上、会わないときもあつただろ」

「違うの。やうじやないの。……哲ちゃん、あなたこのままじゅう…
殺されてしまつたよ。命をねらわれているの」

といつといつ言つてしまつた。

「……殺される？ 僕が？ 何を馬鹿な」と言つてゐるんだよ
やはり彼の反応は想像通りのものであつた。だが、わかつてもちら
わなければならぬ。知つてもらわなければならぬ。

「本当なのよ。聞いて。高校時代のクラスメイトだった中島さんと
仁科さんが、ここ何ヶ月かに相次いで死んでゐるの。そして今度は、
島崎さんが殺されたわ。次は哲ちゃん、あなたの番なのよ」

「訳のわからねえこと言つてゐるんじゃねえよ」

「本当よ。本当なんだよ、哲ちゃん。でも、まだ助かる道はあるの。
だから……」「……」

「つむせえなあ。大体なんで俺が死ななくちやならないんだよ。誰
に殺されるつて言つんだよ。ひょっとしてお前にか？」

「それは……」

「そりやあなあ、確かに俺は嘘をついたよ。お前を騙したかも知れ
ねえよ。だからつて、殺すつてどうこうことだよ。わからねえよ。

お前の言つていることは」

「だから……違つの、そんなことじやないの」

「じゃ、なんだよ。何だつて言つんだよー！」

落ち着いて。冷静になつて、私の話を聞いて。だが彼は、その言
葉が私の口から出るよりも早く、矢継ぎ早にまくし立て始めた。

「俺が何をしたつて言つんだよ。仕事だつてそれなりにやつて
しよ。馬鹿な連中の言つことも聞いて、頭だつて下げてやつて
んじやねえかよ。何一ついいことなんて、ありやあしねえしよ。我
慢してやつてゐるんだよ。それなのに、殺されるだあ？ ふざけん
なつて」

「うん。あたしさわかつてゐるよ。哲ちゃん、一生懸命、頑張つて
いるもんね。でも」

「『でも』なんだよ。結局お前も、俺なんか駄目な奴だと思つてい
る」

るんだろ。俺なんか死ねばいいと思つてゐるんだろ

「そんなこと思つてないよ」

「聞いて。お願ひい。

「お前にはわからねえんだよ。俺のことなんてよ

「そんな……」

「そうだよ。だいたいお前、なんなんだよ。何様のつもりだ？ ち
ょっと告つたぐらいで、ちょっと付き合つたぐらいで、女房氣取り
で俺の家に転がり込んで来やがつてよ」

この人は本当に、あの優しかった彼なのか。これは本当に、彼の
口から発せられた言葉なのか。

「……哲ちゃん。今は私のことなんかより、あなたのことが大変な
のよ。私は心配しているの。あなたを助けてあげたいの」

「それだよ。俺がいつ頼んだ？ え？ あれもしてくれこれもして
くれ、俺は子供で何もできないから、みんなみんなやつてください、
お願ひしますつて、いつ言つたよ。それを押し付けがましく、箸の
上げ下げから何やら、何でもかんでも口を出してきやがつて。断ろ
うものなら、朝から恨みがましい目で睨みやがるしよ。お前が勝手
にやつしていることだろ。俺が悪いみたいじゃねえか。俺のことが心
配だあ？ 余計なお世話だよ」

「哲ちゃん……」

「もうたぐさんなんだよ。お前の見下すような態度には、うんざり
なんだよ。俺はな、何でも一人できるんだよ。ガキじやねえんだ。
好きにやりてえんだよ」

「あのね、哲ちゃん……」

「その『ちゃん』づけで呼ぶのが見下しているつて言つてゐるんだ
よ。わからねえのか、馬鹿！」

突然、ブツツと嫌な音がして、電話は切れてしまった。何がなん
だかわからぬまま、私は携帯を握り締め、呆然としていた。今ま
での彼との会話を反芻しようとしたが、それもできなかつた。何故
彼はあんなに怒つていたのか。考へることすらできなかつた。

私はすぐに彼の携帯へと電話しなおした。だが、受話器から聞こえてくるのは例の「お客様がおかげになつた電話番号は……」という乾いたアナウンスでしかなかつた。私はそれでも何度もかけなおした。そのたびにそのアナウンスが何度も何度も聞こえてくるのであつた。

私がついにあきらめ、携帯をその手から引き剥がすことができるようになつてから、少しだが落ち着いて物事を考えられるようになつた。あれが彼の本当の気持ちなのか。あれが彼の眞実の言葉なのか。私は邪魔なのか。余計なことばかりする？ 私が彼を見下している？

馬鹿な。そうであるはずはないではないか。

私のおかげで、彼はちゃんとやつていけているのではないか。すべて私が、彼の為にしているのではないか。私が毎日、食事を作つてあげているからこそ、病気をせずに健康な生活を送っているのだ。私が毎朝、ちゃんと起こしてあげているからこそ、彼は遅刻もせずに真面目に出社できているのだ。もちろん、掃除も洗濯もすべて私みんなみんな私。わざわざしいこと、面倒くさいこと、それから、あんなこと、こんなこと、全部、私が、やつて「あげている」のだ。私だつて、毎日働きに出ているのに。家の中のことは、全部、私が。その他のことも、全部、私が。彼に、変な気苦労を、かけまいと。安心して、仕事に、打ち込めるように。感謝こそすれ、非難するなんて。それになにより、彼のことを、ここまで、こんなに、これほど、心から、心配している、人間が、愛している、人間が、他に、私のほかに、誰が、どこに、誰が、いるというのか。私だ私だ私だ私。……私以外には、いらないのに。彼のことを一番知っているのも、彼のことを守つてあげられるのも、私しかいないのだ。だから、この数日間、必死で、さつきも、彼のことを案じて、何度も何度も、何度も何度も、電話して。なのに、なのにななのになのにそれなのに……。こんな私に、あんなひどい、あんなひどいことを言うなんて。馬鹿。分からず屋。へそ曲がり。どうして私の気持ちをわかつて

くれないの。こんなに渴くしていいるじゃない。こんなに頑張つてい
るじゃない。私のことを認めてよ。褒めてくれなくてもいいから。
見返りがほしいわけでもないから。私を、私という一個の存在を、
ただ単に認めてくれるだけでいいから……。

…………。
もついい……なんだか、疲れちゃつた。結局あなたも、あの入た
ちと同じだつたのね。私をいじめて、辛い目にあわせて、楽しんで
いるんだわ。いいわ。いいのよ。そんな人、こちらからお見限りよ。
私は、幸せに、なりたいの。私を不幸にする人は、みんなみんな
なくなつてしまえ。私に乱暴を働いたあいつも。私を閉じ込めよう
としたあいつも。私の存在を無視したあいつらも。みんなみんな、
全部。それ相応の、いえ、それ以上の、罰を受けるといいんだわ。
そしてあなたもよ、哲ちゃん。あなただつて……あんたなんか
お前なんか……。

“死んでしまえばいいんだ”

その言葉が頭に浮かんだ瞬間、私は長い夢から覚めたかのように、
はつとなつた。私は今何を考えていたのか。その言葉は、本当に私
の心の中から聞こえてきたものなのか。

突然、携帯がなつた。

私は慌てて電話をとつた。彼からだ。きっと彼からに違いない。
すぐに私は詫びなければならない。先ほど心に浮かんだ言葉。あれ
は嘘だ。けつして本心からの言葉ではないのだ。そのことをはつき
りと伝えたかつた。

「もしもし、哲ちゃん。哲ちゃんでしょう? “ごめん。”ごめんな。
“ごめんなさい。あのね、今ね……”

と、そこまで言つた時、私は気づいた。
違う。彼ではない。

お互に長い沈黙があつた。私がかすかに鳴らしたのどの音が、

大音量で頭の中に響いた気がした。

「もしもし……どちらまですか」

私はかすれた声で尋ねた。この携帯の画面には、非通知とだけ表示されていたのではなかつたか。そして彼以外で、私の元へ電話をかけてくるような人物は、もう一人残されていないはずであつた。

「……どうして待つていてはくれなかつたのですか」

あの黒服の男からだつた。

「もしもし、待つてください。違うんです。聞いてください、お約束を守らなかつたわけではなくて、私は……」

「でも、結果的として、よくおわかりになつたと思います。あの男は、あなたのことなど何とも思つてはいないのです。いや、と言つより疎ましく思つてはいる」

「そんな……そんなことはありません。今日はただ、疲れていて、イライラしているときに、私があんな電話をしてしまつたから。私が彼を信じてあげられなかつたから。私が悪いんです。日を変えて、時間を変えて、落ち着いて話をすれば……」

「いいえ。悪いのはあの男です」

「違うんです。彼は……」

「あなたを裏切つて、別の女の元にいるような男を、もうこれ以上庇うことはありませんよ」

「えつ……」

別の、おんな?

「あの男は今、ある女のマンショニにいますよ。この一日間、ずっとです。病院はもちろん、親友の葬式にすら行くつもりもないようですね」

「そんな……」

「あなたはお気づきではありませんでしたが、あの男は、数ヶ月前から別な女性とも交際を続けています。あなたの元へ帰らない日は、決まってその女の所に泊まつていたんです。仕事で帰れなくなつたところのも、大嘘ですよ」

彼はずっと浮氣をしていたというのか。もはや私を愛して下さいないと叫ぶことなのか。

「嘘……嘘です。そんなことは出鱈田です」

「私は今、そのマンションのすぐ近くにいるんです。あの男が一緒になのも、確認済みです」

「別な女との、別な住み処……」

「……何処なんですか、そこは」

「知らないほうがいいでしょ」「う

「お願いします。教えてください」

「……知つてどうするって言うんです」

「その女性と会います。会つて話がしたいんです」

私は知りたかった。彼が私を裏切つてまで、ひそかに隠した女がどんな人間かを。

「無駄でしょうね。……もうこれ以上、あなたが辛い目にあうことはありません。あの一人が、陰であなたのことを何て言つていたかご存知ないでしょ?」「う

「大丈夫です。話せばわかってくれるはずです」

「もしそうだとしても、もう時間はありません。タイムリミットです」

「タイムリミット……タイムリミット……タイムリミット……」

「それは……どういう意味ですか」

「あなたはもう、あの男と話すことはないでしょ。あの男から、卑劣な仕打ちを受けることもなくなります」

「それは最後通告とこうことなのか。」

「待つてください。今日一日、あと一日待つてくれる約束ではありますませんでしたか」

「約束を守つてくださいななかつたのは、あなたの方ですよ。わかつていてる。確かにそうかもしない。でも……。もう一度、もう一度だけチャンスがほしい。」

「なんとかあなたには知らせずに済ませたかった。あの女と別れて、

あなたの元へ素直に戻るくらいなら、命だけは助けてやるうとも思つていたのですが……。残念です」

「待つてください。教えてください。そこは何処なんですか。彼は何処にいるんです」

「……」

「お願い！」

「あなたもよくご存知の女性が住んでいるマンションです。……その娘には、毎日お会いになつてゐるといつてもいいかもしません」

そう言つて、電話は切れた。私は何度も携帯に向かつて叫んだが、もう遅かった。

私がよく知つてゐる女。

私が、毎日、会つてゐる、おんな。

まさか。……そんな、まさか……。

私はバイト先へ急いで電話をかけた。

呼び出し音がなつてゐる間、いくつかの出来事がフラッシュバックする。……昨夜の電話のとき、彼はその日、私が仕事を休んだことを知つてゐる様子だった。だからその日が、バイトの定休日だと勘違ひしていた。では、誰が彼にそのことを告げたのか。

私はほとんどこの部屋と、バイト先を往復しているだけの毎日だ。大家さんとは直接お会いする機会はないし、他の部屋の住人たちとも話すことはない。そしてバイト先の店長は男性だし、同じ時間帯にパートで働く顔見知りの人は、一人を除いて中年のおばさんばかりである。

彼が付き合ひそつた「若い」女性は、その「一人」しか思いつかなかつた。

私といつも同じレジで働くあの娘……。

私はあの娘の、伏目がちの態度が頭に浮かんだ。何と言ふことだ。あれが、自分の本心を隠すための、見え透いたボーズであることはわかつっていたのに。

……「陰であなたのことを何て言つていたかご存知ないでしよう

?」……

あの娘は自宅でも私のことを嘲笑っていたといつのか。しかも彼と一緒になつて。

「ああ、どうも。どうしたの。体の具合はどう?……」

私は、のんきな店長の言葉を遮りて言つた。

「そんなことよりも、あの女子、今日は来ていますか

「女子?」

「ほら、いつも私と一緒にレジに入る……」

「ああ、大野さん? 大野さんは今日は来ていないよ

「あの、大野さんの住所を教えてもらえませんか

「住所を? なんでまた」

「あ、あの、お金を借りているんです。それを返したくて

「へー……別に今度のバイトのときでもいいんじゃないかな。来週また同じシフトの日もあるんだし」

「いえ、今、返したいんですよ! すぐに!」

「……」

思わず、声が大きくなつてしまつた。電話の向こうで戸惑つている様子が伝わつてくる。

「あの……本当なら、昨日返すつもりだつたんですけど、私休んでしまつて。大野さんの住所も、携帯の番号も知らないから、だからその……直接お会いして、お金返して謝ろうかと……約束破つちやつたわけですし、その……」

「そ、そうかい。まあ律儀なんだねえ。……まあ、あなただつたら別に問題ないと思つし。ま、いいか。ちょっとまつて」

保留中のメロディーが流れ始めた。その曲が、ひどく長く感じられる。

「おまたせ。いいかい

「どうぞ」

「N町一丁目一十一の九……。ああ、大学のすぐ近くだね」

「大学つて、店の側のあの大学ですか」

「そうだよ……あそこの学生さんだからね。メゾン・ド・ブラウン
四一……。ああ、大学の表通りにあるでつかいマンションだ」

あの日、私があの男と始めて会つた日、バイト先にあの男が現れた目的は、私ではなく、実はあの娘にあつたのではないか。そんな考えが頭に浮かんだ。私がその後、うろうろと歩き回つていた時に男の姿を見かけたのは、男があの娘の住むマンションを探索（もしくは娘を尾行）していたためではないだろうか。たまたまそこに、ばつたり私が出くわしてしまつただけなのではないだろうか。

「そこからだと、どちらの方角になりますか」

「えーと、向かつて西側、になるのかな。結構でかいからすぐわかるよ。ここからでも見えるんじゃないかな。おしゃれなマンションだよ」

あの娘の携帯の番号も聞いておいたようだろつか。だが、あの娘が電話に出ている間に、彼が殺されてしまつたら？
「……どうもありがとうございました」

私はお礼もそこそこに電話を切つた。そしてすぐに外に飛び出していた。何とか間に合つてほしい。そして、心の中でひたすら祈つていた。

しかし。

私の目が遠くに一瞬の光をとらえ、私の体が小さな衝撃とかすかな振動をとらえた。さらに私の耳には、誰かの悲鳴のような声が聞こえた気がした。まさか……。

私はその方角へまっすぐに駆け出した。走り続けていくにつれ、私のすぐ側を救急車や消防車の一団が、猛スピードで通り過ぎていった。どちらも目的地は同じだった。おかげで私は迷うことなくまっすぐにその場所へたどり着くことが出来た。そして……。
私は見た。

確かに大きなマンションだった。外装もきれいで新しそうだった。だが、その中の一室から、黒々とした煙と真っ赤な炎が上がっていた。火元は、どうやらその四階にある一番端の部屋からのようだっ

た。

先ほどの消防車たちが、すでにマンションを取り囲んでいる。まわりには大勢の人が集まっていた。私は人ごみをかき分け、警察がロープでその野次馬を食い止めている前まで出た。

「何が……何があつたんですか」

私はすぐ側にいた初老の男性に尋ねた。

「なんだかよくわからないんだけど、ガス爆発らしいんだよ。ドーンって音がしたかと思うと、バーンと火の手が上がってよお」

私の頭の中が真っ白になつた。そして次の瞬間、私は中に入ろうと駆け出していた。

「危ない。入っちゃいかん」

慌てて警官が静止した。私はその手を逃れようともがいた。

「彼が……彼があの部屋にいるんです」

「駄目だ。二次爆発が起ころるものかもしれないんだ」

「離して。行かせて下さい。お願い！」

どんなにもがいても、そこから先は一步も前に進むことはできなかつた。そしてその場で、彼とあの娘がいたであろう部屋が燃え朽ちていくのを見ていったしかなかつた。やがて意識が遠くなつっていくまで、私はずっともがき続けるだけであつた。

その十六

また雨が降っている。そしてまた、私を憂鬱な気分にさせている。幾つかの辛い思い出が、この雨と共に呼び起されたるから……。いつか今日のことも、あらためて思い出す日が来るのだろうか。未来の私は、どんな風にこの出来事に思いを寄せるのだろう。私は電話の呼び出し音を聞きながら、そんなことを思っていた。

「はい向井で……」

「わたしです」

私が答えた瞬間、相手の息を呑むような緊張感が伝わってきた。どうやら忘れずにいてくれたらしい。それも声を聞かせただけで、名前を名乗らずに誰だかわかつてもらえたとは光榮だ。その後に続く、こちらの出方を伺うよしな長い沈黙からして、歓迎ムードはずまずといえる。

「今からそちらにお邪魔してもよろしいでしょうか」

「…………」めんねさー。今から出かけなければならぬの…………

やや間をおいて、拒絶の言葉が帰ってきた。

「お買い物ですか」

「ええ、まあ……」

「では、お戻りは」

「さあ、いつになるか……」

「つい今しがた、お買い物からお戻りになられたのに、またお出かけになるんですか？」

「…………！」

私はわざと電話口で、クスクス笑いを聞かせてやった。

「この雨の中、あんなに大きな荷物を抱えて、やつとのことで帰ってきたのに、今度はどうちらにお買い物に行かれるのですか？」

「どうして……」

「ぶしつけだとは思ったのですが、先ほどからもうあなたの家の前

に居るのです

「一。」

それぐらいは容易に推測できると思つたのだが。

「し、失礼じやないですか。いくらなんでも……」

「だから、いきなりお宅にお邪魔しないで、こうしてお電話してい
るわけでしょう」

「……」

「お時間は取らせませんよ。私は教えていただきたいだけなんです。
それもただひとつだけ……」

「そう、ひとつだけ……。

「なんですか」

「あの男とは、どうやって連絡をとるのですか」

「あの男……？」

私の言つ「男」とは、たつた一人しかいない。

「殺し屋ですよ。あなたが自分の恨みを晴らすために雇つた、あの
黒服の男です」

「……何を言つてゐるの。ばかばかしい。殺し屋なんて……」

あくまで口を切らうとする相手に対し、私は畳み掛けるように言
葉を続けた。

「いいえ。御存知のはずです。よおくな」

「ふざけるのもいい加減にして頂戴。さっさと帰らないと、警察を
呼びますよ」

「どうぞ。もしそうなつたら、私も真実を話すだけです。あなたが
やつたことすべてね」

「そんな。あなたみたいな人の言ひ方となんて、警察が取り上げる
わけないわ」

正攻法で行けば確かにそうだろう。だが、

「かもしれませんね。でも、私とあなたのあの日の会話を、警察が
聞いたとしたらどうでしょう」

「あの日の……会話？」

「ええ。実はあの日、はじめてあなたとお会いしてお話をしたとき、
私、その時の会話をすべて録音しておいたんですね」

と、私は奥の手をちらつかせた。

「……嘘」

「本当です。現にそのテープをここに持つてきているんです」

私は自身の携帯のすぐ側で、ケースに入ったカセットテープを振つてみせた。力チャ力チャと言つかずかな音は、雨音に消されることがなく、大きくあちらに響いているに違いない。

「最近の録音技術はすごいですね。鞄の奥にしまい込んでいたわりには、はっきりと録れていますよ。みいんなね」

電話口の向こうにいるあの母親の姿が手に取るようわかる。しばらくは私の手のひらで、転がせてもらおう。

「私を侮っていたんじゃないですか。それにあまりに短期間に、四人も続けて死に追いやってしまったのも、ちょっと軽率だったと思います。なによりあなたのミスは、自分の手を汚さずに殺し屋を……あんな男を雇つたことでしょうね。あの男は優すぎました。もつと冷酷な、プロに徹した人間を雇い入れるべきでした」

やさしい殺人者。……お笑い種だ。あの男が、不良に絡まれていた私を助けたりしなければ。私の目の前に目立つ格好で現れ、似合わぬ皮肉や余計な忠告を残していかなければ。私の無理な願い事に、応えようとしなければ。あんな悲しそうな表情を、私になんか見せたりしなければ。

私なんぞが、こうも簡単に事件の裏側を知つてしまつことなど、決してなかつたに違いない。

「別に私の目的は、あなたをどうこうしようというのではないのです。ただひとつだけ、何度も言いますが、あの男との連絡の取り方を教えてほしいだけなんです。あの男にもう一度会いたい。それだけなんです。それさえ教えていただければ、あなたのこと警察に話したりなんかしません」

「……信用できないわ」

「信用していただくしかありませんね。別にあなたの方から、あの男あてに連絡を取つていただきてもいいんですけれど。……そうそう、ついでに私も始末させたらいかがですか。私みたいな小娘ひとりの命が、いくらかかるか知りませんけど。もつとも、その時は息子さんのためだなんていう大義名分は通用しなくなりますよ。あなたはあなた自身の身を守る、ただそれだけのために、人を殺すことになりますね。それこそ、あなたのエゴで」

「……」
「でも、それが本当の姿なのかもしれませんね。誰かの為に何かをしてあげるなんて、奢り高ぶった感情は嘘なんだと思います。結局はみんな自分のため、それだけを考えて生きているんだと思いますよ」

「そうだ。私がこんなことをしているのは、死んでしまった彼のためなんかではない。私は、自分自身のために、あの男に会わなければならぬのだ。

そのためになら、何だつてできる。嘘をつく事だつて こんなに簡単にできているではないか。

「でも……知らないのよ。本当に」

「では、どうやって殺しの依頼を行つたのですか。いきなり向こうから現れて、あなたの恨みを晴らしてあげるとでも言つたわけではないでしょう」

「それは……」

「答えてください」

「……」

また長い沈黙があつた。何時間でも付き合つても良かつたのだが、あえて私の方からそれを破ることにした。

「……わかりました。このテープと一緒に、警察へ行く」とします

「待つて！」

今度はあの母親の喉が鳴つたように聞こえたのは気のせいだらう

か。

「……交換条件です。そのテープと引き換えに、すべてを教えます」

「いいでしょ」「う

「玄関を開けます。早く中へ入つてください」

「いいんですか」

「中身を確認させてもらいます。……あなたも雨の中、ずっと待つているわけにもいかないでしょ」

「……………そうですね」

「今、鍵を開けるから……」

と、そこで電話は切れた。やがてその家の玄関のドアが、半分だけ開いた。そおっと覗き込むように顔を覗かせた相手に、私はどびきりの笑顔を浮かべてやつた。

あの母親が単なる小心者でしかなかつたことに、少々私は幻滅していた。何故、あの時のように、凛とした態度で接してこなかつたのだろう。何故、こんな簡単な嘘に、引っかかるたりするのだろう。あの我が子を思つ母親の姿というのも、単なるポーズでしかなかつたのだろうか。親の愛情なんて、やはりこんなものなのだろうか。もしそうならば。結局自分の欲求を満たすために、四人の人間を死に至らしめたといふことだけならば。

その罪は、裁かれなければならぬだろう。

私は玄関まで進み、傘をたたんでゆっくりとその家に入ると、後ろ手でドアを閉めた。

私が家を出たとき、雨は前より強くなり、風も出てきたようだつた。私は自分の火照つた体を冷ましたくて、そのまま駆け出してしまいたかつたが、これはまだ始まりなのだと思い直し、赤い傘を広げて駅への道を進み始めた。傘の柄を折れんばかりに、ぎりぎりと握り締めながら。

途中で、例の馬の遊戯具のある公園が見えてきた。この日は、雨の中でも遊ぶほどの元気な子供たちの姿は見えず、ひつそりと静まり返っていた。私は気まぐれにまた中へと入り、その遊戯具の前に立つた。

雨の日はやはり嫌いだ。

また、今日も、私に、忘れることのできない、思い出を、ひとつ、作つてしまつたから。

私のしたことは正しいことなのだろうか。

あの日この公園で思つたこと。その後で私がとつた行動。さらによ知つてしまつた真実。そして……彼の死。

黒服の男も最後に荒っぽい手を使つたものだ。彼がいたあの部屋ごと爆破してしまつなんて。その時一緒にいた例の娘は、かなりの火傷を負つたものの、一命はとりとめたようだつた。マンションの住人たちも、軽い怪我をした者が数名いただけだつたという。あれだけの騒ぎとなり、あれだけの規模の爆発が引き起こされたにもかかわらず、なんと都合の良いことに、結局命を落としたのは彼一人であつた。

それでも、一步間違えば大惨事に発展していたかもしれないためか、警察もかなり力を入れて捜査を進めていたようである。そしてもちろん、私もあれこれと取調べを受けることになつたが、あいにくと警察は有益な情報を引き出すことはできなかつた。私が肝心なことを何一つ口外せず、知らぬ存ぜぬを押し通したためである。

警察はここ数ヶ月の間に、同じ高校のクラスメイトだつた人間が、四人も続けて謎の死を遂げていることに気がついていた。そして後の二人（島崎さんと彼のことだ）が、明らかに何者かの手によって殺されたのだということを重要視していた。さらには、私が死の直前に島崎さんに会っていたこと、殺された現場の公園を徘徊したことまで突き止められていた。おそらく私が一番の容疑者と目されていていたのであろう。かなり長い時間、尋問を受けていた気がする。だが結果的に私を逮捕するまでに至らなかつたのは、私の自白が取れなかつたことと、余りにも事件が非現実的で突拍子もなかつたこと、そして犯行を裏付ける証拠が不十分であつたためだろう。私に彼を殺す動機はあつても（それが単なる寝取られただけだという陳腐なものであつても）、島崎さんたちを殺す動機は無く、最初の二人にいたつては確固たるアリバイも判明して（その日は運良く私のバイト日であつた）、すべての犯行は不可能であるという結論が出されたためである。この四つの死を関連付けて考えようとした警察にとつては、いささか暗礁に乗り上げた展開となつた。加えて言つなら、例えば彼の死の際に使われたと思しき时限爆破装置について、それらを作るために必要な知識や技術が私にはないことは、調べてみればすぐにわかることだつた。

では、共犯者はどうか。彼の背後にあの娘がいたように、私の背後にも別な男がいたのではないか。これも私という人間にに対する聞き込み等の調査が進められると共に、おのずと否定されることとなつた。以前にも述べたごとく、私の毎日はバイト先とアパートとの往復だけにほぼ費やされていたし、親しい知人友人はもちろん、直接会話を交わす人間もごくわずかに限られていた。家族とは連絡が取れない（取らない）状況のままである。たちまち「地味で無口で世間知らずの陰気な女」のイメージが、警察にも根付くこととなつた。

実際には、私の側にはあの黒服の男がうろついていたわけだが、捜査はその存在を突き止めるまでにはいたらなかつたようである。

それは例の不良三人組の一件が、警察にも知られていなかつた点を見てもわかる。彼を含めた四人の死がこうして刑事事件となつて騒ぎが大きくなつていくのと対照的に、あの事件は何の痕跡も残されず、男の影と共に霧の中へと消え失せてしまつていた。男の「イレギュラーな一件」という言葉が思い出される。結局「愛人説」「共犯者説」も可能性が低いとして削除されたのであつた。

だからといつて、すべての容疑が晴れたというわけではない。今は「灰色に近いが黒ともいえぬ」状況であるに過ぎない。いずれは私だけでなく、向井青年の母親のもとに捜査の手が伸びることも時間の問題だつたろう。警察からのきびしい追及に、あの形ばかりの毅然とした態度で立ち向かうことができたのだろうか。……だが、あの女がその恐怖におびえることも、もうなくなつた。私はあの黒服を除けば、事件の真相を知る唯一の人間となつたわけだ。

確かに時間の問題だ。私はできるだけ早く、自分のやるべき」とをやらなければならない。

そしてまた私は思う。彼にとつて私の存在とは何だつたのだろうか、と。

田舎から彼の両親が遺体を引きとりに見えたとき、私は自分の立場がいかにあやふやなものであつたかを、いまさらながらに痛感させられることとなつた。彼は私のことを何も話していなかつたようなのである。私とご両親との初対面は良い形では訪れなかつた。何より私は彼を殺した容疑者でもあり、彼を不幸にした張本人だと目されていたのだから。

もつとも、私は彼を殺してはいないし、警察も（証拠不十分であったので）すぐに私を釈放している。しかし、向こうは明らかに私を煙たがっていた。私と穩便に手を切りたがつっていた。これ以上、息子の醜聞を世間に広めたくなかったのだろうし、どうやら重症を負つた娘の両親からかなりの剣幕で乗り込まれたらしく、私からも妙な因縁をつけられるのを非常に恐れていたようだ。確かに自分たちの息子が家出同然の女とずっと同棲をしていた上、実は別な女と

も一戻をかけており、突然その女のマンションで一人とも爆破事故に巻き込まれたばかりか、さらにはどうやらそれは単なる事故ではなく、何者かに深い恨みを受けた末の、前代未聞の連續殺人の犠牲者になつたかもしれないとあっては、「両親の立場や気持ちもわからぬでもない。

私にしてみれば、そんないざこざはどうでも良くなつていた。その時すでに、私はある決意を胸に秘めていたからである。

私が伝えた要求は一つだけ。私たちが住んでいたアパートの契約が満了するまで、あの部屋に住まさせてほしいということだった。今すぐ、どこか別なところに住むことは難しいから、というのが相手への表向きの理由だった。けなげに懇願する態度を貫いたのが効いたのかもしれないが、彼の遺品はすべて両親に返すという条件で、聞き遂げられることとなつた。しぶしぶと言つた様子で、強硬な態度にも出られないことが歯痒そうであった。

私は彼の両親にも幻滅していた。それはつい先刻、向井少年の母親にも感じた気持ちだつた。の人たちは、もともと私とは無縁の存在だったのだ。そして今後も関係をもとうなどとは、露ほども考えなかつた。これからは彼の問題ではなく、私の、私自身の問題に、私一人で取り組まなくてはならないのだ。

別に彼と住んでいた部屋に、思い入れや感傷があつたわけではない。私は活動するための拠点を確保したかつただけなのだ。……ただそれだけなのだ。本当に。

そして今日、私はやるべきことをやり、知るべき情報を手に入れた。

私がさらに行おうとしていることは、これまでの私の人生以上に滑稽なものになるのかもしれない。すべてが終わり、もし他の誰かがこの一連の出来事の真相にいたることがあつたとしたら、いったい何と思うのだろう。馬鹿げた行為と笑うのか。それとも無意味な所業と蔑むのか。

しかし……ことの本質は、ひどく単純なもののはずである。自分

のために何ができるのかということ。そしてその行為がかえって、自分に対しどういう意義があるのかということ。自身に納得ができない、その行為がどんなものであるか、それはそれで良しとしてもいいのではないだろうか。

私は踵をかえし、公園を後にする。次に私がすべきことは、アパートに立ち返り、男からの連絡を待つこと。それはかつて私が守れなかつた約束と同じ行為ではあるが、今度の場合はその意図が大きく異なつていた。すなわち、あの男が私の誘いにのるかどうか、にかかりついている。だが、もし、今回は駄目でも、いつまでも、あの男の姿を追い求めるだらう。何処にしようとも、それこそ何年かかるうとも。

いつか、きっと。

私のために。私なりの決着をつけるために。

その十八

携帯電話がなつた。もつと動じる」とはなかつた。三回、四回。何度も鳴り続ける携帯をみながら、なかなか出ようとはしなかつた。大丈夫。まだまだ落ち着いている。そして五回目のベルが鳴つたあとで、私はそれを手に取つた。

「はい」

「……私は？」

名乗らずとも、この携帯電話にかけてくる者など、もはや一人しかいない。

「早いんですね。もつと時間がかかるものと思つていました」

男は答えなかつた。

「私からのメッセージだとよくわかりましたね」

「ええ……あなたのことですか？」

「大した自信ですこと。あなたはストーカーになれる素質がありますよ。この部屋に盗聴器まで仕掛け、私の行動を逐一知つていたわけですものね。彼は死んだのに、まだ私の監視を続けているのですか？」

私はつとめて明るい声で話した。向井青年の母親へ電話した時と同じトーンで。

盗聴器の件は、母親が吐露したことだ。種を明かせばなんでもないことで、男は私の前に現れるタイミングだけを考慮すればよかつたのだ。そうして私の心に最大限ショックを与え、自分の行動に対する目くらましとした。だがもうその手には乗らない。

「……なぜあんなマネをしたんですか？」

「先に聞いているのは、私ですよ」

「あんなに目立つことをすれば、いやでも目に入つてきます。私だけではなく、警察もそうです」

「それは何をさしておっしゃっているんです？」

さて、男は私の期待に沿うてくれるであろうか。それとも、私の挑発を見事かわしてしまつたのだろうか。

「すべてです。今日、あなたが何をなさつたかも知っています」

「そう……ですか」

どうやらまつすぐに私に対峙してくるようだ。まあ、それならそれでかまわない。

「何故、あんな馬鹿なことを」

「馬鹿なこと？ あなたがいつもやつていらっしゃることじゃありませんか」

「私の場合は……仕事です。きちんとした報酬が得られないのであれば、決してしない行為です」

「こちらからあなたに連絡を取る術を知らなかつたんです。あなたはいつも、突然姿を現してばかりですもの」

だから、ここまで自分を追い込まねばならなかつた。だから、その手を汚さねばならなかつた。だから……。

「しかし……」

「じゃあ、きちんとした依頼をして、きちんとした報酬をお支払いするなら、私なんかの頼みでも聞いてもらえるんですか」

「えつ……」

「実はもう一人、殺してしまいたい人物がいるんです」

だから、こうして「真実」を伝えなければならなかつたのだ。

「もう一人……？」

「ええ。……私、知らなかつたんです」

「何をですか」

「人を、たつた一人の人間を始末することが、あんなに大変なことだつたなんて」

あの母親の姿がフラッシュバックしそうになる。私は慌てて、それを頭の片隅へと追いやつた。

「……」

「やつぱつじゅうじゅう」とは、プロに任せたほうがいいと思いました。

だからあなたにお願いするんです」「それは……誰です……」

私は男の問いかけを遮つて、

「ひきうけてくださるんですか」

「……まず、その名前を教えてください」

「電話なんかじゃこんな大切なことはお話できません。直接会つて、お話ししたいわ」

と、畳み掛けた。そう。このことは面と向かつて、一対一で話さなければならないことなのだ。そして、

「あなたもよくご存知ですよね。私には時間がないんです。すぐにでも、お頼みしたいんです」

と、さらに言葉を続けた。

「……」

「……会つて下さいますね」

「……わかりました」

低い声だった。無理に搾り出したかのよつこ、しわがれていた。「では、落ち合の場所を決めましょう」

私はそんな男の態度を、あえて無視して話を進めた。

「……あなたと初めてお話した場所で、お会いしたいです」「初めて話した場所？」

男がオウム返しに問い合わせる。

「私が不良たちに絡まれた後、あなたと一緒に逃げ込んだところですよ。頭上に高速道路が通っていた、あの人気のない公園です」

「ああ……憶えています」

「あそこにしませんか。いいですね」

「……ええ」

「時間は今から一時間ほど後で。いかがですか」

「……わかりました」

しばらく互いに間が空いた。あの男は今、何を考えているのか。

私の考えは、私の想いは、どれほどあの男に伝わっているのだろう。

「あの」

と、今度は男の方から声をかけてきた。

「何ですか」

「あ、いえ、……なんでもありません。会つた時に話すことにしてしま
しょう」

「……………ですか」

男は何を言おうとしたのか。私に何を伝えようとしたのか。

「それでは後ほど……」

「……………はい」

電話は切れた。慌てるな。すべては会つて話せばすぐにわかるこ
とだ。そしてそれは、何もかもが終わりを迎える瞬間でもあるのだ。
私はテーブルの上に携帯を置いて、大きく息をついた。そしてや
おら立ち上がり、着替えに取り掛かり始めた。着て行く服はすでに
用意してある。黒のタートルネックのセーター、黒のGパン。靴下
も黒っぽいのを選び、ベースが黒いスニーカーも購入していた。そ
して黒の男物のハーフコート。これは私にとって、彼の唯一の形見
の品であった。あの両親にも渡さなかつたものである。

男物だけに小さくやせぎすな私の体には、かなりだぶだぶとした
状態となつたが、袖をまくるなどして、何とか見てくれだけは整
えた。とはいえる、鏡で自分の出で立ちをみれば、やはり全身黒尽くめ
という格好は異様であった。夜ならともかく、昼間この格好で出歩
くのは遠慮したい感じだった。

だがこれは特別の服装だ。これがあの男と闘うための、戦闘服なのだ。

それにこの大きな彼のコートが、私の秘密の武器を隠してくれる
。 私は台所に行き、流しの下の戸棚から、長い刺身包丁を取り出し
た。

まずはこれが第一の太刀である。

もちろん、こんなものであの男を傷つけることができるとは到底

思えなかつたが、可能性が決してないわけではない。このところ毎日、布団や枕を実験台にして、素早く取り出して突いたり刺したりできるように、何度も練習を繰り返していた。あの男にだつて、何らかの隙を見せる時はあるはずだ。ほんの一瞬でもいい。私はそこに、すべてをかけようと思つていた。

私は包丁の刃の部分をタオルでまいて、腰の辺りに仕込んだ。さらにもう一本、小ぶりのナイフを用意して、こちらは刃のあたりにハンカチをまきつけ、コートのポケットに忍ばせた。これが第二の太刀。だがこれは、もし男に歯が立たなかつたときに、己の喉笛を搔つ切るための品であつた。

あの黒服の男を殺す。それも私自身の手で。私は彼が亡くなつてから、ずっとここのことだけを考えてきた。

彼の死に対する復讐？ そんなものではない。これこそ今度の一件に対する、私なりのけじめのつけ方なのだ。古い仁侠映画のようだと、笑いたければ笑えばいい。私は自分が不器用な人間であることは重々承知している。いつかあの黒服も言つたように、なんでも一人で背負い込んで、なんでも自分の力だけでやろうとして失敗してきた。もつと違うやり方をすれば、彼を助ける方法もあつたのかかもしれない。いやそれよりも、もつと平凡で普通に幸せな生活を、確かに送れたかもしれないのだ。

ある映画の中でも語られた、こんな話を思い出す。蟻が川を渡ろうと、蛙に橋渡しを頼んだ。蛙は「背負つたところで刺されてしまつたら死んでしまう」と言って断ろうとした。だが蟻は「もし渡つている最中にきみを刺してしまつたら私も死んでしまうから」と抗弁した。それに蛙も納得し、蟻を背負つて川を渡り始めたのだが、二匹が川の中央に差し掛かつたとき、蟻は蛙を刺してしまつた。蟻と一緒に沈みながら蛙は叫んだ。「どうして死ぬとわかつていながら刺したんだ」とすると蟻は言つた。「わかっていても止められない。それが私の性なのだ」と。そうして二匹は死んでしまつたのだった。私はそんな蟻のような人間なのだろう。それならば最後まで、蟻

であり続けよう。そしてその一刺しを、あの黒服の男に見舞わせることだ。たとえ失敗しても、自分を責めることだけはするまい。そんな自分を、できれば誇れるよう思えたら……。

すべて準備は整った。私は部屋を出る前に、もう室内をぐるっと見渡した。もうここへは戻つてくることもない。別に感傷的な気持ちはなかつた。彼の私物だったものはすべて運び出されており、テーブルが部屋の中央に鎮座するだけの、がらんとした殺風景な眺めがそこにあるだけであつた。それでも私は、この光景をわすれまいと、その日にしっかりと焼き付けた。

はじめて黒服の男と出会つた朝に感じたあの感情。それがまた少しずつ湧き上がつてくるを感じていた。私はまた変わろうとしている。だがそれは、まるつきり別な人間に代わらうというわけではなく、過去の自分やこれまでのすべてを抱えたままで、もう一段階上に上がるといったような、そんな成長であることを願つた。

そうであれば、私は強くなることができる。

そうであれば、私はまた生きて行くことができる。

さあ行こう。私は軽く両の頬をはつて、一二三度屈伸運動をしてから外へ出た。

雨はもう降つていなかつた。そして今度は大きな月が、私を照らしていた。

その十九

公園へは私の方が先についていた。頭上を走る高速道路はこんな時間でも車の往来が激しく、特に大型トラックが通過した際には、巨大な騒音と地を揺るがすかのような振動が園内に響き渡っていた。私はあの日に座ったベンチを探し出し、埃を払つて浅く腰掛けた。両の手がかじかんでしまわないように、何度も握つたり開いたりを繰り返した。

大きな影が公園の外灯の光を遮つた。私が顔を上げると、長身の男が立つていた。

黒服の男だった。

「……どうも」

男はそう言って、かすかに笑つた。いや、笑おうとしていた。唇の端を少しだけ緩めて、肩をすくめるような動作をして見せた。だが、どちらも妙に力が入つていて、ぎこちなさが目立つた。

私は立ち上がり、男の正面に向き直つて、まずは深々と頭を下げた。そして勢いよく頭を上げると、精一杯の笑顔を見せた。

「わざわざ来ていただきて、ありがとうございます」

私の笑みは、男のそれよりはうまくできただろうか。

「その……格好は？」

やはり男は私の格好に訝しさを抱いたようだ。私はわざと外灯の真下へ、明るいところへ移動して、その姿を見せ付けるようにくると回つて見せた。

「どうです？似合っていますか？あなたに会うために、わざわざしつらえてきたんですよ」

私は両手を後ろに組んで、顔を男に突き出すようにして、なるべくはきはきとした口調で答えた。おろしたてのドレスを見せるお姫様、と言つた風に。

「……」

男の眉間に皺がよつていて、不快感を上手に隠す術も身に着けてはいられないらしい。本心とは異なる表情を取り付くうつ事に関しては、私も人のことは言えないが。

「お気に召しませんか？」

それでも私は、なんとか男を挑発する態度を崩さないようにした。

「……ええ」

男は軽く頷いてから、

「あなたは、もっと明るい色の服が似合いますよ」と、意外な台詞がかえつて来た。

「えつ」

男の言葉に、私の虚勢の鎧にひびが入る。

「私は特に女性の服に詳しいわけではありませんが……前から思つていました。ダークカラーの服よりも、赤とか黄色とかパステルカラーなんかを身にまとつた方が、映えるんじゃないかな、と」

「……」

「あ、いや、本当にファッションなんて良くわかりませんから。忘れてください、すみません」

男はまた詫びの言葉を口にして、俯いてしまつた。私の方はといえば、全身が火照るような感じがして、これもまた男の方が見れなくなつて俯く始末だつた。なんだなんだこれは。下らぬ世辞に動搖などするな。

「あ、ありがとうございます」

それでも思わぬ礼の言葉が出た。それを気に一人とも顔を上げたので、互いに目と目があう状況となつた。私はまた恥ずかしくなつて、男に向かつて背を向けた。なんだなんだ何をやつているのだ、私は。

「あの、その、それはさて置いて。……仕事の話を、しましょう」私はなんとか呼吸を整えながら、振り返つてそう話した。男ももう赤くなつてはいなかつた。

「仕事、ですか」

「ええ。あなたに、依頼したいことが、あるんです」

私と男との立ち位置には、まだかなりの距離があった。ここで私が懐から包丁を取り出し、男に向かって切り付けたところで、さらりとかわされてしまうのが落ちだらう。もう少し距離を縮め、相手の不意を突かなければ、男の体に一太刀浴びせることなど無理なようと思えた。

「電話でもいいましたけど、私は殺してやりたい人間がいるのです
「……そのようですね。それは一体誰なのです」
「それを確認する前に……。本当に私の頼みを聞いてくれるのです
か」

「……ええ」

男は寂しそうにつぶやいた。

「それが、誰であろうと？」

「ええ。あなたの頼みですから」

「私の……頼み、だから？」

「そうです。他でもない、あなたからの、頼みだからです……」

まっすぐに私の目を見て話す時の男の言葉は重く、深かつた。真剣そのものの男の表情に、私はまたもくじけそうになり、足元が崩れて、かすかによろめいた。

「大丈夫ですか？」

男が飛んてきて、左から私の肩に手を回す。大きく厚い手で支えられた私は、倒れることなくその体を男の懷へもたれかかるようなりとなつた。私の顔がちょうど男の胸の位置にきている。背の方に仕込んである刺身包丁が相手の体に触れぬように、バランスを取らねばならなかつた。

「……ごめんなさい」

私は詫びを入れたが、体は男の側からは離さなかつた。厚い胸の奥から、心臓の音が素早く脈打つていて。それは私の心臓の音ではなく、この黒服の男のものであつた。

「少し休みますか。そこベンチに座りましょう」

私は男に導かれるままに、歩を進めた。視線の先に見えるベンチは、あの日一人で初めて会話を交わした場所でもあった。

「ええ……」

いつ刃物を出すか。私はそのタイミングを見計らっていた。席につく瞬間に、座ると見せかけて一気に立ち上がり、勢いをつけて下から切りつけるというはどうか。いや、それよりも男がベンチを背にしたときに背後に回りこんで、まっすぐに突き刺すというのは？ 切るより刺すほうが致命傷を与えられるのではないだろうか。

「さ、どうぞ」

男がベンチに座るよう誘う。男は私の肩に両手をかけたままだ。立ち位置は私の左側にいる。右手で背中の包丁を抜きとれれば、そのまま体を左にぐるりと回して、男の腹の辺りに刃を突き立てることができる。チャンスは……。

今だ！

私は腰に挟んでいた包丁をすばやく抜き取り、一気にその刃を男の腹部にめがけて刺し込んだ。だが「すばやく」刺したつもりだったが、すでに刃先は空を描いていた。そして大きな手が私の手首をつかむと、くるりと簡単にねじ上げられた。男は私の背後にまわって、さらにぐっと力が込められ、その痛みに私はあつさりと武器を落としてしまった。包丁が地面を転がる乾いた音が響いていた。

「……こんなことだらうと思いましたよ」

「……離してください」

「こんなもので、私を傷つけられるとお思いですか」

「……」

悔しい。所詮私は何もできないのか。この男に対してだけでなく、この世のすべての出来事に対して。私は唇をかみ締めた。

「あんな……あんな男のために、ここまでして、何になるつていうんです」

「違います！」

私は叫んでいた。

「違います。彼のためなんかじゃ、ありません」

私の手を捕らえられていた痛みがふつとやんだ。私はすぐさま男から離れ、相手と真正面から向き合った。握られていた手首がじんじんと痛む。おそらく男の手の跡がくつきりと残されていることだろう。私はもう一方の手でそこをさすりながら、大きく肩で息をして呼吸を整えようとした。男に向かうための、臨戦態勢をとろうとしていた。

「私は……私のために、私自身のために……あなたに、あなたの体に、せめて一太刀、あびせたいだけです」

「わたしの……体に?」

「そうです。……本當なら、できることなら、あなたを殺してやりたいと、思っています」

「……」

「私があなたに、歯が立たないのは重々承知しています。もしもあなた以外に、殺しを引き受けてくれる人がいれば、私はこの身をも投げ打つて、あなたを始末することを依頼したでしょう。でも、私はそんな人を見つける術も、知識も智慧もありません。だから、だから……」

「そんなに……私が、憎いのですか」

私は大きく首を振った。

「では、どうして……」

「……わかりません」

わからなかつた。本当に。でも。

「あなたは、優しい方です。身を挺して私を守つてくれたり、いろいろと助言や忠告も与えてくださつて、本当に感謝しています。できることなら、私も過去のことは断ち切つて、新たに出直せねばと思います。でも」

「でも……なんでしょう」

「でも、私はこれまで何もしてきてはいなかつた。何も残しては来なかつたんです。実家にいるときは母親の言いなりになり、彼と一緒に

緒のときは彼の顔色ばかり伺っていました。怖かったんですね。あの人たちの手を離れるのが。叱られたり責められたりもされていましたけど、私はそれを受け入れてきました。そうすることだが……いえ、そうすることで、逆に自分を守つてきたんです

「ですが、もはやどちらの手もあなたに及ばなくなっているはずです。過去の呪縛から逃れて、新しい未来に向かって生きてゆけばいいじゃないですか」

「でも、それは、あなたが用意してくれた『未来』なんですね」「えっ……」

「私は、ひとりになりました。あなたのおかげで、彼とは永遠に別れることとなりました。だけど、私は何もしていません。それにこれは、私が望んで得た結果でもありません」

私は何を言つているんだろ？ だが私の言葉は止まらなかつた。「結局私は、誰かに頼つてでないと生きていけないんです。やがていつかまた、私は何も考えずに、ただ身を寄せるだけの場所を選んでしまうに違いないんです。これじゃあ……」「れじやあ、駄目なんです。何も変わつてはいないです」「……」「……」「……」

「私は自分で、自分の生きる道を決めないといけないんです。自分ひとりの力で、立たねばならないんです。そして、そのためにはあえて頼れる幹ですらも、切り倒さなくてはいけないと思つたんですね」「……」「……」「……」

「……つまりは、私は余計なことをしてきただことですかね」
しばらぐの後、男がつぶやいた。

「いいえ。あなたは私のことを本当に想つてくださいました

「でも、それは無駄であったと

「そこまでは……」

「そなんでしょう？」

男は例の悲しそうな表情で問いかげた。

「私は本当にあなたに感謝しています。すべては……私の単なるわがままに過ぎないのですから」

「そうでしょうか。……それだけなのでしょうか……」

男は私から視線をそらして、一三歩ほど別方向に歩いていった。そして何か意を決したように、すっと向き直った。

「あの……」

「私はやはり甘かったようです。あなたのために思つてやつてきたことが、何もかもあなたの枷となつていた。私はモラルを曲げるべきではなかつた。肅々と人殺しとしての、ルールを守ればよかつたようです」

男はやうう言つて、ゆうくくりと私の方へ歩いてきた。そのまままつすぐに私を見据えている。

「……」

来る。私は直感的にそう思つた。何が？ 私の命を奪うものが。男が私のすぐ側までやつてきたら、男は私を殺すことだらう。それこそ一瞬の間に。私は本能的にそう感じた。極度の緊張感が全身を貫く。

「……」

男が歩いてくる。私は息をのんでそれを待つた。おのずと手が、先ほど男に握られたのとは逆の方の手が、ポケットに伸びていく。そこには小さなナイフが忍ばせてある。

「……」

男がさらに近づいてくる。この小さなナイフは己の喉を搔つ切るために準備したのではなかつたか。しかし一方で、これで男を傷つけられないかという考えが沸き起こつていた。私は迷つていた。私は男に敵うわけはないのだ。ならば、いつそのこと……。

「……」

男がついに私の眼前に立つた。ええい、ままで。

「……！」

私は目をつぶつて、そのままポケットからナイフを取り出し、男

へ切りつけようとした。しかしながらも目前でその手は男の手につかまれ、私の攻撃は防がれてしまった。

「……こんなもので、私を傷つけられると本当にお思いですか」

男は先ほどと同じような台詞を言って、ぐつとつかんでいる手に力を込めた。その痛みに思わず私の手から、またナイフが滑り落ちてしまう。

「私を……本当に殺してしまいたいのですね」

私が目を開くと、ちょうど真正面に男の顔が見えた。いつも悲しそうな表情は失せて、真剣な面持ちが浮かんでいた。

私は頷いていた。

「……そう、ですか」

そう言つと、つかんでいた方の手を緩め、もう一方の手を優しく私の手の上に重ねてきた。

「小さな……手ですね」

男の手は暖かだった。私が戸惑つていると、いつしか男は温かな表情となつて、かすかに笑みも浮かべていた。

「人を傷つけるときは、むやみやたらと刃物を振り回しては駄目です」

男は少しかがんで何かを拾い上げた。それは最初に私が使用した刺身包丁であつた。

「人の心臓は、左胸からやや中央に位置しています。具体的に言えば、胸骨の左下から一二本目のあたりです」

そう話しながら、拾った包丁を改めて私の手にしつかり握り締めさせた。

「まっすぐに心臓を貫こうとすると、この胸骨の骨の部分が邪魔になります。ある程度間隔があいて、隙間もあるのですが、そこにうまく刃を滑り込ませることは難しいです」

片手で上着のボタンをはずし、空いている方の手で指差しつつ、自分の体をモデルにしながら、人体の構造を逐一説明をし続けるのだった。

「ですから、心臓を狙う場合は、下から胸骨の隙間に滑り込ませるよつに……。そつ、丁度あなたが今包丁を構えている位置から、私の胸へ突き上げるよつに刺しこめば、ベストということになります」男は片方の手で私の小さな手を包みこみ、指差していたもう一方の手を下から支えるよつして添えてきた。ひょつとして、まさか……。

「いいですか。狙つのはこゝです。そこからこゝを田指して、一気に突くのです」

さらに男はワイシャツの上から、刃先で自らの心臓部を指し示した。まさか、まさか……。

「……」

男は笑つて、そして、

その包丁を私に握らせたまま、一氣に自分の胸にその刃を突き上げた。

「！」

刃が肉にのめりこむ嫌な感触がする。そして柄の部分からゆつくりつたつてくるのは、男の血だ。生暖かい血が手首から地面へと、ぽたぽたと滴り落ちていく。

「あ、あの、どうして……」

動搖する私を前に、男は

「あなたが、やりたかったことは、これでよつ……？」

と言ひ、さらに、

「私を、殺すこと……なのでよつ？」

と、声を絞らせながら続けた。

「……」

「よくぞ覧なさい。人が、人を、殺すと言つことは、こゝこゝ……」

そう言つと、男はガクツとひざを突いて崩れ落ちた。つかんでいた私の手からも離れ、胸に包丁をつき立てたまま仰向けに横たわった。

「大丈夫ですか……！　き、救急車を呼んで来ます」

やつと我に返つた私が、急いでその場を離れようとする。男の大きな手が、また私の手首をつかんできた。だが今度は先ほどのような力強さは微塵も感じられなかつた。

「待つて、ください……。もう、無理ですよ……。この、血の、量、だとね」

黒い服装のおかげで目立たないだけで、あふれ出した血液はほとんど全身を染めているに違いない。さらに男は青ざめた表情で、笑みを浮かべようとした。ああ、どうしてこの人は、いつも笑おうとするどぎこちなくなるのだろう。何故か私はそんなことを考えていた。「すいません……ちょっと、このまま横になつていますね……」

男の息は、だんだん強く、早く、荒くなつていくかのようだつた。私はその体に手を添えることしかできなかつた。何もできない自分が、いつものように無力な自分が歯がゆくなつて、私は俯いてしまつた。すると……。

「何を、して、いるのですか……？」

男の声に私は顔を上げた。

「今ですよ。……今なら、私にどじめをわす」とが、できますから「この人は、何を言つているのだ？」

「な、何をおつしやるんですか。まだ間に合います。今から救急車を呼べば、きっと助かります」

「駄目ですよ。……それじゃあ、何も、かわらないじゃないですか」「えつ……」

「あなたが、私を、殺すのです。そのために、いらしたのでしょうか。こうして、幹は、倒れましたから、どじめを……」

ああ、この人は、私の勝手な願いを、かなえようとしているのだ。文字通り、体を張つて。

「この包丁に、あなたの体を、乗せるよつとして、ください。そうすれば、一気に、心臓まで……」

「そんな……」

「今までも、長くはありませんが、刃が心臓を傷つければ、す

ぐに……

「何故ですか？　何故私なんかのために、こんなことまでしてくれるんですか？」

「……」

男はいつたん目を閉じて、荒い呼吸を整えながらこう言った。

「『あなたのため』だから、ですよ……」

馬鹿だ。大馬鹿者だ。この人は。私の量の眼から大粒の涙が滴り落ちた。血に染まつたシャツの上に、新たな滲みを作りつけた。

「さあ……手を置いて」

男が私の手をいざない、腹部に刺さつた包丁の柄の部分に添えた。「上から、体をのせれば、奥まで差し込めます……」

「……」

私は言われるままに、包丁の上に両手と上体を乗せるように合わせた。だがなかなかそれを差し込むことはできなかつた。

「どうしました、さ、早く……」

「あの……！」

私の呼びかけに、男はゆつくりと瞼を開いて、私を見た。私と男の視線がひとつに合わさつたとき、私は心の中で、

「……ありがとう……」

と、伝えていた。そしてそれに對し、男は、はじめて、自然な笑みを、返してくれた。

……そしてそれが最後の合図だつた。私は目をつぶり、体ごとその包丁へ体重をかけて……。

男は悲鳴もうめき声も上げなかつた。ただ反射的に体が硬直しただけで、それはすぐに弛緩され、それからピクリとも動かなくなつた。おそらく後から考えるに、そのとき刃は見事に心臓まで達したのだろう。それによる出血性のショック死をひきおこしたのではないだろうか。いずれにせよ、この男の息の根を止めたのは私だ。私が殺したのだ。

私は開いたままの男の眼を閉じてやつた。そして長い両手を胸の上に添えてあげた。包丁も抜いてやりたかったが、柄が血で滑ってしまう上、その刃が胸の奥深くまで差し込まれていて、どうすることもできなかつた。

それから私は……声を上げて泣き始めた。何に対する涙なのか。
誰に対する涙なのか。

決まつているではないか。

誠実で、お人よしで、生真面目すぎて、不器用な、
それでも一途に私のことを想ってくれた人。
これはこの黒服の男、すなわち……。
『彼』に対する涙なのだ。

エピローグ

そうして私は今、暗い部屋の中にいる。

「彼」がまつたく動かなくなつてからしばらくして、私は一人交番へと出向いた。深夜に全身血まみれの女が突然現れたことに、当直の警察官は驚いてかなり取り乱していた。私は淡々と供述し、公園で「彼」を刺して殺した、ということを伝えた。

ところがその警察官と共に、あらためて現場を訪れた私の目には、とんでもない光景が写ったのだった。

死体がなくなつてしまっていたのである。

確かに「彼」が息を引き取った場所には、おびただしい血の跡が残されていた。人が一人横たわっていたという痕跡もあった。だが肝心の「彼」の姿がない。凶器も見当たらない。それでいて、その死体を動かしたり引きずつたという形跡は見られない。まさしく煙の如く消え失せたといった感じであつたのだ。

すでに述べたとおり、私は血まみれであつた。後の検査でその血は、私以外の人間のものであることは確認され、現場の血痕とも一致した。私が何かを行つたことは間違いない。だが、一体私が「何」をやつたと言うのだろう。一体私は「誰」を殺したというのだろう。

当然警察は、その後の取り調べで、事態の真相を探ろうとした。そして私は起こつたことを順に話した。曰く、かつてのいじめ事件の首謀者を抹殺すべく「殺し屋」を雇つた母親がいたこと。曰く、その標的となつた男の一人と私が「たまたま」同棲していたこと。曰く、その同居人が死んだ後で今度は私がその「殺し屋」を殺そうと企んだこと。曰く、そしてあの夜あの公園で「殺し屋」をついに殺してしまつたこと。この数日の間に起こつた出来事を滔々と語つた。だがそのことについて警察は、当然のごとく百パーセント信用しようとはしなかった。もっと無難で理解しやすい現実的な着地点を示した供述を求めた。だが、私は嘘はつかなかつた。同じ話を繰

り返した。それを相手がどのように感じ取ろうが、まつたく考えなかつた。

いざれにせよ、今後私にどんな裁定が下るか、それはわからない。例の母親の件もあるので、無罪放免とはいかないと思うが、どうやら刑務所ではなく病院の方に隔離されるという可能性もしてきた。しかし、私が「彼」を殺してしまったということは変えようも無い「真実」であるので、たとえどのような結果となろうとも、私は素直にそれに従うつもりである。

私は今後も繰り返し、実際に起こつたこと「だけ」を述べるつもりだ。その一方で、もう一つの「真実」「何故」そのようなことが起こつたか、つまり「動機」やその時の互いの心情の起伏などについては、誰にも話すまいと決めていた。「彼」が私をどう想つていたか、私が「彼」をどう想つようになつていったか。それをつまびらかにしてしまつたら、私たちがやつと培うことのできた互いの心の繋がりが、他人に十足で踏みにじられ、汚され、無残に断ち切られてしまふことは目に見えていた。だからこの空想のノートにひつそりと、それらすべての「真実」を包括して書き記すことになったのである。

「彼」の私に対する気持ち。

そして私の「彼」に対する気持ち。

これは守つておかねばならない。ありのままに残さなければならない。そして忘れてはならない。……絶対に。

はじめ私と「彼」は、敵同士として出合つた。しかしその時から「彼」は私のことを考えて、私を見守り、私にとつて最良の道を指示してくれていた。それらは私の愚かさゆえにほとんど実ることはなかつたけれど、おかげで私は過去から開放することができた。さらに「彼」はあまりにもやさしすぎる人であった。そんな「彼」に私は、いつしかひそかに「やさしい殺人者」というあだ名をつけ

るよになっていた。その呼び名は「さわか滑稽なものではあったが、非情さを有しながら誠実でもある」という「彼」の一面性を如実に表しているのではないかとも思つ。なので、恥ずかしながらこの物語の題としてつけさせてもらひことにした。

やせしかつた「彼」のことを、深く心に刻み込もう。「彼」のための物語を紡ぎ、それを「彼」に捧げよう。きっと「彼」も喜んでくれるに違ひない。そして、

いつか、きっと。

また「彼」が突然私の目の前に姿を見せた時、この物語と共に、素直な私のこの気持ちを伝えてあげたいと思うのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336o/>

やさしい殺人者

2010年12月4日20時55分発行